

399  
10

判牒專濟  
第三外  
集全スグルヲ  
X  
Bibliophilischer Politischer Verein

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





399-10

集全スクールマ



法學士佐野學譯

經濟批判

株式會社大鐙閣藏版

大正  
12.6.26  
購求

6.90



マルクス全集

岩波書店出版

経済学批判

第一卷

譯者序

本書は『資本論』第一卷以前に於けるマルクスの経済学説の主要著作の翻譯である。『経済学批判』は一八五九年の刊行、『價值、價格及び利潤』は一八六五年六月二十五日に第一インターナショナルの評議員會にてなした講演、『貨銀労働及び資本』は一八四八年にブルッセル獨逸人労働者協會にてなした講演、『自由貿易論』は一八四九年ブルッセル民主々義協會にてなした講演である。『経済学批判』は私の翻譯、他の三短篇は安倍浩君の翻譯である。本書に私の名を冠したのは體裁上の便宜による。なほ一八四七年の著作なる『哲學の窮乏』も本書に加ふべき性質のものであるが、別に同書を中心に數種の短篇を加へた翻譯が近く安倍君の手により本全集の一部として刊行せられる筈である。

『経済学批判』について一言する。此翻譯はカウツキイがインターナショナル文庫の一冊として發行したものと第七版（一九二〇年版）に據り、旁らエヌ・アイ・ストーンの英譯（一九〇四年版）を参照した。カウツキイはマルクスが一八五九年の初版本に加へた訂正の遺稿に基き一八九七年に改訂版の初版を發行したのであつたが、一九〇七年の次版には『経済学批判序論』の一項が加へられた。それはカウツキイが一九〇二年にマルクスの遺稿中より發見し、一九〇三年に「ノイエツァイト」誌上に公にしたものであつて、マルクス

譯者序



が序説のなかで、『予は既に一般的序論を書き下したが、此處にはそれを省略する』と記してあるものに當るのである。この序論は覺え書きの形のものであつて、文章が流暢なものではないが、生産論、經濟學の性質論、研究方法論、其他の方面に涉り、ブルジョア經濟學を痛撃し、社會主義經濟學の立場を明かにした頗る貴重の議論であつて、マルクスの著作中に於て唯物史觀を明瞭に書き現はした唯一のものと言はれる此書の『序説』と共に甚だ珍重すべきものである。『經濟學批判』の本文は經濟學の徹底的批評の第一歩として着手せられたものであり、續いて次巻に着手する筈であつたのであるが、研究と思案との進行につれマルクスは最初の計畫を變更し、經濟學の全野にわたる一層廣汎にして深刻なる『資本論』に着手したのであつて、『資本論』第一巻の發行せられたのは、『經濟學批判』の發行後の八年目である。『資本論』第一巻第一版の序文には、『ここに第一巻を公にしやうとする作は一八五九年刊行の拙著『經濟學批評』の續きを成すものである。其著手から繼續までの間が斯くも永引いたのは、幾度も幾度も予の仕事の中絶させた多年に亘る宿病の爲めであつた。經濟學批評の内容は、此の巻の第一節第一章に概括されてある。其概括は單に連絡及び完備の爲のみではない。亦其の説明が改善されてある。如何やうにか事情の許す限り、彼の書に於ては單に暗示に止まつてゐた多くの點を本書では一層充分に説明した。反對に又、彼の書に於て詳細に説明された點が本書ではほんの暗示に止められてある。彼の書に收めた價值及び貨幣説の歴史に關する諸節は、勿論本書に全く削除されてある。然

し彼の書の讀者は、本書第一節第一章の脚註に於て、右の學説の歴史に關する新らしい參考資料の提供されてゐるのを發見する。』（高島素之氏譯文）といふ文句が有る。『資本論』第一巻第一篇は基本的部分たる労働價值説の敘述であるが、右の序文に見ゆる通り、同篇は『經濟學批判』に書かれたものを概括したものである。『經濟學批判』と『資本論』との書き方を比較すると、後者の方がよほど碎けて居り、それだけ前者は抽象的な言ひ現はし方に富んである。私はこの歴史的な文献を翻譯することを光榮と感じてゐるが、書齋と街頭とに兩棲する繁忙な私にとつて充分の推敲の暇がなく、燕雜の翻譯をこのまゝ世に出すことを甚だ遺憾とせざるを得ぬ。充分の叱正あらんことを同志諸君に希望する。

大正十二年四月二十一日

佐野學



マルクス全集第十卷目次

譯者序

經濟學批判

第一部 一般的意義に於ける資本

序 說

序 論

第一章 商品……………一

A 商品の分析に關する學說史……………五〇

第二章 貨幣即ち單純流通……………七三

一 價値の尺度……………七五

目次



**B** 貨幣の尺度單位に關する學說史…………… 六

二 流通用具…………… 六

    a 商品の轉形…………… 一六

    b 貨幣の通用…………… 一七

    c 鑄貨。價值表章…………… 一八

三 貨幣…………… 一五

    a 貨幣の退藏…………… 一八

    b 支拂用具…………… 二二

    c 世界貨幣…………… 二三

四 貴金屬…………… 二四

**C** 流通要具及び貨幣に關する學說史…………… 二五

### 價值價格及利潤

序 言…………… 三一

一 生産と賃銀…………… 三一

二 生産賃銀利潤…………… 三七

三 賃銀と通貨…………… 三三

四 供給と需要…………… 三四

五 賃銀と價格…………… 三四

六 價值と勞働…………… 三五

七 勞働力…………… 三六

八 餘剩價值の生産…………… 三七

九 勞働の價值…………… 三五

十 利潤は商品を其價值に於て賣る事に依り得られる…………… 三七

十一 餘剩價值が分解せらるゝ諸種の部門…………… 三八

十二 利潤賃銀並に價格の一般的關係…………… 三八

十三 賃銀の引上が企てられ又は其下落が抗爭せらるゝ主要の場合…………… 三九

十四 資本と勞働との鬭爭並に其結果…………… 四〇



マルクス全集

賃銀労働及資本

四

自由貿易論

四二五

譯註

四六九

卷末

マルクス全集第十卷 目次終

經濟學批判

佐野學譯



## 序 説

予は資本家的經濟の組織を次の順序にて考察する。即ち資本、土地、財産、貨幣、勞働、並に國家、外國貿易、世界市場。予は、最初の三項目の下に於て、近代資本家的社會が分裂して居る三大階級の諸種の經濟的生活條件を討究する。殘餘の三項目の關係は自ら明白である。資本を取扱つた第一卷の第一部は次の諸章より成る。

第一商品、第二貨幣即ち單純流通、第三、一般的意義に於ける資本がそれである。最初の二章が本書の内容を構成するのである。全部の材料は、獨立論文の形態を以て、予の前に存して居る。それは刊行の目的でなく、自分自身、是等の問題を理解して置くために、長い間かゝつて書いておいたものである。而して上述の計畫に従つて是を組織的に完成することは外部の諸事情の如何によるであらう。

予は既に一般的序論を書き下したが、此處にはそれを省略する事にした。何となれば、後に始めて證明せらるべき諸結果を先づ前提するといふ事は混雜を招く感があるし、また予の議論に追隨しようとする讀者が特殊問題より一般問題に眼



を轉ずる決心をせねばならぬといふ事を、近時考へ付いたからである。しかし此處に予自身の政治經濟學的研究の徑路に關する二三の説明を試みる事は必ずしも無用であるまい。

予の専門的研究は法律學であつた。しかし予は單に法律學を、哲學及び史學に關聯して、從屬的の學問としてのみ研究したのであつた。一八四二年より同四三年の間、予は「ライン新聞」の記者として、所謂物質的利益に關して言論を交へざるを得なかつた際、初めて當惑を感じた。森林盜伐及び土地所有權の細分に關するライン議會の討議、當時ライン州の大統領たりしシャベル氏がモーゼル地方の農民の状態について、「ライン新聞」を相手として起した公の論争、最後に自由貿易及び保護關稅に關する議論、是等のものは經濟問題に關する予の研究に最初の動機を與へたものである。他方に於て、其當時は、「餘りに前進」仕様とする善き意思が、事物の認識を超脱せんとしてゐた時代であつたが、哲學的に弱々しく染められた佛國の社會主義及び共產主義の反響が「ライン新聞」にも聞えて居た。予は、この不手際の細工物に反對を唱へた。然し、「アルグマイネ、アウグスブルグ

新聞」と論争するに及んで、予の從來の研究が、此種の佛國思想の内容について何等かの批判を下すには不可能であることが直に明白となつた。そこで、「ライン新聞」の發行者が筆鋒を和ぐることによつて、自己に下された死刑の宣告を免れ得ると妄想して居る際、予は寧ろ喜んで公の生活より書齋に退く機會を捉へたのであつた。

予を困惑せしめた疑點の解決のために企てた最初の勞作は、ヘーゲルの法理哲學の批判的検討であつた。其勞作の序説は、一八四四年巴里で發行せられた「獨佛年誌」に出て居る。予の研究は、法律關係及び國家の形態は其れ自身によりて理解されるもので無く、又所謂人間精神の普遍的發展といふことに依りて説明されるものでもなく、寧ろそは物質的の生活關係——その總和は、ヘーゲルが第十八世紀に於ける英人及び佛人の先例に倣うて「市民的社會」なる名稱の下に包括せし所のもの——に根ざして居る事、而かもこの市民的社會の解剖は之を經濟學に求むべきものなる事の結論に達した。予は經濟學の研究を巴里に於て始めたが、ギゾー氏の追放命令の結果として、予の居を移したブルツセルに於て、更にその



研究を繼續した。かくて予の得た一般的結論而して一旦是を得た後は、予の研究の指南車となつた一般的結論は、簡單に是を次の形式に表はし得るのである。人類は彼等の生活の社會的生産に於て、一定の、必然的の、彼等の意志より獨立した關係に、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に入り込むものである。是等生産關係の總和は社會の經濟的構造即ち眞實の基礎を形成するのであつて、此基礎の上に法制上及び政治上の上部建築が築かれ、且つ一定の社會的の意識形態が之に適應するのである。物質的生活の生産方法は總括的に社會的、政治的及び精神的の生活行程を規律する。人類の意識が其の存在を決定するに非ずして、寧ろ之に反し、彼等の社會的存在が其意識を決定するものである。社會の物質的生産力は、其發展の一定の階段に於て、現存の生産關係、換言すれば、<sup>その</sup>從來其のものゝ内に活動して居た所のものゝ、即ち單なる法制上の表現にすぎざる所の所有關係と衝突するに至る。かくて此の關係は、生産力の發展形式より、變じて之が束縛となるに至る。是に於てか社會革命の時代が到來する。經濟的基礎の變動に伴うて、巨大なる上部建築の全部が、或は徐々に、或は急激に變革

し了る。斯かる變革の觀察に當つては、吾人は常に、自然科學的に論證することを得べき經濟的の生産條件の上に起れる物質的の變革と、人類が此の衝突を意識し且つ是れと決戦する所の、法制上、政治上、宗教上、藝術上、又は哲學上の形態、簡單に云へば觀念上の形態とを、區別しなければならぬ。斯る變革時代を其の時代の意識より判斷せんとするのは、恰も個人自身思ひ込んで居る所のものを標準として、其個人を判斷せんとするに等しく、何等得る所はない。寧ろ此意識なるものは、物質的生活の矛盾より、即ち社會的生産力と生産關係との間に存在せる衝突よりして始めて説明さるべき者なのである。一の社會組織は總ての生産力が其の組織内に於て餘地ある限り其發展をなし遂げたる後に非ざれば、決して顛覆し去るものでなく、又新たななるより高度の生産關係は、其のものゝ物質的存在條件が古き社會の母胎内に孕まれる了る以前に於て、決して發生し來るものには無い。されば人間は、常に自ら解決し得る問題のみを問題とするものである。何故といふに、凡て問題なるものは、一層正確に之を觀察するならば、其解決に必要な物質的條件が已に存在して居るか又は少くとも其の生成の行程に在る場合にのみ、初めて發生



するものなるが爲である。極めて其の大體を論ずれば、吾人は亞細亞的、古代的、封建的、及び現代の資本家的生産方法を以て、社會の經濟的組織の進歩の階段となすことを得る。而して此の中、資本家的生産關係は、社會的生産方法の最後の敵對的形態である。茲に敵對的と謂ふは、個人的敵對關係の意に非ずして、各個人の社會的生活條件より生ずる敵對關係の意である。然し資本家的社會の母胎内に於て發展したる生産力は、同時に此敵對關係の解除に必要な物質的條件を作る。かくて人類社會の歴史前紀は、此の社會組織と共に終りを告げるのである。

予はフリードリッヒ・エンゲルスとは、彼が經濟學上の範疇の批判に關する天才的な小論文を發表して以來（獨佛年報誌上）、絶えざる著作上の思想的交換を行つてきたが、彼は他の方面から（彼の「英國勞働者狀態」を見よ）予と同じ結果に到達したのであつた。而して彼が一八四五年春、予と同じブルツセルに居をトした時、予等は共同に予等の見解を以て、獨逸哲學の觀念論的見解に對する反對をまとめ上げようと約束した。それは事實上、予等の從來の哲學的知識を打破する爲めでもあつた。計畫は後期ヘーゲル派哲學の批判といふ形態にて遂行せられ

た。二冊の厚いオクターフ版から成つてゐる原稿は、夙にウエストフアイレンの書肆に送られたが、予等は間もなく變化した諸々の事情が印刷を許さないといふ報知を受取つた。予等は恰も予等の主要目的を到達し得たかの如く、喜んで其原稿を鼠共の囁り裂く批評に委せた。——これは予等の自己清算であつた。當時予等が予等の見解を二三の方面から公衆に發表した數種のばらばらの勞作の内、予は予とエンゲルスとの合作なる「共產黨宣言」及び予の公にした「自由貿易論」を思出すのみである。予等の見解の決定的な要點は、猶ほ論争體のものであつたが、予が一八四七年にブルードンに反對して書いた著作「哲學の窮乏」の中に最初の科學的敘述をした。獨逸語で書いた「賃銀勞働」に關する小論文は、予が此問題についてブルツセル獨逸人勞働者組合に於て行つた講演を編輯したものであつたが、二月革命と二月革命のために予が急に白耳義を追放された事との爲めに印刷が中止せられたのであつた。

一八四八年及一八四九年の「新ライン新聞」の發行、並に是に續いた出來事は予の經濟學上の研究を中斷せしめたが、予は一八五〇年にロンドンに於て漸く再



び是に著手することが出来た。ブリチッシュエミューゼウムに山積する、經濟學の歴史に關する巨大の材料、ロンドンが資本家的社會の觀察のために占めてゐる有利の立場、最後にカルホルニヤ及濠洲の金の發見と共に資本家的社會が入り込むに至つたと思はれる、新しい發展階段、これらのものは予をして、再び全然、最初から遣り直し、且つ新しい材料に依つて批判的な徹底的研究を試むる事を決心せしめた。此研究は部分的には自から、予の常に悩まざるを得なかつた所の、全く傍道と思はれる課程に導いた。然し特に予の自由になる時間は、生活の爲めの仕事の命令的、必要のために短縮せられた。予が第一流の英米新聞「ニウヨークトリビューン」に寄稿するようになつてから既に八年になるが、予は例外的にのみ、本來の新聞通信に従事するのであるから、この仕事は研究上の非常の分裂を必要ならしめた。然し英國及び大陸諸國の顯著な經濟的出來事に關する論文は、予の通信の重要部分を構成したのであつて、予はこれがために、經濟學の本來の學問的領域以外なる、實際上の細目に通曉することを餘儀なくされたのであつた。

經濟學の領域に於ける予の研究の行程に關する以上の概観は、予の見解が、如何

に人々が是を常に批評しようとも、また如何に支配者階級の利己的な偏見と一致することが少からうとも、良心に恥ぢざる、そして長年の研究の成果であることを證するであらう。しかし科學への入口には、地獄への入口と同じく、次の要求が掲げられねばならぬ。

此處は總ての狐疑を棄て去るに適はしき場所である

一切の怯心は此處にては滅ぼさるべきである。

一八五九年一月、ロンドンにて

カール・マルクス



## 序論

### 一 一般的意義に於ける生産

吾人の此處に取扱ふ對象は先づ物質的、生産である。

社會に於て生産する個々人が——従つて社會的に決定せられた個々人の生産が、自ら本論の出發點を形成する。スミス及びリカルドが其議論の出發點とした所の、個々の孤獨の獵人及び漁人は、十八世紀の殺風景な幻想に屬して居る。彼等はロビンソン主義者である。彼等は、文明史家の想像するが如くに、誤解されたる自然生活の過大の讚美や該生活への復歸に反對した反擊を表現した者ではない。自然より獨立した個人が契約によりて相關係し、相結ぶに至つたと説くルツソンの「社會契約」よりも、此種の自然主義の上に立脚してゐないものである。それは虚構であつて、常に大小のロビンソン主義者の審美的虚構たるにすぎぬ。それは寧ろ十六世紀以來その發達を準備し、十八世紀に於てその完成への大飛躍を試みた「資本家的社會」の前觸れてある。自由競争の行はれる今日の社會に於て、各



個人は、嘗て彼を前代の歴史期に於て、一定の制限的な人間の集塊の附屬物たらしめて居た所の、自然の束縛から解放せられたが如く見ゆる。スミスとリカルドとが全然倚據してゐた所の十八世紀の豫言者たち——彼等は一方に於ては、封建的社會組織の崩壞の所産であり、他方に於ては、十六世紀以來新しく發展した生産力の所産である——には、この個人が、その生存の既に過ぎ去りたる理想物として頭に浮んで居たのである。それは、歴史の成果たるものではなく、歴史の出發點たるものであつた。

この個人は合自然性のものとして表現せられ、且つ人間性の觀念に準應するものとせられたから、彼は歴史上の生成物としてよりも、寧ろ自然によりて規定せられたものとして表はされたのである。此幻想は從來の各個の新時代に特有なるものであつた。スチュアートは、多くの點に於て、貴族として、十八世紀の諸精神に反抗し、寧ろ歴史的基礎に立つて居た。そして是等の單純な見解から解脱して居た。吾人が一層深く歴史を探求すればする程、此個人、即ち生産する個々人は、非獨立的な、より大なる全一體に屬して居たことが分る。最初個人は猶ほ全く自然

的に、家族と、家族の擴大したる氏族とに屬して居た。後には、諸々の氏族の對立と融合とより生れた種々の形態の共同團體に屬して居た。然し、社會的結合の種々の形態が、各個人にとつて、その私的の目的に對する單純の手段となり、外的の必要物となつたのは、十八世紀に於ける「資本家的社會」に於てであつた。然し此の種の立脚點、即ち個々の個人の立脚點を生み出した所の此時代は、社會の（此の見地よりすれば、一般的の）諸典型の最高潮に達した時代である。人類は全く文字通りに政治的動物（Zoon Politikon）である。彼は、たゞに社會的動物たるのみでなく、社會に於てのみ個人として發達する事が出来る動物である。社會以外に於ける孤獨の人の生産——既に動的に諸種の社會力を有して居る所の文明人が、偶然の事件によりて荒野に流遇するが如き場合に起り得る稀有のことである——は、各個人が共同生活をなさず、相互に言語を交ふることなくして言語の發達す、と謂ふが如く、全く無稽のことである。吾人はこれ以上、このことを論ずる必要がない。若し十八世紀の人々に意義と理解とを持つて居た粹狂事が、バヌチニ、ケイリ、ブルードン及び其の他の人々に依つて、熱心に再び經濟學の範圍に移植せられた



のではないならば、此點に觸れる必要は、毫もなかつたのである。ブルードン及び其他の人々にとつては、彼等がその歴史的形成について知ること無き所の、経済的諸典型の起原を次の如く歴史哲學的に説明することは、自ら愉快事であつたのである。即ち彼は、アダム若くはプロメシウスが凝結的な或る觀念を考へ付くと其後に於て該觀念が行はれるに至るといふ風に神話化するのである。この夢想的な「原始社會」よりも怠屈な乾燥したものはない。

かくて吾人が生産を論ずる時は、常に一定の社會の發達階段に於ける生産——即ち社會的個人を生産について論ずるのである。従つて、一般的に生産を論ずるに際して、次のことが起り得る。即ち吾人は種々の相に於ける歴史的發展行程を辿らねばならないか、若くは吾人は、一定の歴史時代の生産、即ち例へば實際に於て吾人の本來の研究題目たる近代資本主義的生産について研究せねばならぬといふことを説明すべきである。然し生産の總ての階段は一定の特徴を共通にし、共通の決定要素を有して居る。一般的意義に於ける生産とは、一の抽象であるが、しかもそれが現實に共通物を顯著ならしめ、固定的ならしめ、随つて反復を省略する

限りに於て、その描象は合理的な抽象である。然し此普遍物、若くは比較を通じて明白となる共通物は、それ自身一の多面なる複合體であり、個々に活動する種々の決定要素を含んでゐる。是等の二三のものはすべての時代に屬して居り、また他のものは、二三の時代にのみ共通して居る。多くの決定要素は、古代にも最近代にも共通である。是れなくして如何なる生産も考ふることは出來ない。併し最も完全に發達した言語は、最も原始的な言語と其文法や語法を共通にして居るが、其言語の發達をなさしむるものは、此普遍物及び共通物の差違である。總括的に生産を支配する決定要素は、區別されなければならぬ。是れと共に、主體たる人類と客體たる自然とが同一であること云ふ事實から既に生じて居る所の統一性に關する根本的相違點は忘却せらるべきでない。この一事を忘却して居ることが、現存の社會的諸關係の恒久性と調和性とを證明しようとして居る近代經濟學者の慧智の全體である。されば彼等は例へば次の如く云つて居る。即ち、如何なる生産も生産要具なくして起り得ない、此要具が常に手のみであつたならば、勿論のことである。また如何なる生産も、過去の蓄積された勞働なしには起り得ない、其勞



働が不斷の練習によつて野蠻人の掌中に蓄積され、且つ集中された熟練にすぎない場合にも勿論のことであると。資本は特に生産要具であり、また過去の客體化された労働である。従つて資本は一の普遍的な永遠的な自然關係である。しかし其れは吾人が「生産要具」若くは「蓄積された労働」を資本たらしむる特殊性を無視した場合に於て、そうなのである。従つて生産關係の全歴史は、例へばケリーの如き人々にとつては、政府の悪意によつて作り上げられた僞瞞として映じたのである。

若し一般的意義に於ける生産がないならば、従つて又一般的生産も存しない。生産は常に一の特種の生産部門である。若しくは例へば、農業、商業、製造工業の如き一つの全體である。然し經濟學は工藝學ではない。一定の社會の發達階段に於ける生産の一般的決定要素と特殊の生産形態との間の關係は、いづれ後に述べることとする。

最後に、生産は特別な種類のもののみではない。否、それは常に一の特定の社會體に外ならぬものであり、生産の諸部門の大なり小なりの一の全體に於て活動す

る所の一社會的主體である。その具體的運動に關する科學的敘述は、此處に取扱ふ範圍外に屬して居る。吾々はかくて、一般的意義に於ける生産、特殊なる生産部門、並に生産の全體を區別せねばならない。

經濟學者達は汎論を先づ論ずる風がある。即ち「生産論」といふ命題を定めてあらゆる生産の一般的條件を取扱つてゐる。(例へばジョン、スチュアルト、ミルを見よ。)

此汎論は次の二條件より成立してゐるか、若くは成立してゐるらしく見える。

一 生産の缺くべからざる諸條件、即ち實際上、總ての生産の根本的動機に外ならない諸條件。しかし是れは吾人が後に觀察するが如く、平易な同義異語に縮め得られる所の、二三の、非常に單純な根本條件に還元する事が出来る。

二 多少とも生産を促進する諸條件、例へばアダムスミスの研究したが如き、好況期若くは不況期の社會狀態。

彼等に單純の綱要としてのみ役立つた所の、是等の事物に科學的意義を附與するには、各民族の發達上に於ける生産力の度、合、を時代的に研究する事が必要であ



る。然し斯くの如き研究は本論の本來の限界以外に屬してゐる。それは此處には競争、蓄積等の發展と關聯して研究する必要があるのである。一般的に解釋すると、産業國民の生産上の高度は、該國が總ての點に於て到達してゐる歴史的高度と一致してゐるといふ普遍的答辯を與へることが出来る。若くは例へば一定の人種、氣候、自然的條件例へば海よりの距離、土地の豊度等が、他のものよりも、生産にとつて一層有利であるといふ答辯に到達する。このことも亦、富は其要素が主觀的客觀的に存在してゐる程度よりも、より容易に創造される、といふ同義異語を齎らすのである。

實際上、吾人は一國民の産業的高度を、其の主目的が獲得物にあらずして、獲得行程に在る限りに於て、見出すことが出来る。此點に於てヤンキーは英人以上に立つて居る。

然し乍ら、是等は經濟學者が汎論中に論じて居る全てのものではない。生産は分配と異り、寧ろ——例へばミルを見ると——歴史と全く關係の無い、永久の自然法則として綜合的に叙述せられて居る。而して彼等は是に際して、ブルジョア關

係を以て社會の破るべからざる抽象的自然法則と論ずるのである。これは彼等の全研究の多少とも意識的な目的である。反之、分配に際しては、人類は實際上、あらゆる自態が許さるべきであるとして居る。彼等が、生産と分配とを其現實的關係に於て、亂暴に破壊して居る事實は全然無視するとするも、次の如き多くのことが前以て證明せられねばならぬ。即ち、分配の組織が社會の種々なる階段に於て如何に大なる差異を示して居ようとも、生産の場合に於けるが如く、共通の決定要素を抽出すると共に、あらゆる歴史的差異を除去し、普遍的、人間的、法則に於て是を解決することの可能であることを示さねばならぬ。例へば、奴隸、農奴、賃銀労働者は總て、奴隸として、農奴として、賃銀労働者として生存するに充分なだけの定量的食物を受ける。貢物にて生活する征服者、租税にて生活する官吏、地代にて生活する地主、施物にて生活する出家、十分の一税にて生活する僧侶は、すべて、奴隸其他を支配する法則とは異つた法則によつて決定せられたのである。總ての經濟學者が、此項目の下に於て論ずる二個の主要なる點は、第一は財産であり、第二は司法、警察其他による財産の保護と云ふことである。これ等に對しては、極めて簡單



に次の如く答へることが出来る。

(一) 總ての生産は、特定社會形態内に於て、また該形態を通じて、個々人の行ふ自然の利用である。此意味に於て、財産(利用)が生産の一條件であると云ふのは同義異語にすぎない。然し是れを飛躍して、財産の一定形態を直に例へば私有財産と云ふならば、寧ろ滑稽である。(反對の形態たる非財産も同様に條件として假定し得るものである。)歴史は寧ろ共有財産(例へば印度人、スラヴ人、古代ケルト人等に於ける)が原始的形態であつたことを示して居る。それは、公共團體財産の形態を以て、猶ほ重要な役目を演じて居るものである。富が、此何れの財産状態の下により、善く發展し得べきかと云ふことは、此處にて論ずることは出来ない。然し、生産について論じないと云ふことは、従つて如何なる形態の財産も存在しない所の社會について論じないと云ふことは、一つの同義異語である。利用すべき何物も存しない利用なるものは一の「主觀的矛盾」である。

(二) 財産の保護。この陳腐事をその眞の意義に還元して見ると、彼等經濟學者は彼等の師匠の知つて居た事よりも、より多くを語つたことになる。即ち生産の

各種の形態が、是れに特有なる法律關係や政府形態を作り上げると云ふ事を語つた譯である。その粗笨と無理解とは、有機的の結合物を、偶然的な反射關係たらしめやうとした所に存して居る。ブルジョアの經濟學者には、現代の警察制度の下に於て、例へば「奉の權利」の時代に於けるよりも、より善く生産が行はれる、と云ふ考がつかまどふて居る。たゞ彼等は、「奉の權利」も一の權利である事を、また強者の權利が他の形態にて彼等の「法治國家」にも生き續けて居ると云ふことを忘れたゞけてある。

生産の一定階段に應ずる諸々の社會状態が始めて成立した時、若くは其過ぎ去つた時には、假令程度が異り結果が異なるにせよ、當然に生産の混亂が生じて居る。

以上を要約すれば、生産の總ての階段には、思想上、普遍化し得べき共通の決定要素が存して居る。然し、すべての生産の所謂普遍的條件なるものは、此抽象的要素に外ならないものであつて、是に依つて、現實の、歴史上の、生産階段を理解することは出来ない。



## 二 分配交換及び消費に對する生産の 一般的關係

生産を一層深く解剖する前に、經濟學者達が生産と共に論じて居る種々の項目を觀察しておく必要がある。最も皮相的な觀念は次の如くである。即ち、社會の成員は、生産に於て、人間的慾望を充足する爲めに自然生産物を利用する（生産し若くは形づくる）。分配は、各個人が此生産に参加する割合を決定する。交換は、彼が分配を通じて獲得した量を轉換せんと欲する特殊の生産物を彼に與へる。最後に生産物は消費に於て、享樂即ち個人的利用の目的物となる。生産は慾望に準應する對象物を産出する。分配はこれを社會的法則に従つて配分する。交換は既に分配せられたものを、個々の慾望を標準として更に分配する。最後に消費に於て生産物は社會的移動から脱け出し、個々の慾望の直接の對象物となり、奉仕者となり、享樂せられる。斯くの如くして、生産は出發點として表はれ、消費は最後の到達點として表はれる。分配及び交換は、二重の態様を具へる中間物として表は

れる。即ち、分配は社會から生ずる動機によりて決定せられ、交換は個人から生ずる動機によりて決定せられる。生産に於ては各人が客觀化せられ、「消費」に於ては事物が主觀化せられる。社會は、分配に於て、普遍的に支配する決定要素の形態を以て、生産と消費との間の媒介を果たす。また交換に於て、此媒介は個人の偶然的の決定性によつて果される。

分配は、個々人が受くべき生産物の割合（量）を決定する。交換は、個々人が分配によつて己れに割當てられた分前に基いて要求する所の生産物を決定する。

かくて、生産、分配、交換及び消費は規則正しい關係を形成して居る。生産は普遍的であり、分配及び交換は特殊的であり、消費は個別的であり、これらが結合して一の全體を作り上げる。これは確かに一の結合であるが、しかし表層的な結合である。「經濟學者に依れば」、生産は普遍的自然法則によつて決定せられ、分配は社會的偶然によつて定まる。従つて、分配は多少とも生産を促進する働きをする。而して交換は形式的（？）な社會的運動として、兩者の間に介在する。而して、最終到達點たるのみならず、また最終目的たる消費の終結的行動は、それが再び出發點



に回歸し、新しく全行程を導き出すに非らざる限り、本來、經濟學の範圍外に屬して居る。

經濟學は有機的に結合せられて居る物を野蠻に破壊したとなして經濟學者を非難する人々——それが經濟學者の内部に存すると外部に存するとを問はず——も、經濟學者達と同一の基礎に立つか、若くは、それ以下に在るものである。經濟學者が生産を全然内在目的として居るといふ非難ほど普通の非難はない。此非難は同様に分配に關しても言はれて居る。此非難は、分配も生産と同じく、自然發生的の獨立的の範圍を形成して居ると云ふ經濟學上の觀念に根ざして居る。換言すれば、種々の動機が統一體として結合せられて居ないと云ふ非難である。この有機的に結合せられたもの、破壊と云ふことは、實生活に基いて教科書中に編纂せられたものでなく、却て、教科書に基いて實生活中に編纂せられた観がある。それは概念の辨證法的平衡を取扱つたものであつて、眞實の諸關係を取扱つたものではない！

(a) 生産は直接に、また消費である。即ち、主觀的竝に客觀的なる二重の消費であ

る。生産に於て其の能力を發揮する個人は、生産行動に於て其の能力を使用し消費する。それは恰も生殖が生活力の消費であるのと同じである。第二に、生産は生産資料の消費であつて、利用せられ、使用し盡され、其の一部は（例へば、燃焼の場合の如く）その自然要素に還元せしめられるのである。同様に原料の消費は其自然的姿容及び性質を留むることなく、寧ろ銷却せられてしまふのである。従つて生産行動自身は、其總ての動機に於て、亦消費行動である。併しこのことは、經濟學者によりて承認せられて居るところである。直接に消費と同視せらるべき生産即ち直接に生産と一致する消費は、これを生産的消費と呼ぶことが出来る。生産と消費との此同一性は、スピノーザの所謂「決定は否定なり」と云ふ命題に其表現を求め得る。然し、此生産的消費と云ふ定義は、生産と同視せられる消費と本來の消費即ち壊滅的對立物として解すべき所の消費とを區別するために用ひらるべきのみである。吾人は、今純粹の消費について考察して見よう。

消費は直接にまた生産である。恰も自然界に於て、諸成分及び化學的物質の消費が、植物の生産を形成するのと同じである。例へば、消費の一形態たる食料に於



て、人間がその身體を生産することは明かな事である。しかし、此事は何等かの方法にて人間を生産する總ての他の消費についても眞である。これは、消費的生産である。併し、經濟學者はいふ。此消費と同視せらるべき生産は、最初の生産物の壊滅から生じた第二の生産である。最初生産者が物體化せられ、第二に事物が人格化せらる。かくて、此消費的生産は——假令それが生産及び消費の直接的結合體であるとは云へ——本來の生産とは根本的に異つて居る。生産が消費と一致し、消費が生産と一致する所の直接的結合體は、其直接の二重性を成立せしめる。斯くて生産は直接に消費であり、消費は直接に生産である。各自は直接に其兩極物である。然し、同時に媒介運動が兩者の間に行はれる。生産は消費を媒介する。生産は消費の爲に材料を作る。若し是れ無ければ、消費の對象が存しない。然し消費は亦生産を媒介する。何となれば消費は生産物について、是を生産物たらしめる所の主體を作るからである。生産物は、消費に於て、始めて其の最終の完成を告げる。何人も乗車せざる汽車即ち使用せられず、消費せられざる汽車は、あり得べき汽車たるに留まり、現實の汽車ではない。生産なくしては消費は存しな

いのであるが、他方に於て、消費なくして生産はない。何となれば、生産は目的なくして行はれないからである。消費は生産を二重の方面に於て生ぜしめる。

それは先づ第一に、生産物は、消費に於て、始めて現實の生産物たり得るからである。例へば、衣服は着ると云ふ行爲によつて現實の衣服となる。何人も住まない住家は現實の住家ではない。かくて生産物が、單なる自然的對象物と異なることが證明せられた時に、それは始めて、消費に於ける生産物となる。消費は、消費が生産物を滅失せしむることに依つて、始めてその生産物に最後の仕上げを與へる。何となれば、生産物は單に物體化せられた活動でなく、活動する主體に對する目的物としてのみ、生産の結果たるものであるからである。

第二に、消費は生産をつくる。何となれば、消費は新しい生産の需要、即ち生産の前提たる所の、觀念上の、生産を内部より促進する需要を作り上げるからである。消費は生産に衝動を與へる。また消費は生産上に於て目的として働く對象物を作り上げる。生産が消費の對象物を外的に提供するのが明白であるならば、消費が生産の對象物を、内的形狀として、慾望として、衝動として、目的として、觀念上に提



供すると云ふことも明かなことである。消費はなほ主観的形態に於て、生産の對象物を作る。慾望なくして生産はない。併し、消費は慾望を再生産する。

生産の側に於ては、以上に應じて、次のことがある。即ち生産は、  
(一) 消費に材料即ち對象物を提供する。生産は此方面に於て、消費を作り出すのである。

(二) 併しそれは、生産が消費のために作る對象物たるのみではない。生産は消費にその確定性、其性質、其完成を附與する。丁度、消費が生産物に對して、生産物としての其の最後の仕上げを與ふる如く、生産は消費に最後の仕上げをなすのである。何となれば、對象物は、常に一般的の對象物たるに止らずして、さらに、生産自身によつて再び媒介せられた、一定の行爲の中に於て消費せられる、特定の對象物であるからである。飢餓は飢餓であつても、フォークやナイフを以て甘く料理せられた肉を味つて満足する飢餓は、手や爪や齒等の助けを借りて原形のまゝの肉を味つて満足する飢餓とは、種類の異つた飢餓である。消費の對象物ばかりでなく、消費の方法は、かくの如くして、生産によつて作られる。従つて、消費は客観的たる

ばかりでなく、主観的には生産によつて作られる。斯くの如くして、生産は消費者を作り出すのである。

(三) 生産は慾望に材料を提供するのみならず、また材料に慾望を提供する。消費が、その當初の自然的粗野と直接性とを脱した後に於て——而して此状態の繼續は、それ自身自然的粗野に留まつて居る生産の結果である——消費自身は衝動として、その對象物によりて媒介せられる。消費が對象物について感ずる所の慾望は、その對象物を認識するによつて作り上げられる。美術品は——他の生産物もさうだが——藝術趣味の美を鑑賞することの出来る公衆を作るに存して居る。斯くの如くして、生産は、個人に對して對象物を作るのみならず、對象物に對しての個人を作るのである。

斯くして、生産は消費を作る。即ち、(一) 生産が消費のために材料を作ることに依つて、(二) 生産が消費の方法を決定することに依つて、(三) 生産が消費によりて對象物とした最後の生産物を消費者の慾望となすことに依つて、然るのである。従つて、生産は、消費の對象物、消費の方法、及び消費の衝動を生み出す。同様



に消費は生産者の資質を生む。何となれば消費は生産者にとつて目的となり、慾望を規範化するからである。かくて、消費と生産との同一化は、次の三個の態様を具へて表はれる。

第一、直接的同一化、即ち生産は消費であり、消費は生産である。消費的生産、生産的消費。經濟學者は兩者を生産的消費と呼んで居るが、猶ほ一の區別を立て、前者を再生産後者を生産的消費と呼んで居る。前者に關する總ての研究は、生産的若くは不生産的勞働に關するものであり、後者に關する研究は、生産的若くは非生産的消費に關するものである。

第二、兩者は各々他の一方の手段として表はれ、他の一方によつて媒介せられ、相互的從屬物として表現せられる。それは、彼等相互に關係し、互に缺くべからざるものとして表はれ乍らも、外的には猶ほ分離して居る所の、一の運動である。

生産は消費に對する外的對象物としての材料を作る。消費は内的對象物としての慾望、生産に對する目的としての慾望を作る。生産なくし、消費なく、消費なくして生産はない。此定則は經濟學上、種々の形態にて説かれて居る。(?)

第三、生産は單に直接に消費でなく、消費は直接に生産ではない。猶ほ亦生産は單に消費に對する手段でなく、消費は生産に對する對象物でもない。即ち、兩者は各々他の一方に其對象物を提供する。生産は、消費の外形的對象物を提供し、消費は、生産の觀念的對象物を提供する。消費は、次の如くして、始めて生産行動を完了する。即ち消費が生産物に生産物としての最後の仕上げを與ふることによつてまた生産物を滅失せしめ、其の獨立の物的状態を用ひ盡くす事に依つて、また生産の最初の行動中に發展した性質を慾望を通じて其完成のための反覆にまで高めることに依つて、是を完成する。かくて消費は、生産物を生産物たらしめる終結的行動たるのみならず、生産者を生産者たらしめる終結的行動なのである。他面に於て、生産は消費の特定方法を作ることに依つて、更に消費の動機即ち消費能力自身を作り上げることに依つて、消費を生産するのである。この最後の(三)に述べた同一化については、經濟學上に於て、需要と供給、對象物と慾望、社會的慾望と自然的慾望と云ふ關係に於て、論議せられて居る。

此故に、ヘーゲル派のものにとつて、生産と消費とを同視するといふ事ほど、簡明



なことはないのである。而して、此事は社會主義の美文學者達のみならず、經濟學者自身についても見られる。例へばセーの如きは、次の主張をした。即ち、吾人が一個の國民——若くは抽象的に人類——を觀察して見ると、その生産は同時にその消費である。ストルヒは、セーの誤謬を證するに、次の事を以てした。曰く、一國民はその生産物を全然消費するものでなく、却て、固定資本の如き生産資料を作るのである。と。社會を唯一の主體として觀察することは、思辨的な不常な觀察である。一個の主體に於て、生産と消費とは、一個の行動の動機として表はれる。茲に重要な點は、次の事から生ずる。即ち、吾人が、生産と消費とを一個人若くは個々の個人の行爲として考ふるならば、彼等は常に一個の行程——生産が現實の出發點であり、從つて主要の要素たる所の——の動機として表れるのである。自然的必然物としての消費、慾望としての消費は、生産的活動の內的動機である。しかし、後者は現實化の出發點であり、從つて主要の要素であり、且つ全行程を反覆せしむる行動である。個人は一の對象物を生産する。そして、彼は、これを消費することに依つて、再びこれを自分自身に返らしめる。しかし、彼は、生産的な個人として、

即ち、再生産する個人として、これを行ふのである。斯くて消費は生産の動機となりて表はれる。

併し、社會に於て、生産者の生産物に對する關係は、その完成すると同時に、一の外部的關係となる。而して、個人に對する生産物の回歸は、他の個人に對する彼の關係によりて決定せらる。然し、是を直接に所有するものは同一人ではない。また、彼が社會に於て生産する時、其生産物の直接的私有は、彼の目的ではない。生産者と生産物との間には、社會的法則によつて生産物の世界に於ける彼の分け前を決定する所の分配が入り込んで居る。かくて分配は、生産と消費との間に入り込んで來る。

分配は、獨立的の範圍として、生産と竝立し、且つ生産の外に立つのであらうか？  
(b) 生産と分配。普通の經濟學書を讀んで先づ眼につくことは、總てのものが二度論ぜられて居ることである。例へば、分配論の下に於て、地代、貸銀、利子、利潤が論ぜられ、生産論の下にありては、生産要素としての土地、勞働、資本が論ぜられる。資本に關しては、それが第一には生産要素として論ぜられ、第二には收入源泉として



論ぜられて居ることが明かである。利子及び利潤は、分配の決定的な特定形態として現れる。此利子及び利潤も、生産に於ては、同様に決定的な形態である。何んとなれば、彼等は資本が増殖し成長する形態であり、従つて、資本の生産自身の動機であるからである。分配形態としての利子及び利潤は、生産要素としての資本の存在を前提として居る。彼等は、生産要素としての資本を前提としてゐる所の分配方法である。又彼等は、資本の再生産方法である。

同様に労働賃銀は、他の項目の下に論ぜられた賃銀労働である。即ち労働が、他の場所て生産要素として有して居る特質は、茲ては分配の決定要素として表はれる。労働が賃銀労働として規定せられざる場合には、労働の分配に参加する方法は、賃銀として表はれずして、例えば奴隷制度の下に於けるが如き方法をとる。最後に地代——土地所有権が生産物の分け前に参加する所の最も發展した分配形態——は、生産要素として大土地所有権（特に大農業）の存在を前提とする。それは單純に土地のみを前提とするものでない事は、労働賃銀が單に労働のみを前提とするものでない事と同じである。此故に、分配關係及び分配方法は、單に生産の

反面としてのみ表はれる。賃銀労働の形狀を以て生産に参加する個人は、生産の結果たる生産物について、労働賃銀の形態にて参加する。分配の分化的組織は、完全に、生産の分化的組織に依つて決定せられる。分配はそれ自身、生産の生産物であつて、それは、生産の結果の分配せられたる對象物について見ても、また生産に参加する特定方法が分配の特定形態——分配に参加する形態——を決定する形態について見ても、然るのである。故に、生産論の下に土地をおき、分配論の下に地代をおくと云ふことは、全く一の空想である。

生産論のみに特殊の注意を拂ふたと云ふ廉で特に非難せられて居るリカルドの如き經濟學者たちは、分配論を以て、經濟學の特殊の部門なりとなして居た。何んとなれば、彼等は諸々の分配形態を以て、生産要素が一定の社會に於て確立する最も決定的の表現であることを本能的に説いて居るからである。

分配は單一個人に對して、自然に一の社會的法則として表はれる。この社會的法則は、個人が生産を營む所の生産範圍に於ける彼の位置を決定し、其結果として生産に先行するものである。元來個人は、一の資本も一の土地財産も有しては居



なかつた。彼は、生れ落ちると、社會的分配に依つて、賃銀労働へ指示せられたのである。然し此指示自身は資本及び土地財産が、獨立の生産要素として存在する結果たるのである。

社會全體の見地からすると、分配は、恰も前經濟的事實の如くに、他の方面から生産に先行し、且つこれを決定するやうに見える。征服民は土地を征服者の間に分配し、土地所有權の一定の分配及び形態を設定し、其結果として生産を規定する。若くは、被征服者を奴隸となし、奴隸労働を生産の基礎たらしめる。若くは一國民は、革命によつて大土地所有制度を破壊して細小地となし、この新しい分配によつて、生産に新しい特質を與へる。若くは、法律が大家族の土地所有權を永久化する

か、又は、労働を世襲的特權として分配し、かくて是を身分關係に確定する。總て、是等の場合に於て——而して是等は總て歴史上の事實である——分配は生産によりて組織され決定されるものでなく、却つて、生産が分配に依つて組織され決定されるのである。

最も皮相的な見解に於ては、分配は、生産物の分配として表はれて居り、かくて分

配は生産より遙かに離れ、且つ生産と對して、準獨立的のものとされて居る。然し分配が生産物の分配たる以前に於て、それは第一には生産要具の分配であり、第二には、同一關係の一層廣い言ひ廻しては、あるが、生産の種々なる活動に於ける、社會成員の分配（一定の生産關係の下に於ける個々人の從屬）である。生産物の分配は、明かに、生産行程の内部に包含せられ、且つ生産の組織を決定する所の、此分配の結果である。此中に包含せられた分配より離れた生産を論ずることは、明かに空虚な抽象である。逆に、生産物の分配は、それ自身、この生産の動機を形成する、原始的な分配と共に存するのである。リカルドは、近代の生産を、其の一定の社會的編制の下に於て、理解せん、と努力した人であり、生産經濟學者「閣下」であるが、彼は此の理由に依つて、近代經濟學の主要なる命題は、生産論でなくして分配論であることを高調した。吾人は、生産を以て永久の眞理であると論じたお目出度い經濟學者の幾人をも知つて居る。彼等は歴史を分配の範圍にのみ縛りつけたのである。

生産自身を決定する此の分配が、生産に對して如何なる關係を持つかと云ふ問



題は、明かに生産論の範囲に属する問題である。生産は生産要具の一定の分配に依りて決定されるのであるから、分配は此の意味に於て生産に先行すると云ふことが、少くとも云はれるならば、是に對して、次の如く答ふれば足る。即ち生産は、實際に於て、其動機を形成する條件及び前提を有して居るのである。是等のものは、其の最初の起原に於ては、自然發生的なものとして表はれる。彼等は、生産行程自身を通じて、自然發生的のものより歴史的のものに變ずる。而して、彼等が、一の時代に於て、生産の自然的な前提條件として表はれるならば、それは他の時代に於て、歴史的結果となる。彼等は、生産自體の範囲内に於て、絶えず變化する。例へば、機械の採用は、生産の分配並びに生産要具の分配を變化せしめる。近代の大土地所有制度は、近代商業並に近代工業の結果であると共に、近代工業の農業に應用せられた結果でもある。

總て是等の問題は、其の最後に於て、一般的な歴史的諸條件が、生産に如何に影響するか、總括的に歴史の進動に對し如何なる關係を有するか、といふことを解決するのである。此の問題は、明かに、生産の論究と解剖とに属する。

併し、此等の問題は、前に掲げた平凡な形態に於て、簡単に答へることが出来る。

總ての征服については、三つのことが可能である。即ち、征服者は被征服階級を自己の生産方法に従はしめる（例へば、十九世紀に於けるアイルランドに於ての英國人、また部分的には印度に於ける英國人の如し）。若くは、古い生産方法を其儘に成立せしめておき、貢物の徴物を以て満足する（例へば、トルコ人及びローマ人の如し）。若くは、相互作用に依つて、新しい綜合體を成立せしめる（部分的には、ゲルマン人の征服について見られる）。生産方法は、是等凡ての場合に於て、それが征服民の生産方法であるにせよ、被征服民のそれであるにせよ、また兩者の混合より生じたものであるにせよ、そこに生ずる新しい分配の性質を決定するものである。たとへば、是等のものが、新しい生産時代の前提條件として表はれるとしても、それ自身は、生産の生産物であつて、常に一般的意義に於ける歴史的生産の生産物たるのみならず、また特定の歴史的生産の生産物なのである。例へば、ロシアを蹂躪した蒙古人は、その生産組織に應じて行動したのであつて、其の生産組織に對しては大なる、無人口の廣芽を有する牧場が、主要の條件であつたのである。農耕のために



農奴を以て生産を行ひ曠野の中に孤立的生活を營んで居た所のゲルマン蠻人はローマの領地に起つた土地所有權の集中が舊農業組織を完全に崩壊さしてしまふや否や、是を甚だ容易に自己の條件の下に服従させることが出来たのである。或時代に於ては、掠奪のみが唯一の生活の源泉であつたと説く傳統的な觀念がある。然し、掠奪が可能であるためには、掠奪せらるべき或物即ち生産が存在して居なければならぬ。而して、掠奪の方法自體も、生産の方法によつて決定せられる。例へば、發達した取引所投機を有して居る國民は、牧牛の國民を掠奪すると同じ方法で以て掠奪することは出来ないのである。

奴隸の場合に於ては、生産器具は直接に掠奪せられる。然し、彼が掠奪せられる所の其國の生産は、奴隸勞働を承認する様に組織せられねばならぬ。若くは（南アメリカに於けるが如く）、奴隸制度に相應する生産方法が作られねばならぬ。

法律は、一定の生産器具例へば土地を、一定の家族に世襲せしめる。此法律は大土地所有制度が社會的生産と一致する場合例へば、英國に於けるが如き場合に於てのみ、經濟的意義を有する。フランスに於ては、大土地所有制度の存在して居た

にも係らず小規模の農業が行はれて居たが、其の結果として後者は革命に依りて細分せられてしまつた。然し、土地の細分を永久化する法律は如何になつたか？此等の法律にも拘らず、土地所有は再び集中せられたのであつた。分配關係の確立並に是に基いて生産に與へる其の效果に關する法律の影響は、他の場所に於て論定しよう。

(c) 交換及び流通。流通は交換の一定の動機たるものに外ならない。若くは、全體として考へられた交換である。交換が消費と共に、生産並に是によりて決定せられた分配の間の媒介的要素たる限りに於て、さうである。然し、後者が生産の動機として表はれる限りに於て、交換はまた明かに動機として、生産の中に包含せられる。

先づ第一に、生産自體內に生ずる活動及び能力の交換が、直接に生産範圍に屬し且つその本質的要素を構成することは、明かである。第二に、交換が直接の消費に對する完成せられた、一定の生産物の製作に對する手段である限りに於て同一のことが生産物の交換についても眞である。其の範圍に於て、交換自體は、生産に包



含せられた行動である。第三に、商人同士の所謂交換は、其の組織が全然生産に依つて決定せられるのみならず、其れ自身生産的活動の一種である。交換は、生産物が直接に消費のために交換せられる最後の段階に於てのみ、生産と獨立し、且つ是と無關係となつて表れるのである。然し、(一)如何なる交換も、自然發生的か、若くは、歴史的發達の結果たるか、其の何れかに依る分業なしに行はれるものではない。(二)また私的交換は、私的生産を前提とする。(三)また交換の強度、その擴張その方法は、例へば、都市と村落との間の交換、村落に於ける交換、都市に於ける交換等の如く、生産の發達及び分化の程度によつて決定せられる。斯くて交換は生産上、その全要素中に包含せられるか、若くは其の全要素を通じて決定せられるのである。

吾人が到達した結果は、生産、分配、交換及び消費等が同一のものであるといふ事ではなく、是等のものが、一の全體の全成員を形成するものであり、一の統一體の内部に於ける差異であると云ふことである。生産は、生産なる語の反對の意味に於ける生産自身を律するのみならず、同様に、他の諸要素をも律する。生産よりして

行程が常に新しく始めらる。交換及び消費が有力の要素たり得ないことは、自明の理である。同一のことが、生産物の分配としての分配についても眞である。しかし、生産要素の分配としての分配は、其れ自身、生産の一動機である。斯の如くして、一定の生産形態は、消費、分配、交換の一定の形態を決定し、是等種々の動機の間、一定關係を結びつける。しかし、生産は、其一方の形態の側に於ては、他の要素によつて決定せられる。例へば、市場の擴大した時、即ち生産範圍の擴大した時、生産は其の範圍を増大し、且つ一層深く分割せられる。

分配に於ける變化と共に、生産は變化してゆく。例へば、資本の集中、都市及び農村の人口分配の變化の場合に於けるが如くである。最後に、消費の欲望は、又生産を決定する。此處に於てか、種々の動機の間、に於ける相互作用がおこる。かくの如きは、凡ゆる有機的全一體について存する事實である。

### 三 經濟學の研究方法

吾人が政治學的經濟學的見地より一定の國土を考察するに際しては、先づ其國



の人口を研究し、階級都市及び農村、海種々なる生産部門等に配分せられた人口を解剖し、然る後、其輸出入、年々の生産及び消費、諸商品の價格等を研究する。現實の條件の實際狀態及び具體的狀態より、先づ研究を始めるのは、正常なことのやうに見える。従つて、經濟學に於て、社會の全生産的活動の基礎であり、且つ主體である所の人口を先づ取扱ふのは、正常であるやうに見える。然し、一層深く考察して見ると、その不正當であることが、明かとなる。若し吾人が、例へば、階級——それは人口より成立して居る——を論外におくとすれば、人口なるものは、一の抽象と化するのである。更に、此の階級なるものも、その據つて立つ諸要素——例へば、賃金、労働資本の如き——を知悉するに非ざれば、また一の空語にすぎないのである。これ等のものは、交換、分業、價格等を前提として居る。例へば、資本は、賃銀、労働、價值、貨幣、價格等がなければ、何の意味もないものになるのである。故に、若し吾人が人口問題を研究の出發點とするならば、それは全一體の混沌たる觀念を以て始むることとを意味する。而して、より精細な解釋によつて、吾人は、漸次に分析的に、より單純なる概念に到達するであらう。かくて吾人は、假想上の具體物より益々簡明なる

抽象にと進み、最後に、最も單純なる概念に到達するであらう。そこから再び逆行の旅を始め、終には、再び人口問題に歸着する。しかし、今度は、全一體の混沌たる觀念を以てするのでなく、無數の概念と關係との聚合した、一の豊富な全體として表れるのである。最初の研究方法は、經濟學が歴史的に成立した時代に於て、採用せられたものである。例へば、十七世紀の經濟學者は、常に、活動的な全一體たる人口、國民、國家、多數國家等を以て、其の研究の出發點としたのであつた。併し、彼等は、最後には、分析的な研究によつて、二三の一定的な、抽象的な普遍的關係、例へば、分業、貨幣價值等の如きものを發見するに到つたのである。是等の個々の要素が、多少確立され、抽象化されるに至ると、労働、分業、慾望、交換價值の如き單純なる概念より、國家國際的交換、世界市場の如きものに到る所の、經濟學の組織が生れるのである。後者は、明白に、科學的に正常な研究方法である。具體物は、それが幾多の目的物の綜合であり、従つて、多様性の統一體であるが故に、具體的なのである。此の故に、その具體物は、思想上に於て、綜合の行程として、結果として表はれ、出發點として表はれる。假令、それが現實の出發點であり、従つて、解釋及び觀念の出發點であるとは云



へ、上述の如くなのである。第一の研究方法に於ては、完全なる概念が抽象的な概念に蒸發してしまふ。然し、第二の研究方法に於ては、抽象的な概念が、思索の道程に於て、具體物を再生産するに到るのである。かくて、ヘーゲルは、現實的なものを以て、自ら綜合し自ら深化し自ら活動する所の、思索の所産なりとする空想に陥つたのである。然し、抽象物から具體物に進んでゆく研究方法は、單に、具體物を同化する事、即ち吾人の頭腦中にて其の具體物が一の具體物として再生産する所の思索上の方法にすぎない。例へば、交換價值と云ふ如き最も單純な經濟學上の範疇は、人口、それも一定の條件の下に於て生産に従事して居る人口を前提として居る。また一定の家族や公共團體や國家の如きものを前提として居る。それは既存の具體的な活動的な聚合體の、一方的な抽象關係を除いては存在し得ない。

然し乍ら、範疇としての交換價值は、ノア洪水前の存在を導き出す。従つて、其の意識に對しては——而して哲學的意識なるものは、概念化を行ふ思索が現實の人間であり、其の概念化された世界その者が現實の世界であるかの如く決定せられる——範疇の運動が、現實の生産行動として表はれるのであつて、其の結實は世界

である。然るに、悲しいかな、生産行動は外部より刺激を受くるのみなのである。

此事は——こゝに吾人は、再び同義異語を持つことになるのであるが——思想上の全體としての具體的全體が、思想上の具體物として、實際に於て思想の所産、概念の所産である限りに於てのみ、正常なのである。然し、それは、決して、観察と概念との外に、また是を超越して、思索し且つ何物かを生み出す所の概念の所産ではなくて、観察と概念とが概念に結成せられたものに外ならぬ。吾人の頭腦中に、思想上の聚合體として表はれるが如き聚合體は、思索する頭腦よりの所産であつて、頭腦にとつて、唯一可能なる方法に於て、世界を捕捉するものである。其の方法たるや此世界を藝術的、宗教的、實際的、精神的に捕捉するものとは大いに異つて居る。頭腦が單に思辨的に留まり、純理的である限りに於て、眞の主體は、前と同じく其の獨立性を保ちつゝ、頭腦の外に立つて居る。故に、經濟學の理論的研究方法に於て、主體たる社會は、常に概念の前提條件として留意されねばならない。

然し乍ら、是等の單純なる範疇は、その具體的存在の以前に、一の獨立せる歴史的の、若くは、自然的の存在を有しては居ないだらうか？ それは從屬的の事項であ



る。例へば、ヘーゲルが、個人の單純なる法律關係としての所有權より出發して、其の法理哲學を説いて居るのは正當である。然し、多量により、具體的なる關係である所の家族や、支配隸屬の關係等に先立つて、如何なる所有も存しない。是に反して、所有のみ存して、財産制度の存しない家族や氏族が存してゐると云ふのは決して不正當でない。斯くの如くして、より單純なる範疇は、財産制度に關する單純なる家族團體若くは氏族團體の關係として表はれるのである。初期の社會に於て彼等は、一の發達した有機體の單純なる關係として表はれた。しかし、それは、所有の關係を以て結ばれ且つ是を基礎として居る所の、より具體的の地盤であつた。吾人は、事物を所有せる孤立の野蠻人を想像することが出来る。然し、其の所有は如何なる意味に於ても、法律關係ではない。所有が歴史的に家族へ進化したと云ふ事は、眞ではない。後者は、寧ろ、常に、この「より具體的な法律的範疇」を假定して居る。然し、次のことは充分に云ふことが出来る。即ち、單純なる範疇は、未だ發達せざる具體物が、具體的範疇として心的に表現せられない所の、より多方面の結合若くはより多方面の關係に入ることなくして、具體化してゆく諸々の關係の表

現である。然し、具體物が充分に發達した時には、それは該範疇を從屬的關係として保持する。

貨幣は、資本の存在する前に、銀行の存在する前に、賃銀労働の存在する前に、其他のものゝ存在する前に、存在することが可能であり、また存在して居た。従つて、此方面よりして、より單純なる範疇は、未だ發達せざる聚合體を支配する關係——この關係は、聚合體がより具體的な範疇に表現せられるが如き方向に進化する以前既に歴史的には存在して居る所の關係である。——を表現することが出来る、と云ひ得るであらう。最も單純なものより複雑なるものに進んでゆく抽象的思考の法則が現實の歴史行程と一致する限りに於て、さうなのである。

他方に於て、非常に發達しては居るが、歴史的には未成熟なる社會狀態の存すると云ふことは云ひ得る。其の社會に於ては、協力發達した分業等の如き最高級の經濟狀態が發生しては居るが、貨幣が猶ほ存して居ない。ペルシーの如きは其の例であつた。

またスラヴ人の社會團體にありては、貨幣及び貨幣を條件づける交換は、個々の



社會團體の内部に發生しなかつたか、若くは、少しく表はれたのみである。それは却て他の社會團體と交通する境界上に表れたのである。概して、交換を以て、社會内に發生した原始の構成的要素と見做すことは、誤りである。寧ろ交換は、一個且つ同一の社會團體の成員に對して起るものでなく、其の起原に於ては、種々の社會團體相互間の關係に於て發生するのである。更に、假令貨幣は何處に於ても、非常に早くよりその役目を演じて居たもの、それは古代に於ては、一方的にのみ發達した國民、即ち商業國民の間に於て、指導的要素となつて居たにすぎぬ。太古に於ける最も進歩した國たるギリシヤ、ローマに於てすら、貨幣の充分なる發達——近代資本家的社會の前提となつて居る所の——は、其の瓦解の時代にのみ表はれたのである。斯くの如く、此の全く單純な範疇は、社會の最も發達した狀態の下に於てのみ始めて歴史的に其の頂點に達したのである。併し、其の當時に於ても、それは、すべての經濟關係を貫いて居るものではなかつた。例へば、極盛時代のローマに於ては、現物租税及び現物給付とが基礎となつて居た。實際、貨幣制度は、軍隊關係に於てのみ充分發達して居たが、勞働の全組織を左右するに至らなかつた。

かくの如く、單純なる範疇は、より具體的なる範疇の存在する以前に、歴史的に存在して居たのであるが、彼等は複雑化した社會形態に於てのみ、充分なる內的且つ外的の發達を遂げ得るのである。然るに、より具體的な範疇は、發達未熟なる社會形態に於ても充分の發達を遂げ得るのである。

勞働は、全然單純なる範疇である。勞働を其の普遍性に於て——總括的に勞働として——觀念する事も、古い起源を持つて居る。然し、是を經濟學的に其の單純性に於て理解する所の、「勞働」なるものは、此單純なる抽象を作り出した諸々の關係の然るが如くに、一の近代的な範疇である。例へば、貨幣中心主義は、富を全く客觀的に解し、貨幣にて表はされた物(?)と見做した。マニユファクチュア制度若くは商業上の制度が、個々人の活動——商業上の勞働、マニユファクチュアの勞働——の對象よりして、富の淵源を創造するに至つた時、それは上述の見解に對して、一大進歩たるものであつた。然し、猶ほ是等の活動自身も、貨幣を作ると云ふ制限的意義に於てのみ、理解せられたのである。以上の組織に對して、重農主義は、一層進歩したものであつた。即ち、彼は、勞働の特定形態——農業——を、富を創造す



る源泉となし、目的物自體は、貨幣の假裝ではなく、總括的意義に於ける生産物、即ち労働の一般的結果であると考へた。然し、是等の生産物は、活動の制限性を有して居ることに相應して、未だ自然的に決定せられた生産物にすぎなかつた。農業のみが生産するのであつて、土地は、最高の生産源泉「開下」である。富を生産する活動に關する各種の制限を放棄し、それが、手工制工場労働、商業労働、農業労働の何れにも基くものでなく、單純に労働に基くと論破したことは、アダム・スミスによつてなされた異常な進歩であつた。吾人は、今や、富を生産する活動の普遍性と共に、富たる對象物の普遍性、即ち一般的生産物——換言すれば、一般的の労働、但し過去の客體化された労働としての労働——を有する。此の轉換が、如何に困難にして偉大のものであつたかは、アダム・スミス自身が、屢々重農主義組織に復歸せねばならなかつたとに徴して明かである。さて、此の事は、これと共に、人類が——如何なる社會形態にてもあれ、——生産者として登場した所の、最も單純にして最も古き關係に對する抽象的表現が発見せられたかの觀を呈する。それは、一方面について見れば眞であるが、他の方面より見れば眞ではない。

現實的労働の諸方法の、非常に發達したる全一體は、労働の特定方法と無關係であることを前提とする。その凡てのうち、何れが指導的であると、いふ事はない。かくの如くして、最も普遍的な抽象は、一般的には、一個のものが多くのものに共通に表はれ且つ全部のものに共通である所の、最も具體的の發達ある所のみ、成立する。此の故に、特別の形態に於てのみ是を考察することは、不可能となるのである。他方に於て、労働の此抽象性は、一般的には、種々なる労働の具體的全一體の結果たるに過ぎぬ。特定の労働に無關係であると云ふことは、各個人が容易に一の労働から他の労働に轉移することが出來、労働の特定方法が彼にとつて偶然的であり、従つて緊切の關係を持つて居ない所の、社會形態と順應するのである。茲に於て、労働は、範疇上のみならず、現實上にも、一般的富を創造する手段となり、個人に關して特殊性を發達せしめる決定要素でなくなるのである。斯くの如き状態は、資本家的社會の最も近代的な存在形態——合衆國に於て最も著しく發達して居る。かくて此處に、「労働」「一般的労働」文句なしの労働、と云ふ範疇の抽象が、近代經濟學の出發點となり、始めて、實際的に眞實化するのである。かくて最單純の



抽象——近代經濟學がその劈頭に掲ぐる所のものであり、その起源古く且つ凡ゆる社會形態の下に妥當なる關係を表現する所の——は、如上の抽象に於てのみ、近代の社會の範疇として始めて實際的に眞實化したのである。合衆國に於て歴史の所産として表はれたもの——即ち、特定の勞働に對して無關係であると云ふ事——は、例へばロシアに於ても、自然發生的な素質として表はれた、と云ひ得るかも知れない。野蠻人が總てのものに彼等を適應させる素質を有するか、文明人が總てのものに自分自身を適應するかは、誠に深い相違がある。而して更に、勞働の一定性に對して無關係であると云ふことは、ロシア人に於ては、實際上、彼等が一定の勞働に傳統的に固定して居た事と準應するものである。彼等は、外部の影響を通じてのみ、是より脱出することを得たのである。

此の勞働の例は、最も抽象的な範疇すらも、總ての時代に對して妥當性を有するに拘らず、——特に其の抽象性のために、——猶ほ此の抽象の一定性によつて等しく、歴史上の諸關係の所産であることや、また此の諸關係に對してのみ、且つ其の範圍に於てのみ、妥當性を有し得ることを、よく示して居る。

資本家的社會は、最も發達した、また、最も多様性を有する所の、歴史的生産組織である。資本家的社會の諸關係を表現する諸範疇、即ちその組成を理解することは、同時に、過去の、有らゆる、滅亡した社會形態の下に行はれた組成及び生産關係に對する洞察を與へる、資本家的社會は、過去の有ゆる滅亡した社會の廢墟と諸要素との上に築かれたものであつて、一部には、猶ほ滅失せざる殘存物が社會内に微かな生を保ち、他の一部には、従前單に暗示に止まりしものが進化して洗練せられた意義あるものとなつて居る。人間の解剖は、猿の解剖に對する鍵である。低級な動物中に存する所の、高級動物に對する暗示は、高級動物自身が既に熟知せられた時にのみ、理解せられるとが出来る。資本家的經濟は、古代其他の經濟に對して、鍵を與へる。然し乍ら、總ての歴史的相違を無視し、且つ總ての社會的形態に於て、資本家的社會形態を観察しようとする經濟學の研究方法は、如何なる意味に於ても、正しいものではない。吾人が、貢物、十分の一税、其他を理解することの出来るのは、吾人が地代の性質を理解した後である。然し、吾人は、是等のものを同一視すべきではない。



更に、資本家的社會自體は、諸種の反對的要素の發達した、進化の一形態に外ならないから、前代の社會形態の諸關係は、屢々資本家的社會内に全然萎縮してしまふか、若くは全く翻案せられる。公共團體財産の如きは其の例である。従つて、資本家的經濟の諸範疇が、總ての他の社會形態に對して眞理たるを失はない事が本當だとすれば、それは、多少の參酌の材料となるのみである。彼等は、或は進化した形態、或は萎縮した形態、或は戲畫的の形態等を包含し得るであらうが、しかし常に、それ等は、本質的に異つて居る。一般的に見れば、所謂歴史的發達は、最終の形態が前代の形態を以て自己自體を導き出した段階なりとなし、是を常に一方的に理解することに根據して居る。斯くの如きは、彼等が、甚だ稀に、全然一定せられた條件の下に於てのみ、自己批判をなし得るからである。——但し此處には、崩壞時代と信ぜられて居るが如き歴史上の時代に付て論じて居るのではない。基督教は、其の自己批判が一定の程度まで完成せられるや否や、始めて前代の神話に對する客觀的理解を助けたのである。同時に、資本家的經濟學は、資本家的社會の自己批判の始まると共に、始めて、封建的、古代的、東方的社會を理解するに到つたのである。資

本家的經濟が神話化されて、過去の經濟と純然(?)同一化しないものである以上、その前代の社會に對する批判、特に封建的社會——資本家的經濟が直接に闘争せざるを得ざりしもの——に對する批判は、恰も基督教が異教徒に下した批判、若くは新教が舊教に下した批判に類似して居る。

一般的に各種の歴史的社會科學に於ける如く、經濟學上の範疇の行程に於ても常に、次の三つのことが確立されねばならぬ。第一は、現實上に於けるが如く、思索上に於ても、主體、即ちこゝては近代資本家的社會が與へられて居ると云ふ事、第二は、此故に諸範疇はこの一定の社會、即ちこの主體の存在形態を表現し、生存條件を表現し、屢々その個々の方面のみを表現するといふ事、第三には、此故に科學としての經濟學は、如何なる意味に於ても、上に述べたるが如き時代に始めて起原して居るのでないと云ふことである。此の事は確然と記憶する必要がある。何となれば、それは經濟學の分科に關して、直接に決定的意義を有するからである。

例へば、地代、土地所有權を以て論議し始める事ほど自然らしく見えるものはない。何となれば、それは凡ゆる生産と凡ゆる生存の源泉となる土地と結びついて



居り、また多少の定著的な凡ゆる社會に於ける最初の生産形態たる農業と結びついて居るからである。然し、此の事ほど大なる誤謬はない。凡ゆる社會形態の下に於ては、總ての他の生産に優越せる一定の産業があり、其結果として、其生産状態は、總ての殘餘の生産の位置や勢力を決定して居るのである。

それは一の普遍的な光であつて、總ての殘餘の色を染むものであり、且つ其特殊性に依りて彼等を變化せしむるものである。それは一の特別のエーテルであつて、自己の中に生じ來る總ての存在物の特殊の重力を決定する。

吾人はいま牧畜民の例を取つて見よう。(但し單なる狩獵民や漁獵民は、現實の進化の開始せられる點の外のものである)。彼等の間には、散在的に行はれて居た所の、農耕の一定形態が起る。土地所有權は是に依りて定められる。土地は共同に所有せられ、此等牧畜民が多少とも傳統を固持するに従つて、此形態を多少ながら維持する。スラヴ民族の間の土地所有は此例である。定住的の農耕民に於ては、——この定住は既に大なる進歩である——古代社會及び封建社會に於て見られるやうに、農業が最も有力の産業であつた。此社會にありては、工業、其組織、竝に

是に準應する財産の形態すらも、多少とも、土地財産的特徴を帯びて居た。社會は古代ローマに於ける如く、全然農業に依頼するか、或は中世紀に於ける如く、都市内の諸關係に村落の諸組織を模倣するかであつた。資本すらも、——それが純粹の貨幣資本でない限り——中世紀に於ては、傳統的手工業の道具として、この土地財産的特徴を持つて居た。

資本家的社會にありては、此關係が逆である。農業は益々單なる一産業部門となり、全然資本によりて支配せられる。地代についても同様である。土地財産の支配して居る總ての社會形態の下にありては、自然關係が猶ほ優越して居る。資本の支配して居る社會形態に於ては、社會的の、歴史的に創造せられた要素が優越して居る。地代は資本なくしては理解し得られないが、資本は地代なくしては全然理解し得ない。資本は、資本家的社會に於て、總てのものを支配する經濟的勢力である。それは出發點とともに終點を形成せねばならぬ。また土地財産に優りて研究せらるべきである。資本及び地代が各別に考察せられた後、その相互關係が考察せらるべきである。



斯くて、經濟的範疇が、歴史上に一定的であつた所の順序に、是を系列しようとするのは、實際的でないと共に誤つて居る。彼等の順序は、寧ろ彼等が近代資本家的社會に於て相互に有して居る關係に依つて決定せられる。其關係は、彼等の自然的順序として表はれたもの、換言すれば、其歴史的發達の順序と準應するものと全然反對のものである。吾人が興味を感ずるものは、經濟關係が種々の社會形態の連續中に歴史的に占めた位置ではない。「思想に於ける」(ブルードン) 彼等の連續の順序については一層無興味である。それは、歴史上の運動の滅却した(?) 觀念にすぎない。吾人の興味を有するのは、近代資本家的社會内に於ける彼等の組成である。

フエニキヤ人及びカルタゴ人の如き商業民が古代世界に於て表現せられて居た所の純粹性(抽象的決定性)は、農民自體の優越して居た事實によりて支へられて居た。商業資本若くは貨幣資本としての資本は、資本が未だ社會の支配的要素となつて居なかつた所の此の抽象の中に表はれて居る。ロンバルド人及びユダヤ人は、農業を主として居た中世紀の社會に對して、同一地位を占めて居た。

同一範疇が種々の社會の階段に占むる所の種々の地位の一層著しい例には、次の事實がある。それは、資本家的社會の最近代の形態たる株式會社が、其の起原に於て大なる特權を有する獨占的商業會社の形式に於て表はれたことである。

國富と云ふ概念は、十七世紀の經濟學者にとつて、富は單に國家のためにのみ生産せられるものであり、國家の勢力は、其の富に比例するものである、といふ風に形成せられた。此觀念は、十八世紀の經濟學者にも、部分的には、繼承せられたところである。然しそれは、富自體及び富の生産が近代國家の目的であることを宣明し且つ國家を以て單に富の生産のための手段と見做す所の、一の無意識な、欺瞞的論法である。

經濟學の分科は、明かに先づ第一に、多少とも總ての社會形態に表はれて居る普遍的抽象的要素——但しそれは上述の意味に於て——を取扱はねばならぬ。第二は、資本家的社會の内部組織を作り、且つ基本的階級の根據して居るところの諸範疇が取扱はねばならぬ。資本、賃銀、勞働、土地所有權。彼等の相互關係。都市及び村落。三個の大なる社會的階級。彼等との間の交換。流通。信用制度(私



的の)。第三には、國家の形態を以てする資本家的社會の諸關係が問題となる。それ自體に對する關係の考察。「不生産的」階級。租税。國債。公的信用。人口。殖民地。移民。第四には、生産の國際的關係。國際的分業。輸出及輸入。爲替相場。第五には、世界市場及び恐慌。

四 生産、生産資料、生産關係、生産關係と  
交通關係、生産關係及び交通關係に  
準應する國家形態及び財産形態、法。  
律關係、家族關係

思索し置くべきことであり且つ忘るべからざる數個の點について此處に備忘を記しておく。

一、戦争は平和よりも、早く次の如き發達を完成する。即ち戦争により、また軍隊内に於て、賃銀労働、器械等の如き一定の經濟關係が、資本家的社會内部に於てよりも一層早く發達する。また生産力と交通關係とは、特に軍隊に於て顯著であ

る。

二、從來の理想主義的の歴史的記述が現實的のそれに對する關係。特に所謂文明史、即ち古い宗教史及び國家史。此機會に於て、從來の歴史的記述の種々なる方法に關しても何物か論じられ得る。所謂客觀的方法。主觀的方法（道德的のもの及び其他）。哲學的方法。

三、第二義的及び第三義的のもの。一般的には、導入且つ移植された獨創的でない生産條件。此點に關しては國際關係の影響が取り扱はれる。

四、此見解の唯物論に關する非難。自然主義的唯物論との關係。

五、生産力（生産資料）及び生産關係の概念の辨證法。即ち其限界が一定的であり且つ具體的差違を除去し得ない所の辨證法。

六、物質的生産の發達が、例へば藝術の發達と相等しからざる關係。一般的に進歩の概念は普通の抽象に於ては用ひられない。藝術其他の場合にありては、この不均衡は、實際的社會的關係自體の如く、その了解が重要でなく、又困難でもない。例へば合衆國の教育關係の歐羅巴に對するが如きである。然し、此處に論ぜんこ



する真に困難なる點は、生産關係が法律關係として不平等な（？）進化をする事である。例へばローマ法學の私法（刑法及び公法に於ては此場合が少ない）の近代的生産に對する關係の如くである。

七、此見解は必然的進行として表はれる。然し、偶然事の正しい場合もある。雜事（自由及び其他の諸點）（交通機關の效果）。世界歴史は常に必ずしも世界歴史の結果としての歴史となつて表はれない。

八、出發點は、自ら明確なる自然事實よりすべきである。主觀的及び客觀的、氏族人種等。

藝術に於ては、其の特定の黄金時代が、其の社會の一般的進化、即ち其の組織の骨髄たる物質的基礎と何等の關係を有しない事は熟知されて居る所である。例へば、希臘人を近代人、若くは沙翁と比較して見よ。更に、例へば、敘事詩の如き一定の藝術形態に關して、次の事が知られて居る。即ち、藝術生産自體が完成するや否や、その藝術形態は、もはや世界的新時代を劃する古典的姿容に於て、生産せられる事が出来ないものである。換言すれば、藝術自身の範圍内に於て、その一定の重要な

形態は、藝術發達の未熟なる階段に於てのみ可能である事が明かである。若し此事が、藝術そのもの、範圍内に於ける種々なる藝術形式の相互關係について起るものだとすれば、社會の一般的發達に對する藝術の全範圍についても、同様に此事が起ると言つても敢て驚くに當らない。困難は、此等の矛盾を一般的に理解する事についてのみ存して居る。彼等が特殊化されるや否や、彼等は既に説明せられる。ギリシヤ藝術の現代に對する關係、及び沙翁の現代に對する關係を例にとつてみよう。ギリシヤの神話が、ギリシヤ藝術の武器庫であつたのみでなく、其基礎であつた事は、よく知られて居る。ギリシヤ人の想像力、隨つてギリシヤ人の藝術の根據してゐる所の、自然及び社會的關係に關する想念は、自働器械と鐵道と蒸氣機關と電報とを以てしても可能であらうか？ ヴァルカンはロバート・エンド・ニンバニイに對して、ジュピターは避雷針に對して、ヘルメスは「動産銀行」に對して出現し得るであらうか？ 總ての神話は、想像力に於て、且つ想像力を通じて、自然の諸勢力を克服し、支配し、形成する。故に、自然力に對する現實の征服の發達と共に、フアーマ神（風聞の女神）は、印刷所街と共に何をなし得るであらうか？



ギリシヤ藝術はギリシヤ神話を前提とする。即ち、自然及び社會形態自體は、民族の空想力を通じて、既に無意識の藝術的方法中に推敲せられて居るのである。これは其の材料である。然し、如何なる神話も、放恣に作られはしないし、又自然を藝術的に推敲する事も自恣に行ははしない。(其の中には總ての對象物、即ち社會が包含せられて居る)。埃及神話は、如何なる意味に於ても、ギリシヤ藝術の地盤若くは母胎となり得ない。然し、如何なる場合に於ても、神話は存在せざるを得なかつた。如何なる場合に於ても、ギリシヤ藝術の基礎を形成した社會進化は、決して、自然に對する總ての神話的關係、即ち自然を神話化する關係を除外した所のものでなかつた。即ち神話より獨立した空想を藝術家に求むる事は不可能である。

これを他の方面より考へて見よう。アヒレスは火薬や彈丸と兩立することが出来たのであらうか？ 若くは一般的に見て、イリアードは印刷紙や印刷機械と兩立したてあらうか？ 朗詠と朗吟とミュージズ神とは印刷師の緊棒のために必然に消滅しなかつたてあらうか？ かくて叙事詩の必然的條件は滅びなかつたてあらうか？

然し困難はギリシヤの藝術と叙事詩とが特定の社會進化の形態と結びついて居るといふ事を解することに存しない。困難は、寧ろ彼等が今日猶ほ吾人に藝術的享樂を供し、且つ特定の關係に於て規範となり、及び難き模型となつて居るといふ事を解する事に存して居る。

成年は再び少年となる事は出来ない。然し彼は少年らしくなるとは出来る。然し少年の純眞は、成年者を喜ばせないであらうか？ また彼は彼の眞理より高き階梯に於て再現すべく努力してはならないであらうか？ 各時代に於て、その時代の天真なる特質は、少年の純樸なる性格中に復活しないであらうか？ 何故に、人類の最も美しく發展した其の社會的幼年時代は、再び歸らざる階段として、永久の魅力を働かないのであるか？ 悪く育てられた少年もあれば、早熟の少年もある。古代諸民族の多くは此の範疇に屬して居る。ギリシヤ人は正當の少年であつた。ギリシヤ藝術の吾人に對する魅力は、彼等の成長した所の、未發達の社會階段と抵觸はしない。それは寧ろ、其の社會階段の結果であり、彼等の成長した所の、そして彼等のみ主張し得た所の、未熟なる諸々の社會的條件の回歸するを得な



い事と離るべからざる關係を有して居る。

(原稿は此處で切れてゐる)

## 第一章 商品

資本主義社會の富は尨大なる商品集積となつて現れる。個々の商品は其成素として存在するのである。然し各商品は使用價值と交換價值と云ふ二重の觀察點を具へてゐる。(一)

(一)『吾人の所持する總らゆる事物は二個の用法を有す。其一は本質的の用法であり他は非本質的若くは第二義的の用法是れである。例へば一足の靴は穿く爲めにも使用せられ、交換する爲めにも使用せられる。兩者は共に靴の用法である。靴を欲してゐる他人に對し、靴と貨幣或は食物と交換してやる人は、其靴を靴として使用したるものに外ならない。併し是は其本質的或は第一義的の目的ではない。何故かなら、靴は交易の爲めに製造せられるものでないからである。同一のことは有らゆる所有物について言はれる。』(アリストテレス「政治學」)

商品とは英國經濟學者の語法を以てすれば、先づ「人生に何等か必要なる、有用なる、若くは快適なる事物」であり、人間の欲望の對象物であり、之を廣義に解釋すれば人間の生活資料である。使用價值として役立つ商品の此特質と、商品本來の明白の存在とは一致してゐる、例へば小麥は綿、硝子、紙等の使用價值とは異つた特



種の使用価値である。使用価値は使用に於てのみ価値を有し、消費てふ過程に於てのみ實現せられる。同一の使用価値は種々なる方法にて利用せられる。しかし、其利用せられ得る全範圍は其使用価値の具有する一定特質により制限せられるのである。更にそれは質的にも量的にも制限を蒙る。種々の使用価値は其自然的性質に従ひ各々異なる尺度を持つてゐる。例へば一ブツシエルの小麥、一キロの紙、一ヤードのリンネルと云ふが如くである。

富の社會的形態が如何様にもあれ、使用価値は常に其形態とは何等拘はるところなき獨得の内容を形成する。人々は小麥を味つて其耕作者がロシアの農奴なりしか、フランスの小農なりしか、或は英國の資本家なりしかを味ひ分ける事は出來ない。それ故に、使用価値は社會的欲望の對象物であり、社會的には相互に關係して居るものではあるが、何等社會的生產關係を示顯するものではない。今、使用価値としての商品の例をダイヤモンドにとつて考へて見よう。我々は一見したのみで其ダイヤモンドを商品だと斷言することは出來ない。ダイヤモンドが使用価値として美術用に、若くは工業用に、即ち遊女の胸に飾られるか將た硝子切職

工の手に使用せられる場合に於ては、それは單にダイヤモンドであつて、商品と云ふことは出來ないのである。一物が商品たり得るには必ず使用価値たることを必要條件とするが、一物が商品であるか否かと云ふことは使用価値そのものとは何等本質的の關係を有しない。かゝる經濟上の根本形態と何等關係なき使用価値即ち使用価値としての使用価値は經濟學の研究範圍の埒外に屬するものである。(二)使用価値が經濟上の根本形態に觸れる場合に於てのみ、それは經濟學の研究範圍に入り來る。而して使用価値は交換価値と呼ばれる一定の經濟關係の直接なる實材的基礎を成すのである。

(三)ドイツの學者達が使用価値を『財』と稱し、好んで是を論議する理由は此處にある。ルドキツヒ、スタイン『國家學體系』(L. Stein, System der Staatswissenschaft) 第一卷『財』に關する章參照。『財』(Güter)に關する合理的智識を得んとせば、吾人は商品學に關する論說を研究せねばならない。

交換価値は先づ使用価値が相互に交換せられる數量關係として現はれる。斯の如き關係の下に於て彼等は各々等しき交換量を構成する。即ちプロバシウスの詩一卷と八オンスの喫煙草とは、一方は煙草、他方は挽歌といふ使用価値の相



違こそあれ、同じ交換価値を顯はすのである。たゞ正しい比例の保たれて居る限り、一種類の使用価値は他種類の使用価値に對し、交換価値として等しい価値を有するのである。宮殿の交換価値は一定量の靴墨を以て表現することも出来る。反之、ロンドンの靴墨製造業者は一定量の靴墨の交換価値を現はすに數個の宮殿を以てすることも出来る。斯の如くして一定量の諸商品は、其自然的形態に關係なく且つ彼等が使用価値として役立つ特種なる欲望に拘はるところなく、相互に交換せられ、等價物として作用し、其外觀の異なるにも拘はらず、同一の統一を表現するのである。

使用価値は直接の生存資料である。而して、是等の生存資料は、それ自身、社會生活の所産であり、人間生存力の費された結果であり、實體化された労働 (Vergegenständliche Arbeit) である。總ての商品は社會的労働の體現であつて、同一の實體の結晶物である。今、吾人は交換価値にて表現せられる此實體即ち労働の本質を少しく考察して見よう。

一オンスの金、一噸の鐵、一クォーターの小麥、二十ヤードの絹は各等しき交換價

値を代表するものであるとする。彼等は各使用価値間の質的差違の除去せられた等價物として同一労働の等量を表現して居るのである。彼等全部に等しく體現せられたる労働は、それ自身、同一の、同質の、單純の労働でなければならぬ。其の労働が金、鐵、小麥、絹等に體現せられてゐるか否かと云ふことは重大な問題ではない。それは恰も酸素の場合に於て、酸素が鐵の錆の中に、空氣中に、葡萄の液の中に人體の血液の中に含まれてゐるか否かといふ事が問題でないのと同じである。然しながら金を採掘すること、鑛山から鐵を採掘すること、小麥を耕作すること、絹を機織することなどは、質を異にしてゐる數種の労働である。實際、使用価値の事實上の差違は生産方法の差違、即ち此等の使用価値を創造する仕事の差違に於て現はれる。交換価値を創造する労働は、使用価値の特種な實材と無關係であると同様に、労働その物の特種なる形式に拘はるところがない。更に種々なる使用価値は種々なる個人の仕事の生産物であり、従つて個別的に異なる種々なる労働の結果である。然し乍ら、彼等は交換価値としては、同等同質の労働、即ち労働者の個性の除去せられた労働を代表する。かくて交換価値を創造する労働は、抽象的、普



遍的、労働 (abstrakt allgemeine Arbeit) である。

一オンスの金、一噸の鐵、一クォーターの小麥、二十ヤードの絹が等量の交換価値であり、各々等價物であると假定しやう。しからば、一オンスの金、半噸の鐵、三ブツシエルの小麥、五ヤードの絹は全く大さの異つた交換価値である。而して此量の差違こそ、彼等が交換価値として有し得る唯一の差違である。不同量の交換価値として其交換価値は彼の單純、同種、抽象的なる普遍的労働——此労働が交換価値の實體を形成するのである——の多少や大小量を代表してゐる。然らば、如何にして此等の量を尺量すべきかと云ふ問題が起る。若くは交換価値としての商品の量的相違は、それら商品中に體現せられた労働の量的相違に外ならないから、寧ろ其労働自身の分量如何と質問した方がよいかも知れぬ。恰も、運動の分量が時間によつて測定せられる如く、労働の分量は労働時間 (Arbeitszeit) によつて測定せられるのである。労働の一定の量が存在するとき、是を測定する唯一の標準は其繼續時間の差違である。労働時間としての労働は、其標準に關し、時、日、週と云ふが如き自然的な時間測定の尺度を有してゐる。労働時間は労働の形態、組織、個性等

とは何等關係なき眞の労働實體 (Das lebendige Dasein) である。實に之は量的に眞の労働實體であるばかりでなく、同時に其固有の測定性を具有してゐる。商品の使用価値中に體現せられたる労働時間は、彼等を交換価値たらしめ、従つて商品たらしめる實體であると同時に、一定量の価値を測定する事に役立つのである。同一労働時間の體現して居る種々なる使用価値間の相當量は各々等價物である。換言すれば、總ての使用価値は、費され且つ體現せられた労働時間が同量ならば、何れも等價物である。交換価値としての總ての商品は、凝結せる労働時間の一定尺度に外ならない。

交換価値が労働時間によつて決定せられることを了解せんが爲めには、次の重要な點を記憶せねばならない。即ち第一に労働が單純且つ同質の労働に還元せられること、第二に交換価値を創造する特殊なる方法手段、即ち商品を生産する労働が社会的労働なること、最後に、使用価値の創造者としての労働と交換価値の創造者としての労働とが差違を有することこれである。

諸商品の交換価値を測るに該商品中に包含せられた労働時間を以てせんと欲



するなら、種々なる労働を無差別、同質、單純の労働に還元せねばならない。約言すれば、質的に同一であるが、たゞ量的に異なる労働に還元せねばならない。此還元は一見抽象の様であるが、社會的生產行程に於て日々生起しつゝある抽象である。總ての商品を労働時間に分解する事は、總ての有機體を氣體に還元する化學上の還元よりも、何等より大なる抽象でなく、又より不眞理なるものでもない。斯の如く時間にて測定せらるゝ労働は、實際には各人の労働として表はるゝものでなく、反つて個々の労働者は單なる労働の機關として表はれる。換言すれば、労働が交換價値に依つて表はされて居る限り、其労働は普遍的な人間労働として現れるのである。此普遍的な人間労働の抽象は一定の社會の普通労働者が爲す

事の出來る平均労働 (Durchschnittsarbeit) —— 即ち人間の有する筋肉、神經、腦力等の一定的な生産上の出費 —— に存在してゐる。普通労働者が容易に行ひ得るところの、又彼等が何等かの方法を以て行はねばならぬところの労働は、單純労働 (Einfache Arbeit) である。此の平均労働の特質は國を異にし文化階段を異にするに従つて異なるものではあるが、特定の社會に於ては一定的なものとして現れてゐる。

統計の示す如く、資本主義的社會に於ては、此單純労働は労働の大部分を占めてゐる。若しもAが鐵の製造に六時間、リンネルの製造に六時間を費し、Bも亦鐵とリンネルの製造に各六時間を費したとせよ。而して今Aが十二時間かゝつて鐵を製造し、Bが十二時間労働してリンネルを製造したとすれば、同一労働時間が異つた方面に適用せられたのだと云ふ事は自明の理である。併し其高級の強度と其獨特の重要とにより、平均労働の標準以上に傑出せる熟練労働 (複雜労働) に就いてはどうであるか？ 此種の熟練労働も是を構成する單純労働に分解する事が可能である。熟練労働は、より高級な強度を有する單純労働に外ならない。従つて例へば熟練労働の一日は、單純労働の三日に匹敵するのである。然し今は此還元を律する諸法則を論ずる時でない。去り乍ら、斯の如き還元があり得ることとは明瞭である。何故かなら、交換價値としての最も卓越せる熟練労働の生産物は、一定の比例を以て計算せられるならば、單純なる平均労働の生産物と等價であるからである。換言すれば、それは一定量の單純労働と等しいのである。

(III) 英國の經濟學者は單純労働者を指して不熟練労働 (Unskilled Labour) と呼んでゐる。



更に労働時間に依つて交換価値を決定せんとするに當つては、或一定の商品例へば一噸の鐵に等量の労働が體現せられてゐると云ふ事實を忘れてはならない。それがAの仕事であるか、Bの仕事であるかと云ふことは問題でない。即ちそれは個々の個人が、各々一定質量の同一使用価値の生産に對して、等量の労働時間を費したことを意味する。換言すれば、一商品中に包含せられる労働時間は、其商品の生産に必要であるところの労働時間だと言ふことが出来る。即ち其時間は特定の一般的生産條件の下に於て、同一商品の新雛形を生産するに要する労働時間である。

交換価値の分解に於て明かなるが如く、交換価値を創造する労働の條件は、労働を社會的に規律する事に存してゐる。即ちそれは社會的労働として規律せられる。但し此處に社會的といふのは一般的の意味でなく、特殊なる意味に於てするのである。それは社會生活上の特別なる形式である。労働の同質單純性とは、先づ第一に各個人の労働の平等性を意味し、平等なるものとしての各人の労働の相互關係を意味し、總ての労働を事實的に同一労働に還元する事を意味する。各人

の労働は、交換価値に依つて表章せらるゝ限り、此平等性でふ社會的特質を有し、また他の總ての人々の労働と平等なる關係に立つ限りに於て、交換価値にて表はされるのである。

更にまた、個々の人の労働時間は直接に普遍的労働時間として交換価値中に現れる。此個々の人の労働の普遍的特質は同時に其社會的特質を表示するものである。交換価値中に表現せられたる労働時間は、個人の労働時間であるが、而も各人が同一労働を爲す限り、それは他の個人との差異を沒した個人の労働時間であり、凡ゆる個々の人の労働時間に外ならない。それ故に一定の商品を生産せんが爲めに一人の要せし労働時間は、他人が同一商品を生産するに當つても費さねばならぬ必要労働時間なのである。其時間は一個人の労働時間たり、彼れの労働時間ではあるが、同時に何人が労働するに當つても、總て等しく必要とする労働時間であつて、敢て特定の個人の労働時間が何程であるかを問はない。普遍的労働時間としての其時間は、一般生産物即ち普遍的等價物、即ち體現せられたる一定量の労働時間中に表現せられる。尤も體現せられたる一定量の労働時間は、直接に個人の生産物



として表はれる使用価値の特殊形態とは全然無関係なるもので、他人の生産物として表はれる使用価値の他種形態中に自由に轉換し得るものである。斯の如き普遍的數量 (Allgemeine Grösse) たる限りに於て、それは社會的數量 (Gesellschaftliche Grösse) である。個々人の労働が交換価値たる爲には普遍的等價物 (Allgemeine Äquivalent) に變ぜられねばならない。即ち個人の労働時間は普遍的労働時間とならねばならないし、又普遍的労働時間は個人の労働時間とならねばならない。此の事は數人が共同して其の労働時間を消費し、其労働時間の種々の分量を種々なる使用価値の生産に貢献したる場合にも當嵌るのである。かくて實際上、個人の労働時間は社會が一定の使用価値の生産即ち一定の欲望満足に際して必要とする労働時間である。然し乍ら此處に吾人の問題となるものは労働が社會的特質を獲得するに至る特殊なる形態に關する問題のみである。例へば紡績工の一定量の労働時間が百ポンドの撚絲に體現されてゐると假定し、また織工の生産物たる百ヤードのリンネルが同一量の労働時間を表現するものなりと考へてみよう。是等二個の生産物は同量の普遍的労働時間を表現して居り、従つて同量の労働時間

を包含する各々の使用価値の等價物であるから、彼等は相互に等價物たるのである。紡績工と織工との労働時間は普遍的労働時間として表はれ、従つて兩者の生産物は各等價物となつて表はるゝが故にのみ、織工の労働は紡績工の労働に、紡績工の労働は織工の労働に轉換することが出来る。即ち一種の労働は他種の労働と轉換され得る。かくて労働の社會的特性は兩者に對して始て實を現はすのである。併し、それは田園的家長的工業の下にあつては全然趣を異にしてゐる。即ち、紡手と織手とは同じ屋根の下に住み、家族の自足的需要を満たさんが爲め、家族中の女子は紡ぎ、男子は織る。尤も家族てふ限界内に於ては、絲もリンネルも社會的生産物であり、紡ぐことも織ることも社會的労働であつたのだ。然し乍ら、社會的特性は普遍的等價物としての絲と、普遍的等價物としてのリンネルとが交換されるといふ事に存して居ない。換言すれば、兩者は同一普遍的労働時間の同種同量の表現物として、相互に交換されると云ふ事實を有するものでない。それは寧ろ自然發生的な分業關係を具へてゐる家族關係が、労働の生産物に對して其特有の社會的極印を捺したものである。今一つ、中世に於ける賦役義務と自然物貢



納との例に付て見よう。其の當時に於て社會上の紐帶を成してゐたものは、自然的形式により各人々々の行ふ特殊特有の労働であつて、決して普遍性を具へた労働ではなかつた。最後に、吾人があらゆる文明諸民族の歴史の入口に於て發見する自然發生的形態を具ふる共同労働に付て考察してみよう。(四)此場合に於ては個人の労働が普遍的労働の抽象的形態をとり、且つ其生産物が普遍的等價物の形態を具へてゐる爲に、労働の社會的特性が明かとなつてゐない。共同團體の下に於ける生産の本質は、個人の労働を私的労働たらしめず、其生産物を私有生産物たらしめない事にある。個人の労働は寧ろ社會的有機體の成員の直接的職分となつて現れる。反之、交換價值中に表はれる労働は、個々別々となつた個人個人の労働として表はるゝのである。それは全然反對の形態、即ち抽象的普遍的労働の態様を具ふる場合に於てのみ、社會的労働となる。

(四)自然發生的な共產制の形式は、特にスラヴ族若しくはロシア人に全然限られた形式なりと云ふ愚説が、最近時に流行した。それは吾人がローマ人、ゲルマン人、ケルト人等についても溯及し得る原始的形態である。それに付て、多くの例證を提供する全體的な模型が、部分的には廢滅してゐるが、インドに存してゐる。アジャ風の、殊にインド

風の共產制を詳しく研究すれば、原始共產制の諸形式の瓦解して行つた種々の形式を發見することが出来る。例へばローマ人及ゲルマン人の私有財産の種々なる原型は、インドの共產制の諸形態から導き出すことが出来る。

交換價值を創造する労働は、最後に於て、人間の社會的關係が事物の社會的關係に轉換されると云ふ事實に依つて特徴づけられてゐる。二個の使用價值が交換價值としての相互關係を保つてゐる場合、各人の労働は相互に同等且つ普遍的なるものとして關聯し合つてゐる。故に、交換價值が各人の間の人的關係だと云ふのが正しいならば、(五)交換價值は物的に假裝せられたる關係だとも云ひ得る道理である。宛も、一ポンドの鐵及び一ポンドの金は各々物理學的、化學的性質を異にせるにも拘らず、同一重量を代表する如く、同一労働時間を包含する二商品の各使用價值は同一交換價值を代表する。斯の如く、交換價值は、當然、使用價值の社會的自然的到達點として現はれ、物自體中に使用價值が包含せられる性能として現れる。其の結果、使用價值は其交換過程に於て一定の量的關係に轉換され、等價物を形成するに至る。宛も化學上の諸要素を一定の量的關係によりて結合すれば、化學上の等價物を生ずるに至ると同じである。社會的生產關係が物の形態を具



ふる事を平凡自明の如く吾人が考ふるのは、唯日常生活の習慣によつてである。斯くして、其の労働に於ける人的關係は、諸物相互の間や、物と人との間の關係として現れるのである。然し乍ら、商品に於ては此の混雜は甚だ單純となる。交換價值としての商品關係は生産的活動をする各人間の相互關係に過ぎないと云ふ事は、多かれ、少かれ、何人も了解し得るところである。此の外見上の單純性は、高度の生産關係に於ては消滅してしまふ。貨幣制度に關する總ての幻想は、貨幣が社會生産關係を代表するものと看做されずして、或特質を有する自然物質の形態だと看做される事に原因してゐる。貨幣制度の幻想を輕蔑する近代經濟學者も、資本の如き經濟上の高度の範疇を論ずるに及んで、直ちに同一幻想に陥つてゐる。彼等が一物體なりと辛じて考へ得たるものが社會的關係として不意に表はれ、社會的關係なりと辛じて定義せんとするに當りて再び嘲けるが如く一物體として表はるゝに及んでは、彼等は他愛もなく驚歎を告白せざるを得ないのである。

(五)「價值は二個の人間の間の關係である。」クストヂ (Ostodj) 編纂 「イタリヤ古典經濟學論集、近世の部」(Scrittori classici Italiani di Economia politica. Parte Moderna.) 第二卷「ガリアニ著「貨幣論」(Galiani, Della Moneta.) 二百二十頁。ミラノ、一八〇三年出版。

誠に、商品の交換價值は實際上、平等普遍的労働としての個人労働の相互關係に過ぎず、且つ労働の特殊なる社會的形態たり、本質的表現に過ぎざるが故に、労働は交換價值の唯一の源泉、随つて富が交換價值によりて形成せられる限り、富の唯一の源泉なりと言ふのは、寧ろ贅言に過ぎないのである。同様に自然物質其ものは何等の交換價值をも包含してゐないと云ふ事も(六)一個の贅言に過ぎない。何となれば、労働自身も、交換價值自身も、何等の自然物質を包含してゐないからである。乍然、ウイリアム・ペティ (William Petty) が「労働は富の父にして土地は其の母なり」と云ひ、バークレー (Berkeley) が「四個の要素と其中に含まれた人間労働とは富の眞の源泉にあらざるか」と疑ひ、(七)或はアメリカのトーマス・グーバー (Thomas Cooper) が其問題を一層單純化して「例へば一片のパンから、麵麩、燒商人が麥粉に加へた労働、製粉者が小麥に加へた労働、農夫が耕作、播種、看視、收穫、打穀、種子の整理や輸送に加へた労働等を差引けば、後に何が残るか。原野に野生のまま育ち、人間の欲望の對象たり得ない僅かの穀草が残るのみである。」(八)と言つたが、總て是等の見解は交換價值の源泉としての抽象的労働に基いて立てた見解



てなく、物質的富の源泉としての具體的労働に基いて其論を進めてゐるものである。約言すれば、使用価値を創造する労働についての見解である。商品の使用価値に付て考ふる時、吾人は其中に吸収せられてゐる特殊なる有用性及び明確なる適合性を假定するものであるが、商品の見地から考察するに及んでは、有用なる労働としての労働を考へ得るのみである。使用価値としてのパンを考ふる時、吾人は食料品としての其パンの特質を考察するが、農夫、製粉者、麵麩焼商人等の種々なる労働に付ては少しも考ふるものではない。或る發明によつて此労働の二十分の十九が節約せらるゝとも、一塊のパンの役立つ程度は少しも以前と變らない。又若し出來上つた儘で天から降つて來たとしても、其使用価値の一原子をも失はないであらう。而して、交換価値を創造する労働は、普遍的等價物としての商品の平等性となつて表はれるが、有用性を目的とする生産的活動としての労働は、無限に多様な使用価値となつて實を現はす。交換価値を創造する労働は抽象的、普遍的、平等的の労働であるが、使用価値を創造する労働は具體的、特殊的の労働であつて、實材と形態との異なるにつれ、無限に異なる労働方法に分裂してゐるのである。

る

(六)『自然の状態に於て、物質は常に價值を缺いてゐる。』マカロック「經濟學の起原、發達、特別目的及び重要に關する研究」(Mac Culloch, Discours sur l'origine de l'économie politique etc. traduit par Prevost.) ジュネーブ、一八二五年出版、五十八頁。何人もこの一マカロックすらも、「物質」と、また牛ダースの不必要物とを以て價值の本質を説明しようとする獨逸の「思想家」の「拜物狂」以上に出でて居る事に氣が付くだらう。ローレンツ、フオン、スタイン、前掲書第一卷百十頁を比較して見よ。

(七)「クレー」『質問者』(Berkeley, The Querist) ロンドン、一七五〇年版。「四個の要素と其中に含まれる人間労働とは、富の眞の源泉にあらざるか？」

(八)トマス、クーバー「經濟學原理講義」(Th. Cooper, Lectures on the elements of political Economy) ロンドン、一八三八年版。(コロンビア、一八二〇年版)、九十九頁。

使用価値を創造する労働に關して、其労働を以て、これより生ずる物質的富の唯一の源泉だと論斷する愚論がある。労働は數個の目的のために材料を適用せんとする活動であるから、先づ労働の前提として必要な物は物質に外ならない。労働と原料との比例は、使用価値の異なるにつれて非常に異なるものであるが、使用価値は必ず常に自然的地盤を具有してゐる。労働は自然物を一若くは他の形



態に適用せんとする目的行爲であつて、人間生存の自然的條件をなし、人間と自然との間に於ける材料の變化を行ふについての條件であり、あらゆる社會的形態より獨立するのである。反之、交換價値を創造する労働は、労働の特殊なる社會的形態である。例へば特殊の生産的活動としての裁縫労働は、上著を製造するが、上著の交換價値は作らない。上著の交換價値は特殊の裁縫労働そのものより生ずるものでなく、抽象的普遍労働としての裁縫労働より生ずるものである。即ち之は裁縫師の作る能はざる一定の社會的關係に屬してゐるものである。故に、古代の家庭的工業の下に於ける婦人は、上著を作つたが、上著の交換價値を作らなかつた。物質的富の源泉としての労働は、税關官吏たるアダム、スミスに知られてゐたと同じやうに、立法者モーゼにも知られてゐたのである。(九)

(九)リストは使用價値の源泉としての労働と、富の一定の社會的形態即ち交換價値の創造者としての労働との相違を理解する事が出来なかつた。餘りに實際的なる彼はかくの如き概念を到底了解する事は出来なかつた。従つて彼は近代英國經濟學者にエジプトのモーゼの單なる剽竊者を發見したものである。

此處に吾人は交換價値が労働時間に依りて決定されると云ふことから生ずる

二三の重要な命題を考察して見やう。

凡ゆる商品は使用價値としては、其有用性を其商品自身に負ふてゐる。例へば小麦は食料品として役立つ、機械は一定の關係内に於て労働を節約する。單に使用價値であり、消費の對象物たるに過ぎないところの商品の此任務は、商品の勤務——商品が使用價値たり得る勤務——と稱する事が出来る。併し商品は、交換價値としては、常に結果の方面からばかり觀察せられるのである。此場合に問題となるのは商品の提供する勤務ではなく、商品の生産の爲に要せられたる勤務(十)に關してである。即ち例へば機械の交換價値は其節約する労働時間量に依りて決定せられるのではなく、該商品自身の生産の爲めに費された労働時間量、従つて同一種類の新機械を生産する爲めに要せられた労働時間量に依りて決定せられるのである。

(十)如何なる種類の「勤務」がジー、ビー、シー、エフ、パステリア型の經濟學者に依りて「勤務」と稱されたかは容易に知ることが出来る。賢明な是等の經濟學者はマルサスが充分指摘した様に一定の經濟關係の特殊の形態から總て是れを抽象して居たものである。



それ故に、若しも商品の生産に費される労働量が不変であつたならば、その商品の交換価値も常に同一である。併しながら生産の難易は常に變化する。労働の生産力が増加すれば、同一使用価値はより短い労働時間内にて生産せられる。又労働の生産力が減少すれば、同一使用価値の生産に、より多量の労働時間が必要となる。斯の如くして一商品中に包含せられた労働時間の量、即ち交換価値は常に變動的なるものであつて、労働生産力の増減と反比例して増減するのである。製造業に於いて將來を見越して適用される労働の生産力も、農業及び其他の原始産業に於ては、人力の支配を超越して適用される労働の生産力も、農業及び其他の原始産業の労働も、地殻内に於ける諸種の金屬の含有量の多少に依つて、其産出量を異にする。又同一労働にても豊年には二ブツシエルの小麥中に體現され、凶年には一ブツシエルの小麥中にしか體現されないと云ふこともあらう。斯の如き場合には、自然的關係としての稀少若くは豊富が、商品の交換価値を決定するのである。故かなら其稀少若くは豊富は自然的條件に依頼して居る或る種の労働の生産力を決定するからである。

種々なる使用価値は不等量の同一労働時間即ち同一交換価値を包含する。使用価値の量が他の使用価値と比較して小なれば小なるほど、其特種なる交換価値 (Spezifische Tauschwert) はより大となる。吾人は金、銀、銅、鐵、或は小麥、裸麥、大麥、燕麥等の如き一定の使用価値が特種なる交換価値の連續體を形作り、假へ正確に同一數字率を保持しなかつたとは云へ、遙かな未開時代以來、多少の量の相違こそあれ、ほぼ同一の比例を保つて來たことを知つてゐる。吾人はこの事實に依りて、社會の生産力の進歩發達が、種々なる商品生産に必要な労働時間に對して、等しくか或ひは殆んど等しく影響したと云ふ結論に到達することが出来る。

或商品の交換価値は其商品の使用価値中に表はれるものではない。併し普遍的社會的労働時間の體現としての一商品の使用価値は、他種商品の使用価値に對して一定比率を有する。即ち一商品の交換価値は他種商品の使用価値中に表現せられる。誠に等價物は他種の商品の使用価値中に表現せられた一商品の交換価値である。例へば一ヤードのリンネルが二ポンドのコーヒーと同じ價値を有して居ると云ひ得るならば、リンネルの交換価値はコーヒーの使用価値、即ち其一



定量の使用價值中に表現せられるのである。此比率さへ存して居るならば、吾人は一定量のリンネルの價值をコーヒーにて云ひ表はし得るのである。一商品例へばリンネルの交換價值は、其等價物たる他種商品例へばコーヒーの比率に限定せられ居るものでないことは明なことである。一ヤードのリンネルに包含せられた普遍的勞働時間量は、同時に、他の總べての商品の無限に多様な使用價值の量に體現せられて居る。他種商品の使用價值は、一ヤードのリンネルが包含する同一勞働時間量を表はす比率に於いては、一ヤードのリンネル等價物となるのである。従つてこの一商品の交換價值は、總て他種商品の使用價值が其等價物を形作る無数の方程式にて充分表はし得る。一商品の交換價值は、之等の方程式の總和中に於てのみ若くは一商品が他種商品と交換せらるゝ種々なる比率の總和にて表はされる場合に於てのみ、徹底的に普遍的等價物として表現せられるのである。例へば其方程式の連續は次の如くである。

$$\begin{aligned} \text{一ヤードのリンネル} &= \frac{1}{2} \text{ヤードの茶} \\ \text{一ヤードのリンネル} &= \frac{2}{3} \text{ヤードの珈琲} \end{aligned}$$

而して以上の方程式は次の如く表はすことが出来る。

$$\begin{aligned} \text{一ヤードのリンネル} &= 8 \text{ヤードのパン} \\ \text{一ヤードのリンネル} &= 6 \text{ヤードの更紗} \\ \text{一ヤードのリンネル} &= \frac{1}{8} \text{ヤードの茶} + \frac{1}{2} \text{ヤードの珈琲} + \frac{2}{3} \text{ヤードのパン} + \frac{1}{2} \text{更紗} \end{aligned}$$

故に若しも吾人が一ヤードのリンネルの價值が充分表はれてゐる方程式の總和を既に知つて居たならば、吾人は其交換價值を連續體の形式中に示すことが出来たのである。實際は、この連續は永久に續く。何故ならば、商品の範圍は不斷に擴張し、收縮することがないからである。併し一商品の交換價值は、斯の如く總ての他種商品の使用價值に依つて測定せらるゝが、同様に總べての他種商品の交換價值は、更に此一商品の使用價值に依つて測定せらるゝのである。(十一) 今、一ヤードのリンネルの交換價值が半ポンドの茶、二ポンドの珈琲、六ヤードの更紗、八ポンドのパン等にて表はさるゝとしよう。然らば珈琲、茶、更紗、パン等は第三物品たるリンネルと等しき比率に立つ限り、互に等しいものである。それ故にリンネルは



之等商品の交換価値の共通的尺度として役立つのである。普遍的労働時間の體現としての各種商品、即ち普遍的労働時間の一定量たる各種商品は、更に總ての他種商品の使用価値の一定量中に其の交換価値を表現する。反之、總ての他種商品の交換価値は此一特定商品の使用価値に依つて測定せられる。併し交換価値としての各種商品は、同時に總ての他種商品の交換価値の共通的尺度として役立つ一特定商品である。然も他方、それは各種の商品の全範圍中に於いて直接に各々の交換価値を表はす所の唯一の商品なのである。

(十一)「測定せられた事物は、一定の方法にて測定せらるべき事物の尺度となる。これは測定と云ふことの本質上、測定された事物に對し生じ得る關係である。」クストデ編 纂前掲書、第三卷、モンタナリ「貨幣論」(Montanari, Della Moneta.) 四十八頁。

一商品の價值量は該商品以外に存在する他種商品の數の多少に依つて影響を蒙らない。併し交換価値を表示する方程式の連續の大小は、他種商品の種類の大いに關聯するのである。例へば珈琲の價值が代表せられて居る方程式の連續は珈琲の交換せらるゝ範圍を表示し、珈琲の交換価値として働く限界を表示する。普遍的社會的労働時間の體現としての商品の交換価値は、無限多種なる使用価値

に對する等價物となつて表はされる。

吾人は既に一商品の交換価値は、直接に該商品中に包含せられて居る一定の労働時間と正比例して變化することを知つた。其商品の體現して居る交換価値、即ち他種商品の使用価値中に表はされた交換価値は、總ての他種商品の生産の爲めに費された労働時間が變化する率に依らねばならない。例へば、一ブツシエルの小麦の生産に必要な労働時間が同一であるのに、總べての他種商品の生産に費される労働時間が二倍を要するに至つたならば、其等價物中に表はされた一ブツシエルの交換価値は以前の半分となる。其結果は實際上一ブツシエルの小麦の生産に必要な労働時間が半減し、然も總ての他種商品に要せられた労働時間が少しも變化しないこととなるのである。諸商品の價值は彼等が同一労働時間の内にて生産せられ得る比率にて決定せられる。この比率が如何なる變化を爲し得るかを見んが爲め、今A及びBなる二商品の例に就いて研究して見よう。

第一の場合。先づBなる商品の生産に要する労働時間が不變なりと假定する。この場合に於てBによりて表はされたAの交換価値は、Aの生産に費された労働



時間の長短に比例して騰落する。

第二の場合。Aの商品の生産に要する労働時間が不変なりとする。然らばBに依りて表はされたAの交換価値は、Bの生産の爲に要せられた労働時間の長短に反比例して騰落する。

第三の場合。A・B二商品の生産に費された労働時間が同一率にて騰落するとする。然らばA及びBが等價物たることは不変である。或る原因の爲め總ての労働生産力が一様に減少したとすれば、各種商品は其の生産の爲めに一様の労働時間を増さねばならぬ。而して總ての商品の価値は——假令それらの交換価値が變化せず、而も社會の實際的富が減少するとしても——騰貴する。何故かならば、同一量の使用価値の生産に當つて、より多くの労働時間を費さねばならないからである。

第四の場合。A及びBの生産に要する労働時間が比率を異にして騰落するとする。即ちAの生産に要する労働時間が高騰したのにBの生産に要する時間が下落するか、若くは其反對の現象を呈したとする。雙方に要される労働時間には

騰落があるが、而も此何れの場合も、一商品の生産に要する労働時間が普遍である所の單純な場合に還元する事が出来るわけである。

各商品の交換価値は他種の商品の使用価値にて表はし得る。其使用価値の全部であるか、一部であるかは問ふ所でない。交換価値としての各種商品は、宛も商品中に體現せられる労働時間自身の分割せられ得ると同じ様に、分割する事の出来るものである。商品の等價性は使用価値の物理的可分性とは獨立してゐる。そは宛も諸商品の使用価値が新しき一商品に混化せられる時に當然生ずる現實の形態的變化が其商品の交換価値の總和と何等の關係なき事と同じである。

吾人はこれ迄、使用価値及び交換価値てふ二重の觀察點により、交互に商品を考察した。而して商品そのものは使用価値及交換価値の直接に結合した統一體である。即ち其結合は一商品が他の商品に對立する時に限りて直ちに生ずるものである。諸商品相互間の現實的關係はそれ等の商品の交換行程 (Austauschprozess) を形成する。其行程は互に獨立せる各個人によりて行はれる社會的行程であるが、其行程に参加する各個人は唯商品所有者に限られてゐる。商品所有者間の相



互的關係は彼等の所有する商品間の關係である。而も斯くしてのみ、彼等は實際上、交換行程の意識的支持者となりて現はれるのである。

商品は一の使用價值である。即ち小麦、リンネル、ダイヤモンド、機械等は各々使用價值である。然し乍ら同時に商品其ものとしては使用價值ではない。商品が商品所有者にとりて使用價值である時、即ち自分自身の欲望満足の直接資料である時、それは商品ではない。商品は寧ろ彼に取つて非使用價值 (Nicht-Gebrauchswert) であり、交換價值の實材的支持者 (Stofflicher Träger) であり、若くは單なる交換資料 (Tauschmittel) たるに過ぎないのである。使用價值は交換價值の能動的支持者となる時、交換資料となる。商品は其の所持者にとり交換價值よりも寧ろ猶ほ使用價值である。(十二) 故に商品は先づ使用價值とならねばならず、次いで他人に對して使用價值とならねばならぬ。商品は其所持者に對して使用價值たらざるに至り、他種の商品の所持者に對して使用價值となるのである。若し以上の事がないならば、其勞働は有用性なき勞働であつて、其勞働の結果は商品を生み出さない事となる。他面に於て、其商品は所持者自身に取つても使用價值とならなければな

らない。何となれば、彼の生存資料は其商品以外に、即ち彼に屬せざる商品の使用價值に求めねばならないから。商品が使用價值たらんが爲めには、其商品は欲望満足物として、一定の欲望を満足するものでなければならぬ。斯の如く商品の使用價值は商品が有ゆる方面に互りて其地位を轉換する事、即ち商品を交換資料として所有する或る手より、商品を使用價值の對象として要求する他の手へ轉換する事に依りて、始めて使用價值たるの實を現はす。商品の普遍的移動 (Einkaufsernung) に依りてのみ、商品中に包含せられた勞働は有用勞働となるのである。此商品の使用價值としての相互的交易關係に於て、商品は何等新らしき經濟形態を獲得するものでない。反つて商品としての特徴をなしてゐた經濟形態が消滅する。例へば、パンはパン屋の手から消費者の掌中に移動したとしても、パンとしての性質を變ずるものでない。反之、パンを使用價值即ち一定の食料品として重んずる者は消費者であつて、パン屋の掌中にあるパンは一の經濟關係の負擔者であり、先在的目的内含物であつたのである。斯の如くして、其商品が使用價值となる迄の内に受ける唯一の形態上の變化は、商品所有者に取つて非使用價值たる其形



態上の存在を失ひ、商品非所有者に取つて使用価値を生ぜしむるといふ事に存する。商品が使用価値たり得るには普遍的に移動させられねばならない。商品は須らく交換行程に入らねばならない。而してそれ等の商品は交換価値たる資格にて交換せられる。故に使用価値としての實を現はさんが爲めには、それ等商品は先づ交換価値として現はれておらねばならないのである。

(十二) アリストテレスが交換価値だと考へたものは此の意味のものである。本章「註一」引用文を見よ。

個々の商品は、使用価値の見地を以つてすれば、本来一種獨立せる事物として出現したものである。反之、商品は交換価値としては、何よりも先に他種の商品に對する關係として觀察されるのである。而も此關係は單に純理的、想像的のものである。彼等は交換行程に於てのみ出現する。一方、一の商品は一定の労働時間が該商品中に費されてゐる限りに於て交換価値である。従つて商品は、體現せられたる労働時間に外ならない。併し、一個の商品はそれ自身のみにては特種の内容を具へた個人的労働時間の體現に過ぎずして、普遍的労働時間の體現ではない。

従つて其商品は直に交換価値たるものでないのみならず、先づ交換価値に進化せねばならない。其商品が一定の有用な目的に用ひられた労働時間を、従つて一の使用価値を表はす限りに於てのみ、それは始めて普遍的労働時間の體現と云ひ得るのである。これは商品に包含せられた労働時間ばかりが普遍的社會的労働時間と見做され得る基礎的條件である。斯の如くして商品は先づ交換価値として表はれたる後に於てのみ、使用価値たり得るのであるが、他方に於て、其商品は使用価値として確實に移動し得る後に於てのみ、交換価値としての實を現はするのである。或る商品は特定の欲望を満足させる爲めに、該商品を一の使用価値として使用せんとする人間に對してのみ、移動し得るのである。他方に於て、其商品は他種の商品とのみ交換せられる。即ち例へば吾人を他種商品の所有者と置換へたとせよ、然らば其人は自己所有の商品が目的物となつて居る特殊の欲望に出會ひさへすれば之を讓渡する事が出来る。即ち是れを商品たらしめ得る。使用価値としての商品が普遍的に交換せらるゝに際して商品相互間の基礎となるものは、特殊の對象物としての物質的差異であつて、其特殊なる性質が各々異なる欲望を満



足せしめるのである。併し使用価値としての諸商品は、單なる使用価値としては何等相互に關係することなく寧ろ全然無關係なものである。使用価値としての之等の諸商品は特定の欲望と關聯してのみ、交換せられ得る。彼等は等價物としてのみ交換せられ得るし、且つ同量労働時間としてのみ等價物たり得るのであるから、使用価値としての自然的性質や、従つて特定の欲望を満足させる商品の關係に對する總ての考察が除去されるのである。反之、一商品は他種商品の所有者に取つて該商品が使用価値たると否とに拘はらず、一定量の他種商品と等價物として轉換せらるれば、交換価値として現れるのである。一の商品は他種商品の所有者に取つて、それが彼に對する使用価値たる限りに於てのみ、商品となる。而も其商品が他人に取りて商品たり得る限りに於てのみ、其商品の本來の所有者に取つて交換価値となる。同一の關係は、根本的に同一性質ではあるが量的にのみ異つて居るところの商品間の關係として表はれねばならぬ。換言すれば普遍的労働時間の體現たる等價として現れ、同時に質的に異なる諸物間の關係として表はれねばならぬ。簡單に言へばこれ等の諸商品は差別を有する具體的使用価値たるも

のである。併し、この等價と非等價とは交互に反撥し合ふのである。斯くして一問題の解決が他の問題の解決を含んで居るのであつて、こゝに不正確な循環が生ずるのみならず、矛盾した要求の結合も現れる。何故かなら一方の條件の充足は直接に其反對のもの、充足と結び付いて居るからである。

商品の交換行程は是等の矛盾の展開及び解決——尤も是等の矛盾は斯の如き簡單なる方法に於いて表はれるものではないが——でなければならぬ。吾人は唯商品自身が如何に使用価値として相互に關係するかを觀察したのみであつた。即ち商品が如何に交換行程内に於て使用価値として表はるゝかを觀察したのみであつた。反之、吾人が是れ迄考察してきた處に依れば、交換価値は吾人の頭腦中に形成せられた抽象物である。換言すれば、斯く云ひ得るとすれば、一つの商品を使用価値としては倉庫に貯藏し、交換価値としては其意識中に是を藏めてゐた個々の商品所有者の心中に形成せられた抽象物として表はれたのであつた。然し乍ら、交換行程に於ける商品自身は使用価値たるのみならず、相互に交換価値たらねばならぬのである。而も斯くの如き状態は商品自身の相互的關係となつ



て現はれねばならない。吾人が第一に逢著する困難は、商品が交換価値として、即ち労働の體現として表はれる爲には、先づ使用価値として其購買者に譲渡せられねばならないと云ふ事である。併し、他方に於て、使用価値として譲渡されると云ふ事は交換価値たる事を前提としてゐるのである。併し、吾人は此困難が既に解決せられたと假定して置く。商品が特殊の使用価値たるの性質を放擲し、交換せられた爲めに特殊の個人労働でなくなり、社會的有用労働たる實材的條件を満たしたと考へよう。然らば其場合、其商品は他種の商品に對し、交換価値、普遍的等價物、普遍的労働時間の體現として交換行程中に現はれねばならない。斯の如くして其商品は特殊の使用価値と云ふ制限的な役目を放擲し、總ての使用価値中に直接に其等價物として表はれる能力を獲得する。さすれば各種商品は特殊の使用価値たる性質を譲渡することに依つて、必然に普遍的労働時間の直接の體現たる商品となる。然し乍ら、他方、各商品は交換行程に於て、互に特殊なる商品として、又特殊なる使用価値に體現せられた個々の人の労働として對立する。普遍的労働時間そのものは元來、各種商品中に斯くの如きもの自身として存在しては居ないと

ころの一の抽象なのである。

さて吾人は商品の交換価値が具體的に表現せられて居る方程式の連續を驗べてみよう。例へば

一ヤードのウルクス  $\equiv$  二ポンドのリンネル

一ヤードのウルクス  $\equiv$  半ポンドの茶

一ヤードのウルクス  $\equiv$  三ポンドの糖

是等の方程式は普遍的社會的労働時間の同一量が一ヤードのリンネル、二ポンドの珈琲、半ポンドの茶等に體現せられたる事を表はしてゐるのである。然し實際に於ては是等特殊の使用価値中に表はれた個人労働は、是等の使用価値が自身自身の中に包含してゐる労働の繼續時間に比例して互に交換せられる時に於てのみ、普遍的労働となり、社會的労働となる。社會的労働時間は是等の商品に謂はば潜在してゐるのであつて、交換行程に於て始めて示顯して來るのである。吾人は社會的労働としての個人労働から論を進めず、交換行程に於て始めて其本來の特性を喪失し、普遍的社會労働として現はれてくるところの特殊なる個人労働



から研究を進めてみよう。普遍的社會労働は出来合の假定では無く、成長して行く歸結である。而して此處に吾人は新らしき困難に逢ふ。即ち商品は一面に於て普遍的労働時間の體現として交換行程に入らねばならぬと同時に、他面に於て普遍的労働時間としての個人労働時間の此體現が、それ自身交換行程の結果であると云ふことがそれである。

各種の商品は使用價值たるの性質即ち其本來の性質を讓渡する事と相應じて交換價值たる性質を獲得する。それ故に商品は交換行程に於ては二重の性質を具へねばならぬ。併し、唯商品のみが交換行程に於て互に對立するのであるから交換價值と云ふ第二の性質は唯、他種の商品の形態となつて表はれ得るのみである。直接に普遍労働時間の體現として現はれる者は如何なる商品であるか、換言すれば直接に普遍性を有する特種の商品中に體現せられた個人労働時間とは如何なるものであるか？ 一商品の交換價值の具體的表現即ち普遍的等價物としての各商品の交換價值の具體的表現は、無限に連續する方程式にて表はし得る。例へば

1 ヤードのリンネル = 2 ポンドの珈琲  
 1 ヤードのリンネル = 半ポンドの茶  
 1 ヤードのリンネル = 8 ポンドのパン  
 1 ヤードのリンネル = 6 ヤードの更紗  
 1 ヤードのリンネル = 其他の商品

以上の方程式は此等の商品が一定量の普遍的労働時間の體現として考へらるる限り、純理的性質を有する。然し乍ら、單なる抽象から普遍的等價物たり得る一商品の能力は、前掲方程式を單純に轉換する事に依り、交換行程の社會的結果となるに至る。即ち

2 ポンドの珈琲 = 1 ヤードのリンネル  
 半ポンドの茶 = 1 ヤードのリンネル  
 8 ポンドのパン = 1 ヤードのリンネル  
 6 ヤードの更紗 = 1 ヤードのリンネル

珈琲、茶、パン、更紗等、即ち總ての商品は、それ等商品中に包含せられた労働時間を



リンネルにて表章する。他方、リンネルの交換価値は其等價物たる總ての他種商品に表はれて居り、リンネル中に體現せられた労働時間は直接に普遍的労働時間——即ち總て不同量なる他種商品中に等しく表現せられた労働時間となる。斯くしてリンネルは自分自身が總ての他種商品より普遍的に働き掛けられる事に依つて普遍的等價物となる。交換価値としての各種商品は總て他種商品の價値の尺度として役立つたのであつた。然るに此處では總ての商品は其交換価値を一特定商品に依つて測定するのであるから、此排他的商品は交換価値の特殊なる表章となり、普遍的等價物となるに至る。同時に各種商品の交換価値が表章せられてゐる無限の方程式は二物より成る單一の方程式に約元せられる。即ち、 $xy = z$  何故かなら、此方程式に於て「ヤード」のリンネルは直接に總て他種商品の一定量に對する等價物として表はれてゐるからである。斯の如く交換行程内にては、總ての商品はリンネルなる形態にて相互に交換価値たり得るのである。總ての商品は交換価値として相互に關聯するのであつて、單に體現されたる普遍的労働時

間の量を異にせるものに過ぎないと云ふ命題は、今や總ての商品は交換価値としては同一商品即ちリンネルの不同量を表章するものに過ぎないと云ふ結果に約言せられ得る。斯くして普遍的労働時間は總て他種商品以外に、またはに伴つて存在する一物の商品として現れる。同時に一商品が他種商品の交換価値として表はれるに先く、 $x = y$  として譲渡せられる事に依つてのみ——使用価値はせられるに至る。使用価値として譲渡せられる事に依つてのみ——使用価値は交換行程に於て一定の欲望の對象たり得るか否かに依つて定まる——其商品は實際に珈琲としての存在を、リンネルとしての存在に變ずる事が出来、而も普遍的等價物の形態を備へ、現實に總て他種商品に對して交換価値となる事が出来るのである。逆に總ての商品が使用価値として譲渡せらるゝ事により、リンネルに變ぜられたのであるならば、其リンネルは總ての他の商品の轉換物となる。而して總ての商品をリンネルに變ずる結果としてのみ、リンネルは普遍的労働時間の直接的體現即ち普遍的に交換せられ且つ個人的労働の除去せられた生産物となるのである。斯くの如く諸商品が互に交換価値として表はれんが爲に二重性を有



する以上、普遍的等價物として選擇せられた特定商品も其使用價值を二重にする譯である。該商品は特定商品としての特定使用價值の外に、普遍的使用價值を有する。此普遍的使用價值は特殊の形態を構成する。それは該商品が交換行程に於て他種の商品から働きかけられる際に演ずる特殊なる役目から生ずるのである。各商品の使用價值は特定の欲望の對象物として、種々なる人にとつて其價值を異にする。例へば商品を讓渡せんとする人と是を獲得せんとする人とに於て、其價值は異つてゐる。併し普遍的等價物として選擇された商品は、交換行程から生ずる普遍的欲望の對象物となり、同一使用價值に對しては交換價值の負擔者となり、普遍的交換資料となる。斯の如くして、商品に固有の矛盾——即ち特定の使用價值たると共に普遍的使用價值ともなると云ふ商品固有の矛盾——が或る一個の商品に於いて解決せられる。總ての商品は概念上、特に選定せられた商品に對する連續方程式中に其交換價值を表現するのであるが、斯く選定された商品の使用價值は、現實的使用價值に轉換せられて單純の形態となり、交換行程中に現れるのである。本來商品は、一特定使用價值に體現せられた普遍的勞働時間として

の商品として表はれた。總ての商品は交換行程に於て、特に選定せられた商品即ち特定の使用價值中に普遍的勞働時間として體現した處の商品と關係を結ぶ。斯くして總ての商品は、特定の商品として普遍的商品たる一特定商品に關係を有することとなる。(十三)自己の勞働を普遍的社會勞働なりと見做す各商品所有者間の相互關係は、交換價值としての商品間の相互關係となる。而して交換價值としての商品間の相互關係は、交換行程に於て、彼等の交換價值を表現するものとして特に選擇せられた一特定商品に對し、彼等全部の間の關係となつて表はれる。更に前述の一特定商品の側から觀察すれば、上述の關係は總ての商品に特殊なる關係となつて現はれる。即ち特定の、自然發生的の、社會的の性質を帯びたものとなつて現れる。斯くの如くして全商品の交換價值を表現する爲めに特に採用せられた表章物、若くは特定の排他的商品としての全商品の交換價值たる物は貨幣である。貨幣は商品の交換價值の結晶であつて、交換行程中に自ら形成されるものである。斯くの如くして各商品は、交換行程に於て總て其特定形態を喪失し且つ直接の實材的形態を具へて相互に關係を結びつゝ、互に使用價值となるのである。



るが、それ等商品は相互に交換価値として現はれる爲めに、新しい形態、即ち貨幣形態にまで進まなければならぬ。貨幣は象徴物ではない。それは商品としての使用価値の存在が象徴物でないのと同じである。社会的生産関係が個人以外に存在する対象であり、各個人が社会生活上の生産行程に於て形成する一定の關係であり、特種なる事物の形態として表はれると云ふ事は、一の顛倒であつて、交換価値を創造する労働の總ての社会的形態を通じて其特徴となつてゐる平凡な具體的な混亂である。それは決して想像による顛倒ではない。此混亂は貨幣に於ては他の商品に於けるよりも特に著しく現はれると云ふに過ぎない。

(十三) 此云ひ方はジノヴェスキ(Genovesi)が用ひた。(第二版註参照)

總ての商品の貨幣性が結晶せられる一特定商品に必要な物理的性質は——に分割し得べき事、其分割部分が同種性を保存する事、該商品の各雛形が總て同質なる事である。其物は普遍的労働時間の體現として同質の體現物たるべく、單に數量上の差違を現はし得れば足る。又他の必要な性質は其使用価値の永存性

を有する事である。何となれば該商品は交換行程を通じて永續せねばならぬ物であるからである。貴金屬は此種の特質に於て卓越してゐる。貨幣は思索や論議の結果として生じたものでなく、交換行程に於て本能的に形成せられたものであるから、貨幣として多少不適當な種々の商品が貨幣の職分を行ふ事もある。交換行程が或程度迄發達するに及んで、各商品間に交換価値と使用価値の職分を兩極的に分割するの必要が生じてくる。即ち例へば一商品は交換資料として役立つ、他種商品は使用価値として讓渡せられる。かくて最も普遍的な使用価値を具する一商品若くは數種の商品が最初、偶然的に貨幣の任務を務める。それ等の商品は假令現存の直接的な欲望の充足物でないにせよ、富の最も重要な實材的部分として、他の使用価値よりも、より一層普遍的な性質を有するのである。

交換行程の自然發生的形態たる物々交換は、商品が貨幣に轉換する事よりも寧ろ使用価値を商品に轉換する起源たる事を示してゐる。然し交換価値は何等其れ自體の形態を有せずして、却つて猶ほ直接に使用価値と結合してゐる。これは二個の方法にて證明する事が出来る。生産自身は全組織に於いて使用価値の創



造を目的とし、交換価値の創造を目的としてゐない。而して使用価値が使用価値たるの實を喪失し、交換資料即ち商品となるのは、使用価値の供給が消費量を超過したる時のみである。同時に、使用価値は兩極的に分割されるに至つても、直接的使用価値たる範囲内に於てのみ商品となる。それ故に商品所有者達が交換する各商品は雙方に取つて使用価値でなければならぬ。即ち非所有者に取つても商品でなければならぬ。實際、商品の交換行程は原始社會の内部には行はれなかつた(十四)が、原始社會の崩壊した時若くは他の社會團體と接觸するに至つた僅少の地點や境界線に行はれるに至つたのである。物々交換が行はれるに至ると、それは原始社會の内部に對し反對作用をおこし、次いで原始社會そのものを瓦解せしむるに至る。従つて種々なる社會團體間にて最初に物々交換の商品となつた特定の使用価値、例へば奴隸、家畜、金屬等は殆んど總ての場合を通じて、それ等社會に於ける最初の貨幣となつた。吾人は既に何が故に或る商品の交換価値は其等の価値の連続が長ければ長い程、即ち其商品の交換範囲が大なれば大なる程、交換価値として一層完全となるかと云ふ理由を討究した。物々交換の徐々たる擴

張、交換の増加、交換せらるゝに至る商品の多様化等は、交換価値としての商品を展開せしめ、貨幣の形成を齎らし、直接的物々交換を破壊する効果を生み出したのである。經濟學者達は貨幣の起源を以て物々交換が其範圍を擴大した結果として生じた外部的困難に歸してゐるが、彼等は此困難が交換価値の發達から生じたものであり、普遍的勞働としての社會的勞働に相應するものなる事を忘れてゐる。例へば各商品は使用価値としては分割すべからざるものであるが、交換価値としては分割されねばならぬものである。或は、Aの所持してゐる商品はBにも使用価値たり得るが、Bの所持してゐる商品はAに取つては何等の使用価値たり得ない事もある。或は、商品の所有者達が相互に交換する商品は分割する事が不可能であつて、価値の比率を異にしてゐることもある。換言すれば、單純なる物々交換を解剖すると云ふ口實の下に、經濟學者は商品が使用価値及び交換価値の直接的統一體たることより生ずる矛盾の或る方面のみを説明しようとする。他方に於て、彼等經濟學者は物々交換なるものは、或る種の技術上の不便を伴ひはするが、商品の交換行程の自然的形態であると主張し、貨幣はその技術上の不便を除去する



ために狡猾に工夫せられた方便であると主張する。此全く皮相的な見解から推論して利巧な一英國經濟學者は貨幣は單に船や蒸汽船の如き物質的な道具に過ぎずして、社會的生產關係の表現では無く、從つて經濟的範疇に屬しないと主張するに至り、それ故に、實際上、工藝學と何等の共通點を有せざる經濟學に於て、此問題を論議するは誤謬であると主張したのである。(十五)

(十四) アリストテレスも原始社會の私的家族について同様の觀察をしてゐる。しかし家族の原始的形態は種族的家族であつて、其歴史的崩壞の跡に私的家族が展開したものである。『原始の社會の形態は家族であつた。而して此技術は此處には明白に何等の用がなかつた。』(政治學)

(十五) 『誠に、貨幣は賣買を運用するに際しての道具に過ぎない。(が併し、此賣買を諸君はなんと考へるか) 而も其れは船や蒸汽機關や、富の生産及び分配を容易ならしむる爲めに用ひらるゝ有ゆる道具やの問題と何等異ならざる問題であつて、經濟學の一部分をも構成しない。』ホッジスキンの「通俗經濟學」(Th. Hodgskin, Popular Political Economy) 倫敦、一八二七年刊、一七八—一七九頁。

商品界は著るしく發達せる分業 (Teilung der Arbeit) の存在を前提とする。此分業は使用價値の多様性中に直接に出現する。其使用價値は特殊なる商品とし

て互に對立し、且つ種々なる勞働方法を體現する。總ての特殊な生産的職業の總計たる分業は使用價値を創造する勞働として觀察せられる社會的勞働——これを實材的方面より觀察して——の全形態である。然し乍ら商品の側より、交換行程内部より之を觀察すれば、分業なるものは商品自身の特殊化につれて生じた結果たるものに外ならない。

商品の交換は一の行程である。即ち各個人が其特殊の生産物を交換すると共に一定の社會的生產關係の樹立せられる社會的代謝機能の行程である。商品相互の關係の進展するにつれ、其相互關係は普遍的等價物の種々なる形態に結晶せられる。かくして交換行程は同時に貨幣の構成行程となる。種々の行程の連續として現れる此全行程が流通 (Zirkulation) と呼ばれるのである。



## 商品の分析に關する學說史

使用價值、交換價值なる二重の態様に依る商品の解剖——即ち使用價值は具體的勞働若くは有目的生産活動に還元せられるべく、交換價值は勞働時間若くは同質なる社會的勞働に還元せられ得ると云ふ解剖——は古典經濟學派の一世紀半に亙る批評的研究の結果であつて、英國に於てはウイリアム・ペテイ (William Petey) 佛國に於てはボアギユベール (Boisguillebert) (1)を先驅者とし、英國に於てはリカード (Ricardo) 佛國に於てはシスモンヂ (Sismondi) を以て終りを告げたるものである。

(1) 十七世紀の後期及十八世紀の初期に於ける佛國及び英國の社會上の相違を論外に置き、ペテイ及びボアギユベールの著書及び特性を比較對照すれば、英國及び佛國の經濟學の間に存在する國民的相違の起源を明示する事が出来るであらう。同一の相違がリカード及びシスモンヂ兩人の間にも繰返されてゐる。

ペテイは勞働の創造力が自然から制限されると云ふ事について毫も惑はされる事無く、使用價值を勞働に還元した。彼は具體的勞働に關しては社會關係の全

體より推し、是を分業として論じた。(二)此物質的富の源泉に關する見解は同時代のホッブス (Hobbes) の如くに不充分なるものでは無く、經濟學が獨立の科學として區別せられるに至つた第一の形態、即ち彼の政治算術 (Politische Arithmetik) を生み出すに至らしめた。

(二) ペテイは後年アダム・スミスが示したよりも一層大規模に分業に固有の生産力を例示してゐた。「人類繁殖に關する論文」 (An essay concerning the multiplication of mankind) 三版一六八六年刊、三十五頁—三十六頁參照。彼は後年アダム・スミスが留針の例を以て示したる如く、時計製造の例を以て分業の利益を明示したのであるが、そののみならず彼は大製造工業の場所と云ふ見地から一都市、及び一國全體を考へてゐた。一七一一年十一月二十六日發行の「傍觀者」 (Spectator) は此「偉大なるサ、ウイリアム・ペテイの例證」に論及してゐる。従つて、マカロツクが「傍觀者」はペテイを四十歳も年少の學者と混同したと言つてゐるのは誤りである。マカロツク著「經濟學文獻分類目錄」 (Mac Culloch, The Literature of Political Economy) 倫敦、一八四五年刊、百五頁を見よ。ペテイは新科學の建設者なりとの自覺を持つてゐた。彼は自分の研究方法は傳統的なるものではないと述べて居る。彼は比較級、最上級の言葉を羅列したり、思辨的な議論を弄する代りに、數字や度量衡を以て論述し、唯、感覺論を用ひ、自然の中に明かな基礎を有する原因のみを考へ、特殊なる人の變り易き心理、意見、嗜好、感情等は是を無視すると述べてゐる。



〔政治算術〕 (Political Arithmetic) 倫敦、一六九九年刊、序文) 例へば彼の天才的な鋭さはアイルランド、スコットランドの高地の人民及動産をイングランドの殘餘の地方に輸送すべしと云ふ意見にも示されてゐる。それに依つて、多くの労働時間が省略せられ、労働生産力が増加し、「國王と臣民とは一層富み且つ強大になるであらう」(政治算術第四章二八五頁)。また「政治算術」の或章に於て英國の使命は世界市場の覇者たるにあると云ふ事を論じた。其當時は尙オランダは商業國として鼎の重きをなしフランスが之に次いで其覇を奪はんとしつゝある時であつた。英國臣民の王たるものは宜しく適當な便利な貯蓄を持ち全商業界の商業を角逐すべしとも論じた。(同書第十章三百十一頁) 英國が偉大になるための妨害物は從的のものに過ぎず、又除去し得べきものに過ぎない。(第五章二百九十八頁) 獨創的な諧謔が彼の著書に充溢してゐる。例へば、オランダは其當時英國經濟學者にとつて恰も今日の英國が大陸の學者にとつて模型であるが如くに模倣的な國であつたが、ペテイはオランダ人が世界市場の覇者たり得たのはオランダ人の屬性たる天使の如き頓智と判断力では無くして、一に物質的富に依るものだと言ふ事を指摘した。(二百五十八頁) 彼は商業の條件として信仰の自由を主張した。如何とならば、貧者は労働と勤勉とは神に對する義務であると云ふ信念を持ち、又富を持たざる人々こそ貧者の味方たるべき神に付て一層理智と理解とを有つと考へてゐる。従つて商業は宗教の如何なるに拘らざるものであるが、寧ろ異端者に適してゐるものである。(二百六十二頁—二百六十四頁) 併し、彼は勤勉な人

人から富を奪つて、唯食ひ、飲み、歌ひ、遊び、踊り、または形而上學に耽ると云ふ事以外に何事をもしない人々に富を移轉するような租税には反對した。ペテイの著書は本屋には殆んど見當らず、而も貧弱な古版で時時散見する位である。然し、ウィリアム、ペテイが英國經濟學の父たるのみならず、ヘンリー、ペテイ別稱ランズダウン侯の祖先たり、英國ホイグ黨の古老たることは一層不思議の感じを起させるのである。去りながら、ランズダウン家では彼の傳記を附けず、其全集の刊行を企てる事は出来なかつた。ホイグ黨の有力な家の起源については、「黙すれば黙するほど善し」と云ふ原則が當て嵌まる。ペテイは鋭い思索力を持つた男ではあつたが、如何にも野鄙なる一軍醫に過ぎなかつた。彼はクロムウエルの保護の下にアイルランドを掠奪せんとしたし、其掠奪に必要な男爵の稱號を獲んとてチャールズ二世に平身低頭したのであつて、斯くの如き祖先の畫像は公共展覽會の出品物にも適しない代物である。のみならず、ペテイは彼が生存中に出版した著書に於て、英國の繁榮はチャールズ二世の治下に於て其の最高頂に到達した——此説は「名譽革命」の傳統的破壊者に對しては異端の見解である——と云ふことを説明せんと企てゐる。

去り乍ら、彼は交換價值を商品の交換行程に於て表はれたるもの、即ち貨幣として定義する。而も貨幣を現存する商品即ち金及び銀として定義する。彼は貨幣制度と云ふ觀念に捕へられて、金及び銀を獲得する特殊の労働部門を以て、交換價



値を創造する労働なりと論じた。彼が真に思索したところのものは、社會の各人の労働は直接に使用價值を生産するものでは無く、商品を生産するのだと云ふ事に在つた。其商品たるや、使用價值ではあるが交換行程に於ける其移動によつて、金及び銀として、即ち貨幣として、即ち交換價值として、即ち普遍的労働の體現として表現され得るものである。併し、彼の例示は明かに次のことを示してゐる。即ち労働を物質的富の源泉と見做す事は決して特殊の社會上の形態——その形態の下にありては労働が交換價值の源泉となる——に對する誤解を除去するものではないと云ふ事を示してゐる。

更に、ポアギユベールは假令意識的ではないとするも、兎に角、商品の交換價值を労働時間に還元した。彼は各個人の労働時間が産業の各部門に分配せられる正當の比率を通じて眞の價值 (*la juste valeur*) を決定し、且つ自由競争を以て此等正當の比率を決定する社會的行程なりと定義するに至つた。然し同時に彼はペテイと異り貨幣——商品の交換の自然的平衡や調和をみだし、妄想的なモーロツク神の様に總ての自然界の富を犠牲とする——に對して熱狂的に闘つた。彼が貨

幣に加へた此攻撃は特定の歴史的事情に基いてゐる。ポアギユベールはルイ十四世の宮廷や租税徵集者や貴族等の盲目的な黄金慾を難じたのである。(三) 反之ペテイは黄金慾を以て産業的發展と世界市場の覇權とを争ふ國民に對し大なる刺激衝動を與ふるものとして賞揚した。此點が眞の英國經濟學と眞の佛國經濟學との間に斷へず隱顯する原理の深刻な背反である。(四) 誠に、ポアギユベールは唯、物質的富の實材的内容を、其使用價值を、其享樂を(五)のみ見、而も資本主義社會に於ける労働の形態を、商品としての使用價值の生産を、個人労働が其目的に到達する自然的社會形態としての商品の交換行程を觀察したのである。故に彼は貨幣の如き資本主義社會の富の特殊形態に反對し、其の中に外部的要素が篡奪的作用を存してゐるのを發見し、資本主義社會に於ける労働組織の形態を憤怒し、同時に他の形態に於ける労働組織をユートピア的に描いて、是を讚美したのである。(六) ポアギユベールは商品の交換價值中に體現せられ且つ時間によりて測定せられた労働と個人の直接の自然的活動とは混同するが、労働時間を以て商品の價值の尺度として取扱ひ得ると云ふ事を立證したのである。



(三)彼の時代の「奇術的財政」に反対してボアギユベールは「財政學は農業及び商業の利益を深く究明する學問に外ならない。」と云つてゐる。「フランス小論」(Le Detail de la France) 一六九七年。

(四)ラテン系經濟學といふ意味ではないが、ネーブルス及びミランの二學派に現れたイタリア人は、フランス經濟學者と英國經濟學者との間の本來の相違を明白に繰返して居る。初期のスペイン人はコスタリイズの様な一步進んだ重商主義者か或はアダムスミスと共に中庸を主張するヨヘルラノの様な人であつた。

(五)「眞の富……全享樂物は人生に必要なもののみでなく、官能の愉快な満足に貢獻する有らゆる餘剩物を含んでゐる。」ボアギユベール「富の性質に關する論」(Dissertation sur la nature de la richesse) 四〇三頁。ベティが野卑な掠奪好きの無性格な冒險者であつたに反し、ボアギユベールはルイ十四世の顧問であつたが、被壓迫階級に對し大膽な同情を持つてゐた。

(六)ブルードン型のフランス社會主義者は同一の世襲的の國民病に悩んでゐる。

最初に意識的に、且つ殆んど完全に近い程明瞭に、労働時間としての交換價値の本質を道破したのは、「新世界」の——そこにはブルジョアの生産關係が其代表者と共に流れ込み、未だ何等の歴史的傳統なく、無限の沃土の擴がつてゐる地方に發達して行つた——或る一人の人の仕事であつた。其人たるやベンジャミン・フ

ランクリン (Benjamin Franklin) であつて、彼は其青年時代の處女作にして一七二一年に出版した一著書中に於て、近代經濟學の根本的原理を敘述した。(七)

(七)スバークス (Spartak) 編輯「ベンジャミン・フランクリン全集」第二巻、ポストン、一八三六年刊、「紙幣の本質及び必要に關する考案」

彼は價値の尺度は貴金屬以外のものを考察することが肝要であると論じた。

其尺度は労働である。「銀の價値は、他の事物と同じく、労働に依て測定する事が出来る。例へば一人の人が穀物耕作に其労働を費し、他の人は銀の採掘精鍊に其労働を費すとすれば、其年の終り若くは一定の時期に於ける穀物及銀の全生産は相互の自然價格である。而して其生産が一方は二十ブツシエル、他方は二十オンスとすれば、其銀の一オンスは其穀物一ブツシエルの耕作に費した労働と同價値である。さて、一層近くに而も一層容易に採掘せられるか或はより多量の銀を包含する鑛山が発見せられ、以前二十オンスの銀を生産するに當つて費したと同じ労働で四十オンスも生産する事が出来たとすれば、而して他方、穀物耕作の方は依然として二十ブツシエルしか生産されないとすれば、二オンスの銀は一ブツシエル



の穀物を生産する労働と全く等しい価値しか持たない事となる。而して他の事情に變化なき以上、一ブツシエルの穀物は一オンスの銀と等しかつたのが今度は二オンスの銀と等しい事となる。斯くの如く一國の富は其國の住民が購買し得る労働量に依つて測定する事が出来る。(八)即ちフランクリンは一面の經濟的見地から価値の尺度としての労働時間を理解したのである。實際的生産物を交換価値に轉換する事は彼に取りては自明の事であつたが、唯問題は價值量の尺度を發見する場合に生じて来る。「商業は一般的に云へば労働と労働との交換に過ぎない、總ての物の価値は最も正確に労働に依つて測定する事が出来る」と彼は述べてゐる。(九)上述の「労働」なる語の代りに「仕事」なる語を置き換ふれば、種類の労働と他種類の労働との混亂が直ちに明瞭となる。商業が製靴労働、鑛山労働、紡績労働、畫家の労働、其他各種労働の交換に存する以上、靴の価値は畫家の労働によつて最もよく測られるではないか？ 而してフランクリンは靴、鑛物、絲、繪畫等の価値は抽象労働によつて決定せられるのであつて、何等特殊の質を有せず、唯量的にのみ測定せられ得ると云ふ事を云つてゐる。(十)然し乍ら、彼は交換価値

に包含せられた労働は抽象的普遍的のものであり、個人労働の生産物の普遍的讓渡の結果として社會的労働たる性質を獲得すると云ふ觀念を充分發展せしめなかつた結果、彼は必然的に此讓渡せられた労働の直接に體現せられた形態が貨幣だと云ふ事を了解し得なかつたのである。従つて彼にとつては交換価値を創造する労働と貨幣との間の密接なる關係を理解する事が出来ず、却て貨幣を以て單に技術的便宜の爲めに交換範圍中に外部から輸入せられた道具なりと考へるに至つた。(十一)フランクリンの交換価値に関する解剖は經濟學の一般趨勢には何等直接の影響を與へなかつた。何となれば、彼は特定の實際問題が生じた場合にのみ經濟學上の紛糾せる問題を研究したに過ぎなかつたからである。

(八)フランクリン、上掲書、二六五頁。「斯くの如くして一國の富は、其住民が賣ることを得る労働の量によりて測られる。」

(九)「全體的意義に於ける商業は、労働に對する労働の交換に外ならない。既に觀察した如く、あらゆる事物の価値は、労働によりて最も正しく測られる。」上掲書、二六七頁。

(十)「アメリカの紙幣に関する事實並に考察」(Remarks and facts relative to the American paper money) 一七六四年。



(十一)「アメリカ政治論」(Papers on American politics)「アメリカの紙幣に關する事實並に考察」參照一七六四年刊。

交換價値を創造する勞働と有用なる現實勞働との間の差別と云ふ事は「如何なる種類の現實勞働がブルジョアの富の源泉となるか？」と云ふ形式を以て十八世期の全ヨーロッパを騒がした問題である。斯くの如くして生じた假定は、使用價値に實現せられ或は一定の生産物を産出する總ての勞働は直接に富を創造するものではないと云ふ事であつた。然し乍ら、重農學派の人達にとつても、其反對者にとつても囂々たる論争問題となつたのは、如何なる種類の勞働が價値を創造するのであるか、また如何なる勞働が剩餘價値を創造する物であるかと云ふ事であつたのである。彼等は問題を單純なる根本形態にて解決する前に先づ複雑なる形態にて其問題を取扱つたのである。實に斯の如きは總ての科學の歴史的經路であつて、交叉錯綜せる十字路を以て其眞の出發點たらしめたのである。經濟學は他の建設者(學問)と異り空中に樓閣を建設したのみならず、基礎工事をなす前に數階の建築物を建てたのである。吾人は此處に此以上、重農學派の人達

に付て詳述する事や、數人の伊太利の經濟學者達——此等の學者達は商品の本質に付て殆んど正當に近い解剖を施した鋭い思想の所有者であつた(十二)——を論ずる事を罷めて直ちにブルジョアの經濟學の一般的組織を作り上げた第一のブリットン人サージェームス、スチュアート(Sir James Steuart)を論じてみよう。(十三) 經濟學の總ての抽象的範疇は、彼れスチュアートに於て、其實材的内容より分離せんとする途上に在つたが、未だ曖昧模糊たるを免れなかつた。交換價値に關する思想についても同様であつた。或場所に於ては、彼は勞働時間(勞働者が一日に行ひ得る勞働時間)を以て眞の價値を決定したが、是と共に彼は勞銀及び原料品の二要素をも考察に入れ、思想の混亂を誘致したのであつた。(十四) 實材的内容との衝突は他の個所に於て一層著るしく展開せられた。彼は商品に包含せられた自然物質、例へば銀皿に於ける銀を以て其「本來の價値」と云ひ、商品に包含せられた勞働時間を「使用價値」と呼んだ。彼は云ふ「前者の價値は物夫れ自體に於て眞實のものであるが……後者の價値はそれを生産するに要したる勞働に準じて測定せられねばならない。材料の變化の爲めに用ひられた勞働は人間の時間



の一部を代表する』と。(十五)

(十二) クストチ編纂「イタリヤ古典經濟學論集」近世の部、第三卷、ガリアニ「貨幣論」ミラノ、一八〇三年出版参照。「單なる努力さへも或る物に價值を生ぜしむる事が出來る。」(上掲書七十五頁)。「努力」、緊張活動の如き名辭を以て労働を定義することは南方學者の特徴である。

(十三) スチュアート著「經濟學原理の研究、自由國民の内國政策の科學に關する論文」(Stewart, An Inquiry into the principles of political economy, being an essay on the science of domestic policy in free nations.)は一七六七年クオート版二冊を以て倫敦に第一版を刊行した。アダム、スミスの「富國論」に先立つこと十年である。予は一七七〇年刊行のダブリン版を引證した。

(十四) 第一卷百八十一頁—百八十三頁。

(十五) 第一卷三百六十一頁—三百六十二頁「二人の時間の一部の代表に付いて」

スチュアートが彼の先輩及び後輩と區別せられる所以のものは、交換價值を代表する社會的労働と使用價值を生産する具體的労働との差違を尖鋭に明白ならしめたことに在る。彼は其讓渡によつて普遍的等價物を創造する労働を、産業と呼ぶといつてゐる。彼れは産業としての労働を單に具體的労働より區別したの

みならず、労働の他の社會的形態よりも區別した。即ち彼は資本主義社會に於ける労働形態と古代及中世の労働形態との區別をしてゐた。彼は特に資本主義社會の労働を封建的社會の労働——彼は此労働の亡びつゝある有様をスコットランド及大陸諸國の旅行に於て目撃した——との間の相違を興味深く觀察した。スチュアートは勿論資本主義以前の時代に於て生産物が商品の形態をとり、商品が貨幣の形態をとつた事を知つてゐた。が併し彼は商品が富の成素的根本形態となり且つ商品の讓渡が富の獲得の主要形態となつたのは資本主義的生産時代に於てのみであり、其結果として交換價值を創造する労働の性質は特に資本主義的であると云ふ事を明細に論結したのである。(十六)

(十六) 故に彼は云ふ。土地所有者が使用價值の直接的生産を目的とする家長的農業形態はスパルタ、ローマ、アテネ等においてはなく、十八世紀の産業國に於ても見られた「誤用」である。此誤用的農業は「商業」ではなくて、單純なる生活手段である。宛も資本主義的農業が其國の餘剩的人口に大清潔法を施す如く、資本主義的工業は其工場から餘剩的労働者を追出して仕舞ふのである。

其の後、具體的労働の種々なる形態例へば農業、工業、航運、商業等のごときものは



各々富の源泉なりと主張せられた。然るに後に至りアダム・スミス (Adam Smith) は労働一般特に分業と云ふ労働の社会的総合形態が唯一の物質的富の源泉即ち使用価値の唯一の源泉なりと主張した。彼は労働の自然的要素を全く無視した。従つて彼は社会的富の限界内に於てのみ、即ち交換価値の限界内に於てのみ、労働を考察したのである。誠にアダム・スミスは商品の価値を其商品中に含まれた労働時間にて決定したのであつたが、この価値決定の原則の實際的適用は彼以前の時代に逆戻りしたのである。換言すれば、單一商品てふ見地から彼に眞實なりと思はれたものは、其商品の代りに資本、貸銀労働、地代其他の一層高級且つ複雑の形態の現れるに及んで、忽ち其明瞭性を失ふに至つた。此事實は彼が次の如き事を言つた事に徴して明かである。即ち商品の価値が労働時間に依つて測定せられるのは、人々が互に資本家、貸銀労働者、地主、借地人、高利貸等としてではなく、單に商品生産者及商品交換者としてのみ對立するところのブルジョア社會の失樂園に於てのみ見られる現象であると言つた事に依つて明かである。彼は常に商品中に包含せられた労働時間に依つて商品の価値が決定せられる事と、労働の価値

に依つて其商品の価値が決定せられる事とを混同してゐた。彼は微細の點を論ずるに當つて、至る處、混亂に陥り、社会的行程が異種の労働に對し強制的に客觀的平等性を具有せしむる事實を看過し、是を個人労働の主觀的平等性と誤解してゐた。(十七) 彼は分業によりて、具體的労働から交換価値を創造する労働への過程、即ち資本主義社會に於ける労働の根本形態を論破しようとした。個々の交換が分業を前提とすると説くのは正しいが、同様に分業が個々の交換を前提とすると説くのは如何にも誤謬である。例へば、ペルー人の間には大規模な分業が行はれてゐたが、個々の交換生産物を商品として交換する事は如何なる意味に於ても發生しなかつたのである。

(十七) 例へばアダム・スミスは次の如く言つてゐる。「總ての時と所とを通じ、同一量の労働は労働者にとつては同一の価値を持つものである。健康、力、精神の正常な状態の下に於て、熟練と器用との正常な状態の下に於て、人々は同量の安樂、自由、幸福を常に與へられねばならない。彼が支拂ふ価格は、其の報酬として受取る財が如何程なりとも、常に同一でなければならぬ。是等の価格は時としては、より多量の時としては、より少量を購買するであらうが、變化するものは財の価値であつて、是れを購買する労働の價



値ではない。労働のみは決して夫れ自身の価値を變化しない。かくて労働は商品の眞の価値である。」

ダヴィッド、リカード (David Ricardo) はアダム、スミスと異り非常に明瞭に労働時間によつて商品の価値が決定せられる事を明かにし、且つ此法則が一见、最も此法則と矛盾するが如く見ゆる資本主義生産関係を支配するものなるを示した。リカードは其研究を全然、価値量の問題に限定したが、少くとも彼は是と關聯して此の法則の實現されるのは一定の歴史的條件に因ると云ふ事實を意識してゐた。即ち彼は云つてゐる。「労働時間にて価値量を決定し得るものは、産業によりて隨意に其量を増加する事が出来、而も其商品の生産に當つて競争が無制限に行はれる商品に對してのみ當嵌まるのである」と。(十八) 即ち實際上、価値の法則が充分に作用してゐるのは、産業上の生産が大規模に行はれ且つ自由競争の行はれてゐる社會、即ち近代資本主義的社會についてのみである。リカードは他の點に於ても資本主義社會に於ける労働の形態を以て、社會的労働の永久的自然形態として觀察してゐた。彼は原始的漁夫と原始的獵師とを商品の所有者と見做し、其魚と

獵物とを——其交換価値に體現せられた労働時間量に應じ——交換せしめた。此場合、彼は原始的漁夫と原始的獵師とが其労働器具を計算するに當り一八一七年に倫敦取引所に普通使用せられた年利表を採用すると云ふ程の時代錯誤に陥つた。「オーエン君の平行四邊形」はリカードがブルジョア型社會以外に知つてゐる唯一の社會形態であつたと思はれる。併し、リカードは假令ブルジョア社會の水平線に捕へられてゐたとは言へブローハム卿が「リカード氏は宛も他の遊星から落ちて來た人の様に思はれる」と評した程の尖鋭な理論的洞察力を以てブルジョア社會の經濟を、——其表面に現れてゐるものよりも寧ろ其内部に於て全く異つてゐるとして眼に映る——解剖した。シスモンヂはリカードと直接に論戰を交ふるに當つて、交換価値を創造する労働の特殊の社會的性質を力説すると共に(十九)全社會の欲望と此欲望を満足せしむるに充分なる労働量との間の關係に對し、価値の大きさを労働時間に還元する事は「現代の經濟的進歩の特質」なりと論じてゐる。(二十) シスモンヂは交換価値を創造する労働は貨幣の爲めに不純となると云ふボアギユベールの思想によりて毫も影響されなかつた。しかし



ポアギユベールが貨幣を批難したる如く、シスモンチは大産業資本を批難したのであつた。リカードは向ふ見ずに最後の斷案を下して經濟學を最高頂に到達せしめたのであるが、シスモンチは經濟學自體に對する疑點を明かにしつゝ、リカードの結論を補足したのであつた。

(十八) リカード 「經濟及租稅原論」(David Ricardo, On the principles of political economy and taxation) 第三版、倫敦、一八二一年刊、三頁。

(十九) シスモンチ 「經濟研究」(Simondi, Etudes sur l'Economie politique.) ノルツセル、一八三七

年。

(二十) シスモンチ上掲書百六十三頁—百六十六頁。  
リカードが古典經濟學の完成者として、交換價值が労働時間によりて決定せられることを最も明瞭に敍して以來、經濟學者間に起つた總ての論戰は自然にリカードの周圍に集中するに至つた。其大部のたわいもなきもの(二十一)を除けば、其駁論は次の諸點に要約する事が出来る。

(二十一) ロンスタンシオ(Constance)がリカードの佛譯をなした際にジェー、ビー、サー(J.B. Say)の加へた註譯は最も馬鹿氣たものである。而してマックレオド氏の近著「交換論」(Mine Leod, Theory of Exchange.) (倫敦一八五八年刊)には最も街學的な傲慢がある。

第一、労働其ものは交換價值を有し、従つて種々の労働は種々の交換價值を有する。交換價值を以て交換價值の尺度たらしめる事は誤謬に充ちた循環論法である。何となれば、測定される交換價值自身が同時に測定尺度其ものであるからである。——此論駁は交換價值の本質的尺度として存する労働時間が是れに基いて労働賃銀を展開すると云ふ問題によりて解決される。賃銀労働に關する理論が其答辨を與へる。

第二、生産物の交換價值が其中に含まされた労働時間と同一ならば、労働時間の交換價值は其生産物と等しいものである。換言すれば、労働賃銀は労働の生産物と等しいものでなければならぬ。(二十二)——併し實際の場合は頗る是と異つてゐる故に、此駁論は次の問題に要言する事が出来る。即ち労働時間に依つてのみ交換價值の決定をなすと云ふ場合の生産は、如何にして労働の交換價值が其生産物の交換價值より小なりと云ふ結果を導き出すのであるか？ 此問題は資本の研究をなせば明かになる。

(二十二) プルジョアの經濟學者がリカードに對してなした此駁論は其後社會主義によ



りて採用せられた。彼等はリカードの理論の正當なることを前提とし、其理論との矛盾を實際状態に解決し、其原則から生ずる結論を實際に實現せんとブルジョア社會に求めた。それが少くとも英國社會主義が其經濟學に反對せるにも拘らずリカードの交換價值法則に傾倒したる方法であつた。舊社會の根本原則を新社會の原則として主張するのみならず、自己を以てリカードが古典派英國經濟學者の多年の研究を綜合した此法則の發見者なりと斷言すること、ブルードン氏に残された仕事であつた。リカードの法則のユートピア的解説が既に英國に於ては殆んど忘却せられてゐた時、ブルードン氏は是を佛國にて「發見」したのである。拙著「哲學の貧困」パリ一八四七年刊、參照。

第三、商品の市場價格は需要供給の變動する關係によつて其交換價值以上に騰貴し或は以下に下落する。従つて、商品の交換價值は需要供給の關係によつて決定せられ、商品中に包含せられた勞働時間に依つて決定せられるものでない。——實際此不思議な結論は市場價格が交換價值に基きながら、其交換價值と異なる市場價格が如何にして生ずるか、と云ふ問題を提供するに過ぎない。もつと精確に言ふならば、交換價值の法則は如何にして其反對の現象をとりてのみ現れるかと云ふ問題に過ぎない。此問題の解決は競争論にて決せられる。

第四、最後の、そして最も強烈らしく見える反對論は、若しも交換價值が唯商品に包含せられた勞働時間に外ならないとすれば、勞働を包含せざる商品は如何にして交換價值を所有し得るか、換言すれば、單純なる自然力の交換價值は何處より來るか、と云ふ問題である。此問題は地代論に於て解決される。



## 第二章 貨幣、即ち單純流通

一八四四年及一八四五年のサー・ロバート・ピール銀行條令に關し、議會で討論があつたとき、グラッドストーンは戀愛ですらも貨幣の本質を穿鑿する時ほど、多くの人を愚かにするものでないと演説した。彼はブリトン人に對して「ブリトン人のことを述べたのである。反之昔からオランダ人は貨幣に對する「天才的機智」を有して居り、ペティが是れを疑つたに拘らず、其の機智を決して失はなかつた。

貨幣の分解に纏はる主要の困難は、貨幣が商品自身に起源する事を了解すれば直に征服されて仕舞ふ。此點が一度了解せらるれば、跡には貨幣獨得の形態を明かにする仕事が残る許りであるが、此事は或る程度迄、金銀で鍍金された總てのブルジョアの關係が貨幣關係となりて現出し、同時に貨幣の形態は貨幣自身と何等共通點のない無限多様の形態を有つに至る事實の爲めに、頗る難事となる。

以下の研究には商品の交換から直接に生ずる貨幣形態のみを論じ、信用貨幣の

如き生産行程の高度の階段に屬する形態を論じないこととする。簡明の便の爲め、本書を通じて金を以つて貨幣商品と前提する。

## (一) 價値の尺度

流通の第一行程は實際の流通に對する理論的準備の行程であると言ふ事が出来る。使用價値として存在する諸商品は、先づ觀念上に互に交換價値として、一定量の普遍的勞働時間の體現物として表はれるところの形態を獲得する。吾人の既に觀察したる如く、此行程に於いて第一に必要な手段は、諸商品が例へば金の如きものをして、普遍的勞働時間の直接的體現物即ち普遍的等價物として排他力を有せしめる事である。今、諸商品が金を貨幣に變ずる形態を考察してみよう。

- 1 噸の鐵 = 2 オンスの金
- 1 クオターの小麦 = 1 オンスの金
- 1 ハンドレツト・ウエイトのモツカ珈琲 =  $\frac{1}{4}$  オンスの金
- 1 ハンドレツト・ウエイトの炭酸加里 =  $\frac{1}{2}$  オンスの金
- 1 噸のプラジル木材 =  $1\frac{1}{2}$  オンスの金



## Y商品=X商品の金

上記の方程式に於て、鐵、小麥、珈琲、炭酸加里等は互に同種労働の體現物、即ち金に體現せられた労働——種々の使用價值中に代表せられてゐる具體労働の總ての特殊性が完全に除去せられた労働——として表はれて居る。彼等は價值としてすべて同一である。彼等は同一労働の體現物或は労働の同一體現物、即ち金である。彼等は同一労働の普遍的體現物として單に量的差違を有するに止る。即ち種々價值量を異にして表はれる。何となれば、彼等使用價值中に包含せられた労働時間量が各異つてゐるからである。此等各商品の相互的關係は、普遍的労働時間の體現としての相互的關係である。何となれば、彼等各商品は一の排他的商品金、即ち普遍的労働時間に對し關係を有するからである。此關係が發展すれば各種商品は互に交換價值となつて表はれ、金に包含せられた労働時間は普遍的労働時間となつて表はれる。而も一定量の労働時間は鐵、小麥、珈琲等の種々なる量約言すれば總ての商品の使用價值にて表はされ、直接に商品等價物の無限の連續となりて表はれるのである。而して、總ての商品は其交換價值を金にて表はし、金は

其交換價值を直接に總ての商品にて表はす。各商品自身は相互には交換價值の形態をとり、金に對して普遍的等價物、即ち貨幣の形態を帶ぶるに至る。

金は價值の尺度となる。如何とならば、總ての商品は一定量の金及び一定量の商品が労働時間の同一量を包含する關係に基き、其交換價值を金にて測るからである。金が普遍的等價物、即ち貨幣たり得るのは、金が價值の尺度と云ふ職分を有するからのみであつて、價值の尺度たる金自身の價值は商品等價物の全範圍を通じて直接に測り得るのである。他方、すべての商品の交換價值は金にて表章せられる。此表章に於ては、質的要素は量的要素と區別せられる。商品の交換價值は同一種の労働時間の體現物として存在する。諸商品が金と等視せられる關係があるから、諸商品は相互に等視せられ得る。従つて其價值の大きさは徹底的に表象せられるのである。一方に於て、諸商品に包含せられた労働時間の普遍的性質が表示せられ、他方に於て、其時間量は金等價物にて表章せられる。斯くの如く、普遍的等價として、同時に或特定商品に對する此普遍的等價の數字的比率として表現せられる諸商品の交換價值、換言すれば或る特定商品と等視せられる商品の方



程式中に現れる諸商品の交換価値が價格である。價格は諸商品の交換価値が流  
通行程内に現れた、一の轉換せられた形態に外ならない。

諸商品が其價值を金價格として表現すると同一の行程によつて彼等は金を價  
値の尺度即ち貨幣に轉換する。若しも總ての商品が其價值を銀、小麥、銅にて測る  
のであつたならば、即ち總ての商品が銀價格、小麥價格、銅價格の形態で表章せられ  
るのであつたならば、銀、小麥、銅は價值の尺度となり、其結果、普遍的等價物となるで  
あらう。諸商品は流通上、價格として表はれんが爲めには、流通に入る前に先づ交  
換価値でなければならぬ。總ての商品は其交換価値を金にて測定するが故に  
のみ、金は價值の尺度となる。併し、此關係の進化の普遍性は——金が價值の尺度  
たる性質を帶ぶるのは此關係のみに依る——各單一商品が該商品及び金の中に  
包含せられた労働時間に比例して金にて測定せられると云ふ事、商品及び金の眞  
の尺度は労働自身であると云ふ事、換言すれば商品及び金は直接の物々交換に於  
て相互に等しき交換価値であると云ふ事を前提とする。此同一化が實際上如何  
にして生ずるかといふ問題は、單純流通を取扱ふ範圍内では論じ得ない。去り乍

ら、金及び銀の生産國に於ては、一定量の労働時間は直接に金及び銀の一定量に體  
現せられるが、其何れをも生産せざる國に於ては、まはり、遠き方法にて同一結果を  
得る事が出来る。即ち同國の商品、換言すれば同國の平均國民労働の一定量を直  
接若くは間接に、鑛山所有國の金及び銀に體現せられた労働時間の一定量と交換  
することに依つて可能となる。價值の尺度として役立たんが爲めに、金は出来る  
だけ、可變的價值 (ein veränderlicher Wert) でなければならぬ。何となれば、金は勞  
働時間の體現物としてのみ他の商品の等價物となる事が出来、而も其労働時間は  
具體的労働の生産力の變化に應じて不同量の使用価値に實現せられるからであ  
る。總ての商品の價值を金にて測ると云ふ事は、金が特定の場合に於て労働時間  
の特定の量を表現すると云ふ事を前提とする。それは各種商品の交換価値が他  
の或商品の使用価値にて表はされると云ふと同じである。金の價值の變動に對  
しては、曩に述べた交換価値の法則は此場合にも當てはまる。若し諸商品の交換  
価値が變動しないとすれば、其金價格の一般的騰貴は、金の交換価値の下落の場合  
に於てのみ起り得る。また若し金の交換価値が變動しないならば、金價格の一般



的騰貴は總ての商品の交換價值が騰貴したる時のみ可能である。商品價格が一般的に下落した場合には反對の現象が起つてくる。一オンスの金の價值が其生産に費された労働時間の變化に依つて騰落するならば總ての商品の價值は其騰落の率と等しく騰落する。斯くの如く、一オンスの金は常に總ての商品に對して一定量の労働時間を代表してゐるのである。かくて今や總ての商品の交換價值は金のより多量か若くはより少量かにて測られるに至つたのであるが、其交換價值は其價值の大きさに比例して測られ、従つて相互に同一の價值率を保持することが出来るのである。20+10の比率は1+2+4或は4+8+16にて表はされても同一である。金の量の變化は——諸々の交換價值は金價值の變化によりて測定せられる——價值の尺度としての金の職分を何等掣肘するものではない。銀の價值より金の價值が十五倍もあつたとしても金の職分には何等變りはないのである。労働時間は金と商品との間の尺度であり、而も金は總ての商品が金にて測定せられる限りに於てのみ價值の尺度となるものであるから、貨幣が恰も諸々の商品を通約するか、の如く見えるのは、流通行程に於ける單なる外容に過ぎないのである。

ある。(一)金を貨幣たらしめるものは、寧ろ労働時間の體現物たる諸商品の通約性に外ならないのである。

(二)アリストテレスは實際諸商品の交換價值は其商品價格を前提とするものだと云ふ觀察をした。「交換が貨幣以前に存在してゐたことは明である。何となれば、諸君が一軒の家に五個の寢床を用意して置くことと、五個の寢床と同じだけの貨幣を保存して置くことは區別をなす事は出来ない。」然るに他方に於て、アリストテレスは諸商品は價格に於て初めて互に交換價值の形態を獲得するのであるから、諸商品は貨幣に依つて通約せられるのだと考へたのである。「故に、總てのものは評價する事が出来る。斯くして常に交換は生じ、社會は此交換あるが爲めに存在し得る。金貨は恰も尺度の如く總ての事柄を通約し、平等化する。何となれば交換なくして社會はなく、平等化なくして交換なく、通約なくして平等化は存しないからである。」彼は貨幣に依つて測られる種々の事物が全然通約すべからざる量のものであることを隠さなかつた。彼の研究したものは交換價值としての諸商品の共通の單位であつたが、斯くの如きは古代ギリシヤ人たる彼の見出し得ないものであつた。彼は實際的目的に對して必要な限り、それ自身通約すべからざるものをも貨幣に依つて通約せんと試み、是によりて困難から脱却した。「誠にかくも異なる事物を通約する事は不可能のことであるが、實際の目的に對しては許容せられるべきである」

諸商品が交換行程に入る具體的形態は其使用價值としての形態である。彼等



は其移動に依つて先づ現實の普遍的等價物とならねばならぬ。それ等商品の價格の決定は唯これを觀念的に普遍的等價物に轉換すること、即ち猶ほ未だ現實に貨幣化してゐない金との方程式を作る事にある。然し乍ら、商品は其價格について、單に觀念的に金に、若くは假想上の金に轉換したるに過ぎないのであつて、且つ其貨幣形態は未だ現實的に其具體的存在と分離しないのであるから、金も亦觀念的にのみ貨幣に轉換せられ得べく、價値の尺度となる事が出来る。而して金の一定量は實際に於て一定量の労働時間に對する名目としてのみ働く。金が貨幣に結晶せられる形態は、常に諸商品が相互に自己獨得の交換價値を表章するところの一定方法の上に頼るのである。

今や諸商品は二重の存在として對立する。即ち、現實的には使用價値として、觀念上には交換價値として對立する。諸商品は、今や相互に該商品中に包含せられる労働の二重形態を表章する。即ち使用價値としての特種なる具體的労働は、現實的に表はれ、普遍的抽象的なる労働時間は其價格中に一個の觀念的存在——同一價値實體の同種にして、唯量を異にせる體現物——として表章せられる。

交換價値と價格との相違は、一方に於て、アダム・スミスが云ひし如く、唯、名義上のものとしてのみ現れるのであつて、即ち労働は眞の價格 (Realpreis) であり、貨幣は商品の名義價格 (Nominalpreis) である。一クオターの小麦は三十日の労働にて測られる代りに、若し一オンスの金が三十日間の労働の生産物であるならば、それは一オンスの金にて測られる。さり乍ら、此差違は單に名義上の差違に止る。他方に現實の流通行程に於ては、商品を脅威する有らゆる擾亂が此名義上の差違に向つて集中してゐる。三十日の労働は一クオターの小麦中に包含せられてゐる。従つて労働時間を以て言ひ表はされる必要はない譯である。然るに金は小麦と全然異つた商品であつて、一クオターの小麦が、其價格について豫想された通りの一オンスの金に眞に變ぜられるか否かを流通に於てのみ確定するのである。それは結局、小麦が使用價値なりや否やの問題、小麦中に包含せられた労働時間量が一クオターの小麦の生産に對して社會が必然的に費した労働時間量なりや否やの問題となる。商品は商品としては交換價値であり、同時に價格を有して居る。交換價値と價格との此相違に於て次のことが現れる。即ち商品に包含せられた



特種の個々の労働が其讓渡行程によつて始めて其反對、即ち個性を没した、抽象的な、普遍的な、只此形態のみに於てする社會的労働——即ち貨幣として表章せられねばならなくなるのである。さり乍ら、彼等が斯く表章せられたるか否かといふことは偶然的事項たる觀がある。従つて、商品の交換價值は單に觀念上、價格に於て異種の存在を獲得し、商品中に包含せられた労働の二重性は單に各々異なる表現形態としてのみ存在するのであるけれども、また他方に其結果として普遍的労働時間の體現物たる金は想像上の價值尺度としてのみ現實の商品と對立するのであるけれども、而も交換價值が價格として存在する事實、若くは金が價值の尺度として存在する事實は、硬貨金に對する商品の讓渡必然性及び其非讓渡の可能性を包含する。約言すれば、生産物が商品となると云ふこと、即ち一個人の特種労働が社會的效果を發揮せんが爲めには其直接の反對たる抽象的普遍労働として表現されねばならぬといふ事から發生する全矛盾が此點に潜んでゐる。私的交換を基礎とする生産上に於て、この生産に必要な條件を無視しつゝ、而も貨幣を欲せずして商品を欲する空想家がある。彼等は彼等が貨幣を明確の形態にて承認

せずして、價值の尺度としての模糊たる形態にて「消滅」せしめんとする。此時にのみ、彼等の理論上の矛盾がない事となる。硬貨は見へざる價值の尺度の中に影を潜めて存在する。

金が價值の尺度となり、交換價值が價格となる過程が一度び假定せられんか、總ての商品は其價格に於て、種々量を異にせる假想上の金量を表章する。總ての商品は、同一物即ち金の種々なる量として、互に等しくせられ、比較せられ、測定せられる。かくてそれ等の商品を、尺度單位 (Maßeinheit) としての一定量の金に關聯せしむべき技術上の必要が起る。この尺度單位たるや、やがて標準的尺度に發達し行くべきものであり、それ自身の可分性によりて隨意に割り切れるものであり、又其分割された部分は更に隨意の量に割り切れるものであることを要する。(二)

(二) 英國に於て一オンスの金が標準貨幣の單位として使用されたに拘らず、割り切れる部分數に分割せられなかつたといふ、奇妙な事情は、次の如く説明せられて居る。「本邦の貨幣制度は其初め専ら銀の使用にのみ適合せしめられたものであつた。——隨つて一オンスの銀は常に是れを一定の適當なる鑄貨數に分つことが出來た。然るに金は後に至り、其初め専ら銀に適合せしめられた幣制内に持ち込まれたのであるから



一 オンスの金は之れを一定の適當なる個數に鑄造する事が出来ぬのである。』マッタ  
ーレン著「通貨史」(Maclean, History of the Currency) 十六頁倫敦一八五三年刊。

然し、金量自身は重量に依つて測定せられる。斯くして、尺度の標準は既に金屬の重量の一般尺度中に見出されてゐる。故に總ての金屬流通の存してゐる場合に於て、金屬の重量の尺度は本來價格の標準として用ひられてゐる。諸商品が最早勞働時間によつて測定せられる交換價值として互に關係せず、金にて測定せられた同種類の大きさとして相互に關係する以上、金は價值の尺度から價格の標準に變化する。斯くして不同量の金たる諸々の價格の比較は金の一定量を記録し且つ其割り切れる部分の標準となるところの數字に結晶せられる。價值の尺度たる金と、價格の標準たる金とは全く異なる表現形態を有する。而して此二者の交換作用が不條理極まる理論を生み出すに至つたのである。金は勞働時間の體現物として價值の尺度であり、一定の金屬量として價格の標準である。金は自ら交換價值として、交換價值たる商品に對するとき價值の尺度となる。一定量の金は他の諸々の金の量に對する單位として働くとき、價格の標準となる。金は其價值

が變じ得べきものたるが故に價值の尺度となり、同時に不變の重量單位として固定せられるものなるが故に價格の標準となる。此場合に於ても、同一事物の量を測定する總ての場合に於ける如く、測定單位の不動性及び固定性を確立する事は實に重要な事である。或る金量が尺度の單位となり、且つ其割り切れる部分が該單位の小部分として固定せられねばならぬ必要は、自然的に價值の變動する一定量の金が諸々の商品の交換價值に對し不動の價值比率を有すると云ふが如き觀念を生ずる。此觀念は金が價格の標準となる以前に、商品の交換價值が價格に即ち一定量の金に變ぜられると云ふ事を忘却してゐるのである。金價值が如何に變じたにせよ、種々なる金量は常に相互に同一の價值比率を表はしてゐる。金價值が千パーセント下落したとしても、十二オンスの金は前の如く尙一オンスの金の十二倍の價值を有するのであらう。而して、價格に付ては、種々なる金量の間比率のみが問題となる。他方一オンスの金は其價值の騰落と共に何等其重量も變ずるものでないから、其の割り切れる部分の重量も同様に何等の變化を蒙らない。斯くの如く、金は如何に其價值が變動しようとも、價格の固定的標準として



常に同一任務を行ふのである。(三)

(三)「貨幣は常に價値の變動を來すであらう。而もそれは宛も完全に不動なものゝ如く、善く價値の尺度たり得るであらう。例へば貨幣の價値が減少したと假定せよ。而して其減少前に於て、一ギニアの貨幣が三ブツシエルの小麥或は六日間の労働を購買し得たとする。然らば價値の減少後に至つては、一ギニアは二ブツシエルの小麥、或は四日間の労働を購買する事しか出来なくなる。此二個の場合に於て所與の貨幣に對する小麥及び労働の關係、小麥と労働との相互關係が推量せられ得る。換言すれば、吾人は一ブツシエルの小麥は二日間の労働に等しいと云ふ事を斷言し得るのである。此事は——測定價値を包含すると云ふ事——價値の減少後にも價値の減少前にも均しく容易に行ひ得るわけである。價値の尺度として一物が卓越してゐると云ふ事は其物自身の價値の變動性とは何等の關係を有しないのである。」ベエリー著「貨幣及び其變遷」(Bailey, Money and its vicissitudes) 倫敦、一八三七年刊、十一頁。

後に金屬流通の本質に關して述べる如く、歴史的行程は、價格の標準としての職分を盡す貴金屬の重量が變動若くは減少するに至つても、猶ほ且つ同一重量名を保存すると云ふ結果を生み出したのである。例へば英國の磅は其本來の重量たる封度の三分の一より少く、聯合以前のスコットランドの磅は僅かに其の本來の重量の三十六分の一に過ぎず、フランスのリーヴルは七十四分の一、スペインのマ

ラヴェデは一千分の一より少く、ポルトガルのレイはそれよりも更に比率が小さいのである。斯くの如くして金屬重量の種々なる貨幣名は、歴史的に、其一般的な重量名より分離してしまつたのである。(四) 尺度の單位、其割り切れる部分、及び其名稱の決定は一方に於ては純粹に傳統的のものであり、他方に於て、流通範圍内に於て普遍性及び必然性を有しなればならないから、それは法律によりて規定されねばならない。斯くの如くして純粹に形式的な作用が政府に委ねられる。(五) 貨幣の材料として役立つ金高は既に社會上に存在して來た。國を異にするにつれ、價格の法律的標準も自然に異なる。例へば英國に於て金屬重量としてのオンスはベニイウエイト、グレーン、トロイカラット等に分たれてゐるが、貨幣の測定單位としての金のオンスは $\frac{3}{8}$ のサヴァレンに、サヴァレンは二十志に、志は十二片に分たれる。故に二十二カラット金百封度(千二百オンス)は四千六百七十二サヴァレン、十志に等しくなる。さり乍ら、國家的境界の消滅する世界市場に於ては、貨幣尺度に關する國家的性質は消滅して金屬の重量が一般的尺度となるのである。



(四)『今日に於て單に觀念的名稱たるに過ぎぬ種類の貨幣こそ、諸民族間に於て最古の貨幣である。是等は何れも一度は現實の貨幣たりしものであつたが故に、計算貨幣として用ひられたのである。』ガリアニ著「貨幣論」(Galvani, Della Moneta) 一五三頁。

(五)浪漫的なアー、ミューレルは云ふ。「吾人の考ふる處に據れば自主獨立の君主は金屬貨幣に命名し、これに社會的な名價、種類、階級、稱號を興ふる權利を有してゐる。』(アー、ミューレル著「政治術原理」(A. H. Müller, Die Elemente der Staatskunst) 第二卷、二百七十六頁、ベルリン、一八九九年刊) 稱號を云ふところ、宮中顧問官殿としては、如何にも正しい言分である。が併し、彼は實體を忘却してゐる。彼の「考ふる處」が如何に混亂してゐるかは、例へば次の文を讀んでみるがいふ。「何人も鑄貨價格の正しき決定に如何に多く頼るべきかを解してゐる。殊に英國の如く政府が大なる自由を以て無償にて貨幣を鑄造し、(ミューレル氏は英國の官吏は鑄貨費用を自分のポケットから出すとでも思つてゐるらしい) 何等の造幣料をも取らない國に於ては殊に然りである。此種の國に於ては、金の鑄貨價格が其市價以上に非常に騰貴してゐるならば、即ち今日の如く一オンスの金に對して三磅十七志十片二分の一を以て支拂ふ代りに、金一オンスの價格を三磅十九志と定めるなら、總ての貨幣は造幣局に流入し、造幣局にて得られた銀は市場に運ばれ、市場に於て廉價に求められる金と交換される。斯くの如くして廉價なる金は新に造幣局に流入し、こゝに貨幣制度は混亂に陥るのである。』(二八〇頁—二八一頁) ミューレルは英國の造幣局の秩序を維持しようとして、反つて自ら混亂

に陥つてしまつたのである。志及び片は銀及び銅の記號にて代表せられた金一オンスの一部分の單純な名稱に過ぎざるものを、彼は金一オンスは金、銀、銅にて測定し得ると考へ、斯くして英國人は三個の標準價値を以て祝福せられてゐると考へたのである。貨幣の尺度としての銀は金と共に一八一六年にジョージ三世の時、六八に對して五六だけ形式上、初めて廢された。法律には一七三四年ジョージ二世の頃既に四二對して一四だけ廢されてゐたが、實際に於ては、もつと以前から行はれてゐた。ミューレルが特に所謂高等の經濟學上の思想に到達するに至つた事情は凡そ二つある。第一は經濟事實に對する彼の廣汎な無智、第二は哲學に對する彼の哲學的、狂信的態度これである。

商品の價格即ち觀念的に轉化された金量は、今や金標準の貨幣名にて表章せられる。かくて英國では一クオターの小麦は一オンスの金に等しいと云ふ代りに三磅十七志十片二分の一に等しいと云ふ。斯くの如くして、總ての價格は同一名義にて表章せられるのである。諸商品が其交換價値を生ずる特有の形態は諸商品が互に幾許の價値を有するかを語る貨幣名に變ぜられる。更に貨幣自身は計算貨幣となる。(六)

(六)『ギリシヤ人は何の爲めに貨幣を使用するかと問はれた時、アナカルミスは計算に



と答へた。』アテネヴス著「學者の晩餐」シユツイグホイセル編、(Athen, Delph. I. IV, Schweighäuser) 第二版、一八〇二年刊。

商品が頭腦中、紙の上、言葉の内に於て、計算貨幣に轉じると云ふ事は、或種の富が交換價值の見地より觀察される場合には常に起るのである。(七)其轉換に對して吾人は金の物質を必要とする。併し假想的のものとしてのみ必要なのである。一定數の金オンスを以て、一千梱の綿絲の價值を測定し、更に此一定數のオンスをオンスの計算名たる磅、志、片にて表現しようとするには、現實の金の一原子をも必要としない。斯くの如くして一八四五年のロバーツ、ビールス銀行條令の發布せられる迄、スコットランドに於ては一オンスの金も流通しなかつた。其當時、金オンスは英國の計算標準には三磅十七志十片二分の一と表象せられ、價格の法定尺度として役立つてゐたのであつた。同時に、銀はシペリアと支那との間の商品取引に於て——假令、其取引は眞に物々交換に類する者であるとは言へ——價格の標準として役立つてゐる。故に、計算貨幣としての貨幣は其尺度の全單位若くは其一部分が眞に鑄造せられてゐるか否かの問題とは何等關係がないのである。

ウィリアム勝利王時代の英國に於ては一磅が存在してゐたが、當時のそれは純銀一封度であつた。志は一封度の二十分の一であつて、單に計算貨幣として存在してゐた。而して片は銀一封度の二百四十分の一であつて、當時の最大銀貨であつたのである。是に反し、今日の英國に於ては、志も片も金一オンスの一定分割部分に對する法定計算名ではあるけれども、現實には存してゐない。計算貨幣としての貨幣は全く觀念上に於てのみ存在し得るのであつて、現實に存在してゐる貨幣は全く他の標準に依つて鑄造せられるのである。斯くの如くして、北米に於ける英國植民地の流通貨幣は、十八世紀に至る迄もスペイン、ポルトガルの鑄貨であつた。併し計算貨幣は全然英國本土と同一であつたのである。

(七) アダム、スミスを夙に佛譯した一人なるガリーニイアは計算貨幣の使用と現實貨幣の使用との間の比率を確定せんとする奇抜な着想をした人である。彼は其比率を一に對する十とした。

(八) 一七二三年のメリーランドの法令によると煙草が法定貨幣である。併し、煙草の價値は英國金貨に還元せられる。即ち煙草一封度は一ペニーであつた。此の事はローマ時代の *leges barbarorum* を想起せしめるものである。即ち後者にありては一定の



貨幣額が牡牛、牝牛等にて表はされる。此場合には金銀では無く牡牛、牝牛が計算貨幣の現実的物質であつた。

價格の標準としての貨幣は商品價格と同一計算名稱にて現れる故に、従つて例へば一オンスの金は一噸の鐵と同じく三磅十七志十片二分の一にて表章せられるが故に、貨幣の此の計算名は鑄貨、價格と呼ばれた。其結果、金は金自身の物質にて評價せられ、而も他の總ての諸商品と異り、國家によりて固定の價格を與へられると解する驚くべき見解が生じた。之れ畢竟、一定の金重量の計算名の確立を此重量の價值と感違ひしたものである。(九)金が價格決定の要素として、従つて計算貨幣として役立つ限りに於て、金は何等の固定的な價格を有せざるのみならず、何等の價格をも有してはゐないのである。價格を持たんが爲には、即ち普遍的等價物として特殊なる商品に於て表章せられんが爲めには、此他種の商品は流通行程に於て金と同じ排他的職務を行はねばならない。然し乍ら、總ての他種商品を排斥する二個の商品は又交互に相排斥し合ふのである。それ故に、金と銀とが貨幣として、即ち價值尺度として法律上併存する處に於ては、それ等を同じ物質として

取扱はんとする無益な企てが常になされてゐる。同一の労働時間が常に同一比例の金と銀とに體現されねばならぬと假定するのは、誠に金銀は同一物質である事、而も價值少なき金屬、即ち銀の一定量は常に一定量の金の小片であると假定することである。エドワード三世の治世からジョージ二世の時代に至る間の英國貨幣史は金銀の價值比例の法律上の確定と、事實上の價值動搖との撞著から生じた、絶え間なき混亂の歴史である。或時は金が、又或時は銀が其實際の價值よりも法外に騰貴した。而して其實際價值以下に評價せられた金屬は流通界から回収され、熔解され若くは輸出されたのである。其當時、二金屬の價值比例が再び法律に依つて變更せられたが、新らしき名目價值は總て元と同じく實際の價值比例と抵觸するに至つた。現今に於ても金の價值は銀の價值と比較すれば細小ながら低落してゐる。それは印度、支那の大なる銀需要に原因してゐるのである。フランスに於ては此現象が大仕掛けに現れ、銀の輸出及び金の爲に銀が流通界から驅逐せられたのであつた。一八五五年、一八五六年、一八五七年の間にフランスに於ける金の輸出に對する其輸入超過は四千百五十八萬磅で、銀の輸入に對する其



輸出超過は千四百七十萬四千磅に上つた。誠に、金銀が法定價值尺度であり、従つて双方とも支拂に於て、受取られねばならぬが、然し誰れも隨意に其一方を以て支拂ひ得るフランス其他の諸國に於ては、價值の實際騰貴した方の金屬は打歩を生じ、他の商品の如く實際の價值よりも高く評價されてゐる方の金屬にて其價格を測る。かくて後者のみが専ら價值尺度として役立つ。此方面に於ける總ての史的經驗は、結局次ぎの一點に歸着する。即ち、二種の商品が法律に依て價值尺度の役目をなす場合、實際は唯、一方のみが價值尺度たる地位を占めるものである。(十)

(九) 例へばダヴィット、アーカート氏の「通語集」(David Urquhart, The Familiar Words)には次の文句が有る。「金の價值は金自身によりて測られる。如何なる物質が他の物に於ける自己自身の價值を測り得るだらうか? 金の價值は金自身の重量にて測られ、該重量の製造名稱の下に表はされてゐる。即ち一オンスの金は數個の磅に價し、磅の分割部分にも價してゐる。是れは尺度を製造するものであつて、標準を設定するものではない。」

(十) 「商業の尺度としての貨幣は他の各種の尺度の如く出來得る限り確實に保持されねばならない。併し、諸君の貨幣が二個の物質より成り、而も其價值比率が常に變動しつゝある場合に於て、此事は望み得らるゝ事ではない。」ジョン、ロツク著「利子下落に

關する考察」(John Lock, Some Consideration on the Lowering of Interest) 一六九一年刊、(七版倫敦、一七六八年、全集三卷、六五頁)



## 貨幣の尺度單位に關する學說史

諸商品は價格として、觀念上に於てのみ金に變ぜられ、從つて金は觀念上に於てのみ貨幣に變ぜられるといふ事情は、聽て貨幣を以て觀念的の尺度單位とする學說を生み出した。金と銀とのみが計算貨幣として働くのであつて、假想された金と銀とのみが諸々の價格の決定に役立つのだといふ事が主張せられ、磅、志片、タレル、法等の名目は金銀の一定重量若くは一定の體現せられた勞働を表はすものでなく、寧ろ觀念的な價值原子を表章すると云ふことが説かれた。斯くて例へば一オンスの銀の價值が騰貴するとせば、それは斯の種の原子を一層多く包含するものであり、從つて一層多くの志にて測定せられ且つ鑄造せられねばならない事となる。此教理は英國に於ける最近の商業危機に際して復活し、而も一八五八年七月の銀行條令委員會の報告書に附せられた二冊の特別報告書にも議會に於ける議論が代表されてゐる。併し此教理の起源は十七世紀の末葉に遡つてゐる。ウイリアム三世の時代の英國に於て、銀一オンスの鑄貨價格は五志二片であり、

十二片は一志と呼ばれた。其の標準に依れば、例へば六オンスの銀重量は志と呼ばれる貨幣の三十一個數に鑄造される。然るに一オンスの銀の市場價格は鑄貨價格以上に騰貴し、五志二片より六志三片となつた。換言すれば一オンスの銀地金を購買する爲めに六志三片を支拂はねばならなかつた。鑄貨價格が唯單に一オンスの銀の割り切れる部分に對する計算名に過ぎないならば、一オンスの銀の市場價格は如何にして其鑄貨價格以上に騰貴する事が出来るのであるか？ 此謎は容易に解く事が出来る。其當時流通してゐた銀貨五百六十萬磅中、四百萬磅は磨損され、削り取られてゐたのである。試験の結果、二十二萬オンスの重量ある筈の銀五萬七千磅は、唯十四萬一千オンスしか無いことが明かになつた。造幣局では常に同一標準に依つて鑄造を續けて來たのであるが、實際に流通してゐた輕量の志は其名目が示して居るよりは、より少ないオンスを代表してゐた。從つて市場に於ては、一オンスの銀地金に對し、此輕量となつた志が、より多くの量を以て支拂はれねばならなかつた。かくの如くして生じた混亂の結果、一般的改鑄が決められたが、時の大藏大臣ロンドンデスは、一オンスの銀の價值が騰貴したのである



から、以前の五志二片の代りに、人爲的に六志三片が鑄造せられねばならないと述べた。斯くの如くして、彼は實際に於て、一オンスの價值の騰貴が其割り切れる部分の價值の下落を生み出したと主張したのである。併し、彼の此議論は唯正當な實際上の目的に對する裝飾としてのみ役立つ。國債は輕量の志にて募集されたのに、是を重量な志にて支拂ふ事が出来るだらうか？ 諸君が名目は五オンスだが實際は四オンスしかない銀を受取つた時に、彼は四オンスの銀を支拂つたと云ふ代りに、名目の五オンスを支拂つたと云つたのである。然しそれは金屬内容が四オンスに止つてゐる。そして彼は諸君が嘗つて一志の五分の四の志と呼んだものを一志と呼んだのである。斯くの如くしてロンドンデスは理論上は計算名稱に重きを置き、實際上是金屬内容に拘泥したのである。反之、彼の反對者は單に名義にのみ重きを置き、二割五分乃至五割を輕減した志も充分の重量を有する志と同一なりと傲し、かくて金屬重量のみを重視すべきことを主張したのである。

ジョン・ロツクは有ゆる形態に於て新ブルジョアを代表した人である。彼は勞働階級及び貧民に對して工業家を、時代後れの高利貸に對して商業家を、國債所有

者に對して財閥貴族を代表したのであつた。更に彼はブルジョアの理性は人類の正常なる理性なることを彼の著書に於て力説し、且つロンドンデスと論戰を試みた。ジョン・ロツクは勝つた。一ギニアにつき十志若くは十四志にて借り入れた貨幣は二十志のギニアにて償還されることとなつた。(一)サー・ジェームズ・スチュアートは此全取引を反語的に次の如くに要約した。「國家は租税にて、債權者は資本及び利子にて、非常の利得を得てゐる。而して其主なる損失者たる國民は満足してゐる。何んとなれば、彼等の標準（彼等自身の價值の標準）は低下せられてゐないから。(二)スチュアートは、國民は商業の發展に一層熱心となるであらうと考へた。併し彼は誤つてゐた。其後の殆んど百二十年と云ふのは同一の五分々々状態が繰り返されてゐた。

(一)ロツクは云ふ。「以前、半クラウンであつた者が今は一クラウンと呼ばれてゐる。價值は常に其金屬内容によりて定められる。諸君は一貨幣の價值を變ずることなく、其銀重量の二十分の一を減ずることが出来る。同様に諸君は其銀重量の二十分の十九迄も減ずることが出来る。此理論に従へば微小のファージング貨幣もクラウンと呼ばれる時は、六十倍も多く銀量を含むクラウン小貨幣が購買し得るよりも、より多



くの香料や絹や、他の諸商品を購入し得る。諸君の行ひ得る總ての事は銀の小量に對し、より多量の極印と名稱を與へる事に存してゐる。然し乍ら、負債を償却し商品を買買するものは銀であつて、名稱ではない。若しも貨幣價値の騰貴が銀貨の可分部分に隨意の名稱を與ふることを意味するに過ぎないとすれば、即ち例へば一オンスの銀の八分の一を一ベニーと呼び得るが如きものであつたならば、貨幣は眞に誰れでも好きなだけ高價に評價する事が出来よう。同時にロツクはロンドンデスに應答して、市場價格が銀貨價格以上に騰貴するのは、『銀價の騰貴の爲めではなく、輕量となつた銀貨の爲め』であると言つてゐる。磨損した七十七志は完全な重量を有する六十二志の意味しかないのである。最後に彼は流通銀貨の重量の減少と云ふ點より離れて、英國に於ける銀地金の市場價格が或る範圍迄、鑄貨價格以上に騰貴し得ることを正當に述べてゐる。それは銀貨の輸出は禁ぜられてゐるが、銀地金の輸出は許されてゐるからである。(前掲書五四頁—一六頁散見) ロツクは公債問題の焦點に論及しないやうに非常に注意を拂つた。それは彼がデリケートな經濟問題に觸れる事を避けたのと同じである。デリケートな經濟問題と云ふのは銀貨に對する銀地金の交換率及び比率は、通貨が其現實の銀量輕減に比例して特に不活潑になるものではないと云ふ事である。吾人は流通要具の章に於て此問題の一般形式を考察する事にしよう。ニコラス・バーボンは「輕量新貨幣鑄造に關する研究、ロツク氏の考案に答ふ」(Nicholas Barbon, A discourse concerning coining the new money lighter, in answer to Mr. Lockes Consideration.) (一六九六年刊、倫敦)

(一) なる書に於てロツクを困難なる地位に陥れんと試みたが無効であつた。

(二) スチュアート、前掲書二卷、一五四頁。

英國哲學に於て神祕的理想主義の代表者なるバークレーが、貨幣尺度の觀念的單位に關する學說に理論的轉向を與へたのは、事物の順序として當然のことであつた。彼の理論は實際の「大藏大臣」の敢てなし得ない處であつた。彼は次の諸問を考察してゐる。「クラウン、リール、英貨ポンド等の名稱は單純なる比率名(即ち抽象的價値自身の比率)として考へられざるや否や? 金、銀、紙幣等は(價値比率の)計算、表示、移動に對する値札或は計算者ならざるや否や? 他人の產業(社會的勞働)を支配する力は眞の富にあらざるや否や? 而して貨幣は眞に斯くの如き勢力を運び、表示する爲の値札若くは表象ならざるか否か、而も値札が如何なる物質より構成せらるゝかは重大の問題ならざるや否や?」(iii) 此處に於て吾人は次の如き混亂を發見する。第一は價値の尺度と價格の標準との間の混亂、第二は尺度としての金銀と流通要具としての金銀との間の混亂、即ち是れである。貴金屬は流通場裡に於ては、記號を以て置き換へる事が出来るのであるか



ら、バークレーは是等の記號自身は何ものをも代表せず、即ち單に抽象的な價值觀念を表現するに過ぎずと論結したのである。

(三)「質問者」の「貨幣討究」の章は甚だ優秀である。バークレーが他の個所に於て『北米植民地の發達は、總て凡俗の輩が想像する如く、金銀は國の富を致す上に必ずしも必要なものでないと云ふ事を恰も日の照らすが如くに明白にした。』と云つてゐるのは誠に其當を得てゐる。

貨幣を以て觀念的な尺度單位とする學説はサー、ジェームス、スチュアートに至りて十分の發達を遂げた。それは彼の後輩——彼の後輩達は彼を知らなかつたのだから、無意識的の後輩であつた——が何等の新説も新例も附加する必要を認めなかつた程のものであつた。所謂計算貨幣は販賣され得る事物の相對的價值を測定するに當つて發明せられたもので、同一部分に對する專斷的尺度に過ぎないものである。計算貨幣は價格<sup>(四)</sup>であるところの鑄貨とは全く異なる。總ての商品に對して比例的等價物となり得る如何なる實體も此世界には存在してゐないけれども、とにかく計算貨幣なる物は存在する事が可能である。計算貨幣は事物の價值に關しては角度に對する度、分、秒等、地圖や構圖に對する尺規と同じ職分を

行ふのである。總て是等の發明に於ては常に同一名稱が單位となるのである。是等總ての發明の有用性は單に比率を記すと云ふ一事に存してゐる。貨幣の單位に關しても然りである。かくて貨幣の單位は價值の一部に對し、不變的な一定の比率を與ふる事は出來ないのである。換言すれば貨幣單位は金銀若くは其他の商品の特定量に固定せられる事は出來ないのである。一度び單位が設定せらるれば、其單位を倍加する事に依つて吾人は最大價值に到達する事が出来る。それ故に、商品の價值は、一般的關係によりて商品の價值そのものに影響する種々の事情や、多くの人々の嗜好によつて定まり、其價值は唯その相互關係の變化するにつれてのみ觀察されねばならない。一般的な一定不動の標準による此比率の變化の確立を混亂せしむるものは、同時に商業上に有害な影響を與へるに相違ないのである。貨幣は單に同一部分の觀念的尺度である。若しも何が或る部分の價值の標準たるべきかと問はれたならば、吾人は度、分、秒の長さの標準は何んであるかと云ふ他の問題を提出することによりて是に答へんと欲する。その一部分は何物をも有してゐない。が唯一部分が決定されるや否や、事物の標準そのものの



本質に依つて、其殘餘の總ては比率的に定められねばならぬ。此種の概念的貨幣の例はアムステルダム銀行貨幣、及びアフリカ海岸のアンゴラ貨幣である。(五)

(四)こゝで價格と云ふのは眞の等價物を意味してゐる。これは十七世紀の英國の經濟學者の慣用であつた。

(五)スチユアート、前掲書、二卷、一五四—二九九頁。

スチユアートは此處に於ては、唯單に貨幣が流通界に於て、價格の標準並びに計算貨幣として現れる現象のみに付て論じてゐる。種々なる商品が夫々、價格表に十五志、二十志、三十六志と記載されてゐるとせよ。其場合、その價值量の比較について眞に吾人をして注意を拂はしむるものは、銀の實體でも、志の名稱でもない。今や、十五、二十、三十六等の數的比率が總てを語つてゐるのであつて、一といふ數が唯一の尺度の單位となつてゐる。純抽象的な比率の表章は結局單に抽象的な數的比率に外ならない。かくてスチユアートは、矛盾を避ける爲めに、金及び銀のみならず、それ等の法定洗禮名をも見棄てねばならなかつたのである。彼は價值の尺度が價格の標準に轉換することを了解してゐなかつた爲め、自然に、尺度の單位として役立つ一定量の金を他の數量に對する尺度として解せずして、價值自身に

關係すると信じてゐた。諸商品は其交換價值を價格に轉換する事に依つて、同一名稱の量として表はれるが故に、彼は之れ等商品を同一名稱に還元する尺度の特質を否定したのである。而も種々なる數量の此比較に於て、尺度の單位として役立つ數量は因襲的のものであるが故に、彼は何等是れを確定する必要なしと考へたのである。彼は圓の三百六十分を角度と呼ばずして、百八十分の一を角度と呼んだのである。従つて直角は九十度の代りに四十五度にて測定せられ、銳角及び鈍角も亦是れに準じて測定せられる事となる。然し彼の言と拘はる處なく、角度の尺度として、以前の如く、第一に量的に一定せる數學上の數字、圓、第二に量的に一定せる圓弧が存在してゐる。スチユアートは自己の提出した經濟的例證に關して、一方に是を論駁すると共に他方何ものも證明せずして終つたのである。誠に、アムステルダムの銀行貨幣は唯單にスペインのダブルン貨幣——其充分の重量ある貨幣は唯徒らに銀行の金庫中に貯藏せられたに反し、其流通貨幣の方は世間に於ける激しい磨擦の爲めに輕量になつてゐた——に對する計算名に過ぎなかつた。アフリカの理想主義者に關しては、吾人は批評的旅行家が其本體をもつ



と詳しく語る迄、其運命のまゝに任かす事とする。(六)佛國革命時代に發行せしフランスの國債はスチュアートの觀念に従へば——「國家財産百弗の國債」——殆んど理想的貨幣と稱することが出来る。實に該國債は其代表してゐると思はれる使用價值即ち、沒收せられた土地を特殊化してゐる。併し、尺度の單位の量的定義は忘却せられ、従つてフランは無意味なる語となつてしまつてゐる。此國債フランがどれだけ土他を代表してゐるか、は公賣の結果に俟つのである。さり乍ら、實際上、此國債フランは銀貨に對する價值表章として流通し、従つて其減價は此銀標準に依つて測定せられるのである。

(六)最近の商業恐慌の生じた時、アフリカの理想貨幣が英國では或方面に於て熱情的に賞讃された。其の後、其棲家はアフリカの海岸からバーベライの中心地方に移動した。バーベル人が商業工業恐慌から解脱してゐるのは彼等の通貨が理想的な尺度單位を有すからである。と論ずる人がある。商業及び工業は商業恐慌及び工業恐慌の必然的條件であると云ふ方が單純でよいではないか？

英蘭銀行が現金支拂を停止した時に於て、貨幣論上の論争ほど收獲の多いものはなかつた。紙幣の下落及び金の市場價格が鑄貨價格以上に騰貴した事は、銀行

側の辯護者をして再び理想的貨幣單位に關する教理を喚起した。ロイド、カスレリーグは貨幣の尺度單位を以て「商品と比較した揚句に生じた價值意識」であるとなし、其の混亂した見解を現はすに、同じく混亂した古典的表現を以てしたのであつた。諸々の事情がバリー平和條約の締結後數年にして現金支拂を復舊せしめた時、ウイリアム三世の治下にローンデスが惹起したと同一問題が殆んど同じ形態を以て生じて來た。莫大なる國債、二十年以上も積み積つた私債、固定した負債は、下落した銀行紙幣を以て契約されて居たのであつた。名義上は四千六百七十二磅十志なれども、實質は二十一カラット金百磅しか代表しないところの銀行紙幣にて、如何にして是等の債務を償還し得るであらうか？パーミンガムの銀行家トーマス、アットウッドはローンデスの再現となつて出て來た。債權者は其の拂込んだ名義上の志よりも、より多くの名義上の志を受取るべきであるが、しかし一オンスの金の七十八分の一が古い鑄造標準に依つて一志と呼ばれてゐるならば、今や例へば一オンスの九十分の一が一志と命名されねばならない。アットウッドの門下は「小志人」(little shillingmen)のバーミング派として知られてゐる。



る。一八一九年に始つた理想的貨幣尺度に關する論争は一八四五年までも猶ほサー、ロバート、ピール及びアットウツドの間に引續いてゐる。貨幣の尺度としての職分に關する限り、彼の理智は次の章句の中に要約せられて居る。「サー、ロバート、ピールはバリーミンガムの商業會議所との論戰に於て次の如き質問を發した。曰く諸君は如何なる意味にて磅の語を使用するのであるか。磅とは何であるか。——反對に價値の尺度單位を何であると解してゐるのであるか。三磅十七志十片二分の一が一オンスの金であるか、或はそれは唯一オンスの金の價値であるか。若し三磅十七志十片二分の一が金一オンス自體であるならば、何故に諸物は其固有名稱の儘で呼ばれないのか、而も磅、志、片、といふ代りにオンス、ペニイウエイト、グレーションと呼ばばいゝではないか。然るとき我々は物々交換の制度に復歸する。……若くは然らずして其れは價値を意味するのであるか。若しも金一オンスが三磅十七志十片二分の一であるならば、何故にそれは時に依りて或は五磅四志の價値を有し、或は三磅十七志九片の價値を有するのであるか。磅なる名稱は價値と關聯するものである。しかし金の不變の重量に固定せられて價値と關聯

するものでない。磅は觀念上の單位である。……労働は生産費を包含する實體であつて、鐵と同じく金に對して相對的價値を與ふる。故に如何なる特種の計算名が一人の男の一日の労働若しくは一週の労働を表はすために用ひられようとも、斯くの如き名稱は生産せられたる商品の價値を表章する。」(七)

(七)『通貨問題』、グーミニ文集、倫敦一八四四年、二六〇—二七二頁。

此の最後の語は實に理想的貨幣尺度に關する不明瞭な概念を打破し、而も其眞意を毀損してしまつた。金の計算名たる磅、志等は一定量の労働時間に對する名稱でなければならぬ。労働時間は價値の實體であり、固有の尺度であるから、これらの名稱は實際上、價値の比率自體を代表するものである。換言すれば、労働時間は貨幣の眞の尺度單位なりと云ひ得るのである。此以上バリーミンガム派の事を論議することは罷めるが唯一つ附言して置かねばならぬ事は理想的貨幣尺度論が紙幣の兌換性、或は不兌換性云々の問題に對する論争に新たなる重要を附與したと云ふ事である。若しも紙幣が其の名稱を金或は銀から得たとすれば紙幣の兌換性即ち金若くは銀に對する其交換性は法律が如何に是を制定して居やう



とも、經濟法則の問題となるのである。プロシアのターレル紙幣は、法律上不兌換のものであつたが、一般の商取引に於て銀ターレル以下の價值しか持たなくなり、兌換不能となつた場合に於て直に其價值の下落を見たのである。それ故に、英國に於ける不換紙幣の熱心なる主張者は理想的貨幣尺度説に隱家を求めたのであつた。若しも貨幣計算名稱たる磅、志等が一定量の價值原子の名稱、即ち一商品が他種商品と交換せられるに至りて或時は多く或時は少く吸収若くは喪失する一定量の價值原子の名稱なりとすれば、例へば英國の五磅紙幣は其性質上、鐵や綿と何の關係も無い如く、金に對しても全く獨立的なものである。貨幣の名稱が金若くは他種商品の一定量と理論的に等しいといふ事が捨てられた以上、其兌換性に對する需要即ち特種化された事物の一定量と實際上等しかるべしといふ事に對する需要は紙幣の概念自身によりて自ら排斥せられる事となるのである。

貨幣の直接的尺度單位としての労働時間に關する理論を最初に系統的に説いた人はジョン・グレイである。(八) 彼は國民中央銀行をして其支店の手を経て種々の商品の生産に費された労働時間を報告させた。生産者は商品の交換に當り、價

値に關する公の證書、即ち其商品が包含してゐるだけの労働時間に對する受領證書を受取るのである。(九) 而して一週間労働、一日労働、一時間労働等の此等銀行紙幣は同時に銀行倉庫に貯藏せられた總ての他種商品の等價に對する小切手となるわけである。(十) これは英國の現行制度の基礎的原則であつて詳細に計畫せられ、而も至る處に實行されてゐる。グレイは云ふ。『此制度の下にありては吾人が貨幣にて購買する如く、貨幣に對して容易に販賣することが出来る。生産は一樣になり、需要の錯誤原因なるものは決して無いのである。』(十一) 總ての貴金屬は他種商品に對して「特權」を喪失し、『バター、鶏卵、衣服、キャラコ等と共に彼れに相當した固有の位置を得ることとなり、従つて其の價值は宛もダイヤモンドの價值の如く吾人の特別の興味を引かなくなるであらう。』(十二) 『吾人は擬制的な價值尺度たる金を保持し、一國の生産力を束縛すべきであらうか？ 或は、價值の自然的尺度即ち労働に訴へて一國の生産力を解放すべきであらうか？』(十三)

(八) ジョン・グレイ著「社會組織論、交換の原理に關する一考察」(John Gray, The Social System. A Treatise on the principle of Exchange) エヂンバラ一八三一年刊。同著者「貨幣の本質及び



使用」エヂンバラ一八四八年を比較せよ。二月革命後グレイはフランス假政府に建議書を送った。其建議書は、フランスは「労働組織」の必要はないが、「交換組織」の必要があると云ふ事を書いてあるものであつた。其計畫については彼の考案になる貨幣制度が充分運用されるものであつた。正直なるジョンは彼の著「社会組織論」の發刊後十六年にして、恰例なるブルードンによりて同一發見に對する特許が奪はれるであらうと云ふ事を豫想し得なかつた。

(九)「貨幣は單に一の領收書に過ぎない。即ち貨幣の所持者が富の國民的貯藏に對して一定の價値を貢獻したと云ふ證據、若くは彼が富の蓄積に貢獻した他人から同一價値に對する權利を獲得したと云ふ證據に外ならない。」グレイ著「社会組織論」六三頁。

(十)「測定せられたる價値が以前に生産せられあるが故に其れを銀行に預け、必要の時は何時でも引出し得る。国立銀行にどんな財産でも預ければ預けた同一物を引き出さなくても同一價値のものでありさへすればなんでも引き出すことが出来る。」六八頁。

(十一)同書十六頁。

(十二)グレイ著「貨幣論」(Lectures on money) 一八二頁。

(十三)同一六九頁。

労働時間が價値の固有の尺度であるとすれば何故に之に伴ふて他の外的尺度が存しなければならぬのか？ 何故に交換價値は價格に發展して行くのである

か？ 何故に總ての商品は交換價値の特種なる體現中に轉換せられる一個の排他的商品即ち貨幣にて價値を測定するのであるか？ これ等の問題こそグレイが解決せねばならなかつた問題であつた。彼はその問題を解決する代りに、諸商品は社會的労働の生産物として互に關係する事が出来るのだと云ふことを考へた。然し乍ら、諸商品は各自の能力に應じてのみ互に關係する事が出来るのである。諸商品は孤立した獨立の個人労働の直接の生産物であつて、私的交換の行程に於ける其移動により普遍的社會労働たるの實を現さねばならないのである。換言すれば、商品生産に基く労働は個々の労働の普遍的移動に依つてのみ社會的労働となる。然るに、グレイは商品に包含せられた労働時間は直接の社會的労働時間であると假定し、是によりて其労働時間を共通の労働時間若くは直接的に聯合したる個々人の労働時間なりと假定するに至つたのである。斯くの如くして實際に於ては、金銀の如き特殊なる商品は普遍的労働時間の現化として他種商品と對立する事は出来ない。交換價値は價格に轉化せられない。他方に使用價値は交換價値となる事が出来ない、生産物も商品となることが出来ない。斯くの如



くんば資本主義的生産組織の根柢自身が破滅する事となる。乍然、此事たるやグレイが心中に考えてゐた事ではない。生産は商品として生産せられるが、しかし商品として交換せられるものではない。彼は此殊勝なる希望の實遂行を國民銀行に托した。社會は一方に於て銀行の形態を通じて私的交換の諸條件とは全く獨立した個人を造り、而も他方に於て社會は其個人をして私的交換に立脚する生産を繼續せしめようとする。さりながら彼は商品交換から生ずる貨幣制度のみを「改革」せんと欲したのではあるが、論理の結果として、資本主義的生産條件を否定せんとするに至つたのである。斯くの如くして、彼は資本を國有資本に轉換し(十四)土地を國有財産に轉換した。(十五) 而して彼の銀行を精密に觀察するならば、それは一方に於て商品を受取り、他方に於て爲された仕事に對して證書を發行するのみならず、生産自身に干渉するものである事が發見せられるであらう。彼は最後の著書たる貨幣論に於て、彼の謂ふ所の労働貨幣を以て純然たる資本主義の改革を目的とするのである事を説明せんとしたが、彼は明白な矛盾に陥り、身動さもなくなつた。

(十四)「總ての國の事業は國有資本にて行はるべきである。」(ジョン・グレイ「社會組織論」一七一頁)

(十五)「土地は國有財産に變化せらるべきである。」(前掲書、二九八頁)

總ての商品は貨幣であるといふグレイの理論は、彼の不完全な、從つて誤れる商品の分解から演繹せられたものである。「労働貨幣」「國民銀行」「商品倉庫」を有機的に結合するといふ事は空想的幻影であつて、獨斷が普遍的法則となつて吾人を眩目せしめようとしてゐる。商品をして直に貨幣なりとし、若くは商品中に包含せられた個々人の労働を以て直に社會的労働とする獨斷は、銀行が商品を信用し而も是に準じて業務を行ふといふ單純の事實によつて自ら眞實味を失つてゐる。此場合に於て、破産が實際上の批評家の役目をするといふ事は確かな事である。グレイの著書及びグレイの心中に隠れてゐたものは労働貨幣は貨幣を、また貨幣と共に交換價值を、また交換價值と共に商品を、最後に商品と共に資本主義的生産形態を解脱せんとする敬虔な希望に對する力強き經濟上の主張であつたといふ事が、一部はグレイ以前に、一部はグレイ以後に英國社會主義者の手によりて



明かにせられた。(十六)然しブルードン君及び其の一派の人々は今も貨幣の貶謫、商品の開揚が社會主義の眞髓であることを熱心に主張し、斯くして商品と貨幣との間の必然的關係に對する根本的誤謬を社會主義者に歸せしむるにいたつたのである。(十七)

(十六)ウイリアム・トムソン著「富の分配に關する考察」(Thompson, an Inquiry into the distribution of wealth) 倫敦、一八二七年刊。ブレイ著「勞働の害惡と勞働の救済」リーツ、一八三九年參照。

(十七)アルフレッド・ダリモン著「銀行改革論」(Alfred Darimon, De la Reforme des banques) (パリ、一八五六年) は此種の歌劇的貨幣論の拔萃書として考へ得られる。

## (二) 流通要具

商品が價格決定行程に於て、流通能力を具有する形態を獲得し、且つ金が貨幣性を獲得したる後に於て、流通は商品の交換行程に伏在する矛盾を表現すると同時に是を解決する。諸商品の實際的交換、即ち材料の社會的轉換は、使用價值及交換價值としての商品の二重性の展開せられた形態の變化中に現れる。而も其獨特の形態變化自身は同時に貨幣の一定形態に結晶せられる。此形態の變化を叙述

することは、とりも直さず、流通を叙述することである。商品界及其分業組織の前提せられた後に於て、商品は交換價值の發展形態に過ぎないといふ事は吾人の既に觀察したところである。是れと同一方法にて流通は各方面の交換行爲と、其不斷の更新の潮流とを前提としてゐるのである。第二の前提は、諸商品は一定價格を以て交換行程に入るといふ事、換言すれば諸商品は交換行程に於ては相互に二重的存在として、即ち現實的には使用價值として、觀念的には——價格に於て——交換價值として現れるといふ事である。

倫敦の最も繁華なる通りには無数の店舗が並んでゐる。其飾り窓には世界の財寶例へば印度製のシヨール、亞米利加の連發拳銃、支那の磁器、巴里製のコルセツト、露西亞の毛皮、熱帶地方の香料を以て充たされてゐる。然し總て是等の享樂物には、磅志、片等の簡單なるアラビヤ數字を附した宿命的な白紙標が貼られてゐる。斯くの如きものが流通に現れてゐる商品の光景である。

## ル 商品の轉形

流通行程を精密に觀察すると、明かに二個の循環形態の存在することが分る。